國語科學講座

— VI —

國語法

文語法精說

木枝增一

株式會社
明治書院

國語科學講座

— VI —

國語法

文語法精說

木枝増一

株式會社
明治書院

目次

文語法精説

木枝増一

第一章　總　説

1　文法と國文法

我々の思想感情を音聲によつて表現したものを言語といふ。その言語を以て思想感情を表現する際には、その間おのづから一定の法則がある。この法則を文法といひ、その文法を研究する學問を文法學といふ。文法學を略して文法と言ふこともある。

國語とは同一國家に屬する國民が自國の言語を呼ぶ名稱である。國語が言語である以上、それを以て思想感情を表現する際には、その國語特有の法則が存在する。その國語特有の法則を國文法といふ。日本に於ける國文法は日本語の文法の謂であるから、日本文法と謂つてよい。

〔研究問題〕

（一）言語の本質と法則の實在との關係。　（二）國語の定義。

（三）言語學と文法學との關係。　（四）國語學と文法學との關係。

2　文語法と口語法

我が國語には文法と口語との二種類がある。文語といふのは主として平安朝時代の言語の法則に則つた國語で、口語といふのは主として我々が日常の談話に用ひる國語である。口語と文語とは本來同一のものであつた筈であるが、種々の原因理由によつて今日の様に分化したのである。而して文語の文法を文語法といひ、口語の文法を口語法といふ。我が國語では文語法と口語法との間に多少の相違がある。詳しく言へば文語にも時代的變遷があるやうに、口語にも筆寫や講演に用ひるものと、談話に用ひるものとの間に多少の相違がある。文語法・口語法はそれぞれその相違をも含めての概稱である。從つて、文章を記すに用ひる國語が文語であり、口で話すに用ひる國語が口語であるといふ様なことは必ずしも適當な區別法ではない。

〔研究問題〕

（一）文語・口語乖離の原因。　（二）國語に於ける文語・口語乖離の歷史的經過。

（三）口語の種類の深究。　（四）時代的に變遷するものは口語に限るとの說。

3　文法の種類

文法はその目的と方法とによつて普通之を理論的文法と實用的文法とに大別し、理論的文法をまた記述的文法と說明的文法とに分ち、說明的文法を更に歷史的文法と比較的文法と一般的文法とに分類する。

- 文法
  - 理論的文法 Theoretical Grammar
    - 記述的文法 Descriptive Grammar
    - 說明的文法 Explanatory Grammar
      - 歷史的文法 Historical Grammar
      - 比較的文法 Comparative Grammar
      - 一般的文法 General Grammar
  - 實用的文法 Practical Grammar

〔一〕理論的文法と實用的文法　理論的文法といふのは、言語の法則的事實を科學的に研究することを目的とするものであり、實用的文法といふのは、言語の法則的事實を技術的に研究することを目的とするものである。文法學が一つの科學である以上、理論的文法こそ眞の文法であつて。正しく話し正しく書くことを目的とする實用的文法は眞の文法學に値しない。科學的研究には、その目的に外れたものは除去しなければならない。普通の文法書が實用的文法をも扱つてゐるのは便宜上のことであつて、科學としての文法學の關與すべからざることである。

理論的文法は更に之を記述的文法と說明的文法との二者に分類される。

〔二〕記述的文法　記述的文法といふのは、言語の文法的事實をありのまゝに記述するのである。國語を言語の自然現象として、存在する事實の通りに記述するのである。たとへば、

ゆかしげなき事なしも思ひそめ給ひて。（源氏物語）　爲さすまじき事の今日過ぐすまじきを打ちおきて。（枕草子）

しぬびつゝ來れど來かねて水尾が崎眞長の浦をまたかへりみつ。（萬葉集）

このさうぞくどもいとよし、よく縫ひおほせたりと譽むれば。（落窪物語）

心の内に思ふことをも隱しあへずなむむつれ聞えたまひける。（源氏物語）

の「そむ」「さす」「かぬ」「おほす」「あふ」は動詞ではあるが獨立に用ひられたことはなく、必ず上の動詞と熟語になつてのみ用ひられるとすれば、そのまゝに何等人爲的取捨を加へずに記述するのである。もし又活用形の揃つてゐない動詞があるとすれば、その活用形の缺けたまゝに、何等推測的補塡を加へずに置くのである。又その語が雅馴であらうが卑俗であらうが、用ひられ、存在してゐる語は、その用ひられ、存在するまゝに擧げ記すのである。かういふ

態度で言語現象を法則的に記述整理するのが記述文法である。而してこれは科學的文法の基礎をなすものである。

〔三〕**說明的文法**　說明的文法といふのは、言語現象をありのまゝに扱ふ點に於ては記述的文法と相違は無いのであるが、たゞ單にあるがまゝに記述整理するといふに止まらないで、その言語現象がどういふ風にして起つたか、如何なる原因や理由によつてかくの如き言語現象が起つたか、また如何なる言語事實の過程を通つてかくある樣になつたか、さういふ說明を言語現象に對して加へるのである。その說明を加へる點で記述的文法と區別されるのである。

說明的文法はその說明の方法的種類の相違によつて、歷史的文法・比較的文法・一般的文法の三種に分けられる。

〔四〕**歷史的文法**　歷史的文法といふのは、言語事實を過去に於ける言語の歷史的變遷の經過に照して說明しようとするものである。例へば「蹴る」といふ語は奈良朝時代には存在しなかつたと一般に說かれてゐる。然るに「蹶る」といふ語は奈良朝時代にも存在し、

蹈二堅庭一而陷レ股、若二沫雪一以蹶散(蹶散、此云二俱穢簸邏邏箇須一)(神代紀)

と見えて、當時ワ行下二段活用として活用してゐたと思はれる。これが平安朝の初期には、

蹶、萬乎古由(新撰字鏡)

とあつて、ヤ行下二段活用に活用してゐたことが分る。又淸和天皇の天安二年(一五一八)の識語のある、石山寺藏の大智度論には「蹶」の字に「コユ」の傍註がある。更に平安朝の中期には、

只今の太政大臣の尻はけるとも、此殿の牛飼に、手觸れてむや。(落窪物語)

とあつて、カ行下一段活用に活用してゐたことが知られるのである。この以後、

殿上人に、鞠けさせて御覽ず。(榮華物語)　蹴、クエル(類聚名義抄)

男の尻をふたと蹴たりければ、男被蹴けるまゝに忽に見えず。(今昔物語)

尻けよと言ひつる相撲に。(宇治拾遺物語)　閑子用ければぞ波はあがりける。(源平盛衰記)

の如くカ行下一段活用として存在してゐたのである。更に現代の口語ではこれがラ行四段活用として用ひられてゐるのである。この變遷經過は、恐らく「くう」(ワ行)といふ語が一種の類推のために「くゆ」(ヤ行)となり、更に音韻變化のために「こゆ」(ヤ行)となり、これが更に下一段活用に變化して「こえる」となり、それが約まつて「ける」となつたものであらうと言はれてゐる。(吉澤義則著「國語史概説」一五四頁—一五六頁)かくて下一段活用の動詞は奈良朝時代には無かつたといふことになるのである。その他、「隱る」「紅葉づ」「いさちる」「あらびる」「ゐなかびる」等の諸語に就いても時代による活用の變化を認めることが出來る。

この樣に、ひろく活用の種類に就いても、せまく一々の語に就いても、その時代的變遷を跡づけて説明しようとするのが歴史的文法である。併し、よく考へて見ると、この歴史的文法は、記述的文法の上に現れた言語現象を幾つか歴史的につなぎ合はせたものにすぎないとも見ることが出來るので(小林英夫著「批判的解説一般文法の原理」七〇頁)あつて、その基礎となるものは何處までも記述的文法であることを忘れてはならない。

〔五〕**比較的文法**　比較的文法といふのは、言語事實の説明をその言語と血族關係のある他の言語と比較して行はうとするのである。國語を朝鮮語や琉球語と比較して説明しようとする如きはその例である。又、金澤庄三郎博士が國語と朝鮮語とを比較して國語動詞の一元論を稱へて居られる樣なのはその實例である。

說明的文法中の歴史的文法は一國語内に於てのみ說明の材料を求めるのであるが、比較的文法は國語外の言語にまでその說明材料を求めるので、その材料範圍の擴張といふことになるのである。我が國ではまだ比較的文法はあまり發達して居らない。

〔六〕一般的文法　比較的文法が同族語を集めて比較することによつて言語現象を說明しようとするのに反して、一般的文法は同族語ばかりでなく、ありとあらゆる人類の言語現象を材料として考察し、その間から一つの共通原理を發見して、これによつて言語事實を說明しようとするのである。併し事實上になると人類の言語の中で今日十分に研究の行き屆いてゐるのは印度歐羅巴語族だけと言つてよい位であるから、一般的文法を成立させることは現在の處では不可能に近い。唯、部分的の措辭法などでは類似の言語現象を發見することは多少あるであらう。

なほ同じ名稱の、しかも新しい科學的の意味をもつた一般文法なるものの提議に就いては、小林英夫氏の「一般文法成立の可能性について」（昭和七年五月）、同じく「批判的解說一般文法の原理」（昭和七年十二月）の二書に有益なる論考及び紹介がある。我々はかういふ意味に於ける日本文法の一般原理が確定されることを今後のわが國語學界に期待したいものである。

〔研究問題〕

（一）文法研究に於ける科學的態度。

（二）一般文法の本質（小林英夫氏所說參照）。

4　言語の變化と文法

言語は時と處とに應じて絶えず變化するものである。併しその變化は決して急激に行はれるものでなく、漸を以て進むものであつて、ある程度に達して始めて我々はその變化を認

識するのである。これは言語の音韻的方面に於ても、或は語彙的方面に於ても、或は語法的方面に於ても同樣である。而して文法は言語現象の事實を對象として研究しようとするものであるから、たとへ僅少の變化であつても之を見遁がしてはならないのである。併しその變化事實よりも研究は絶えず遲れて行かなければならないのである。言はゞ文法的研究は言語現象の背後を追跡するやうなものである。しかも文法はその言語事實から一定の法則を歸納しようとするのであるから、言語の絶え間なき變化現象に應じて文法といふ法則を變へようとする時には、その新しい言語の變化現象が部分的のものであつたり、又一時的のものであつたりする時には、直ちに之を以て法則歸納の材料にする譯にはゆかないのである。たとへば、

破笠類にかけてはこじくとも天の下にてみのは頼まじ。（碎玉話）

中頃近江の國にこつじきありく翁ありけり。（發心集）

に見える「こじく」といふ動詞の如きは、その時限りで用ひられなくなつてゐるから、これを文法の法則として歸納する譯には行かないのである。從つて言語の變化現象に應じて一つの法則が完全に歸納出來る頃には、變化は更に次に進んでゐるのである。故に、もし言語研究に實用的の要素を入れて、所謂實用文法の立場をとるならば、この絶えず變化してゆく言語事實と法則との間を調和的に連絡させてゆく必要を生ずるのである。我が國の文語文法は前にも述べた樣に、主として平安朝の言語の法則に依つて組織したものであるから、これを現代にそのまゝ適用しようとすれば、時代の差より生ずる言語變化の距りが、一種の障壁となるのである。實用的文法よりすれば此の障壁を除去しなければ、言語を圓滑に運用することが出來ない。この要求に應じて設けられたものが所謂「文法上許容ニ關スル事項」

である。

「文法上許容ニ關スル事項」は、明治三十八年十二月二日、文部省告示第百五十八號を以て發表せられたもので、制定の理由は次に示す理由書によつて明瞭である。

國語文法トシテ今日ノ教育社會ニ承認セラルルモノハ、德川時代國學者ノ研究ニ基キ、專ラ、中古語ノ法則ニ準據シタルモノナリ。然レドモ、之ニノミ依リテ、今日ノ普通文ヲ律センハ、言語變遷ノ理法ヲ輕視スルノ嫌アルノミナラズ、コレマデ、破格、又ハ、誤謬トシテ斥ケラレタルモノノ中、慣用最モ弘キモノ數件ヲ擧ゲ、之ヲ許容シテ、在來ノ文法ト並行セシメンコト、ヲ期シ、其許容如何ヲ國語調査委員會ニ諮問セシニ、同會ハ審議ノ末許容ヲ可トスルニ決セリ。依テ、自今文部省ニ於テハ教科書檢定、又ハ編纂ノ場合ニ之ヲ應用セントス。

右の許容事項に定められてゐる文法的事實は、記述的文法よりすれば、言語現象の儼然たる事實であつて、許容するとしないとにかゝはらず實在してゐるのである。これを許容するとか許容しないとか、或は如何なる變化現象のみを許容と認めるかといふのは、全く人爲的要素を加味した實用的文法の立場より言ふのであつて、科學的文法の範圍外のことであることを注意しなければならぬ。

「研究問題」

（一）「文法上許容ニ關スル事項」の文法的事實精査。（これには明治三十九年二月刊行の國語調査委員會著「現行普通文法改定案調査報告之一」によるが便利である。）

（二）言語の變化と歴史的文法との關係。

文法研究の内容にはその主點の置き處によつて、（一）品詞論、（二）文章論の二者を區別することが出來る。

5 文法の研究内容

品詞論は分析的研究であつて、一語一語の單語を對象としてその性質を究め、その性質に應じて分類を行ひ、その各類に就いてそれ等の作用を論ずるのである。

文章論は綜合的研究であつて、品詞論で研究した單語が文を構成する上に於て、如何る運用關係に立つて思想を表現するかを研究する。品詞論が文の個々の材料の研究であるのに對して、文章論はその材料の組立の研究である。而してこの二者は相依り相應じて文法研究の全きを期せしむべきものである。

なほ文法研究の内容に、發音・文字・假名遣を併攝してゐるものもあるが、これは國語學の研究問題であつて、文法研究の直接内容をなすものではない。文法學は國語學の一部門にすぎないのであつて、國語學は音韻・語彙・語法の三者に亙つて研究するのである。

さらに注意すべきことは、科學的文法の範圍に於ては、形式を文法研究の第一義としなければならぬことである。「三角形の内角の和は三直角なり」といふ文は形式が完備してゐるといふ點で、文法上は正しい文と言ふのである。と同時に、「三角形の内角の和こそ二直角なり」といふ文は、形式に誤謬があるから誤つた文とするのである。この意味に於て文法と論理とは必ずしも一致しないのである。文法は形態の如何を研究する學であるから、内容の如何は問題とはならない。その内容が形態となつて現れて來る時、始めて科學的に文法の問題となり得るのである。從つて科學的文法は形態的文法を措いて外にはあり得ない譯である。（小林英夫著「批判的一般文法の原理」一六頁參照）

「有り」と「無し」、「富む」と「貧し」、「老ゆ」と「若し」のごとき語を比較して見ると、その思想的論理の範疇よりすれば、夫々ともに同範疇に屬する語といふべきである。然るに文法上の品詞の分類よりすれば、一は動詞であり一は形容詞である。これその活用形態の五十音圖に於ける位置の形式を同じくしてゐないからである。また、文法上同一の格を表す語に數種あつたり、一語が數種の異なる格を表したりする事實、或は異なる文法的意味が同一の語によつて種々に表され、異なる語が同一の文法的意味を表すといふ樣な事實、これ等は孰れもこの思想の論理と語の論理との必ずしも一致しないことを示す例である。

之を要するに文法の研究は形態の規準に基いて、分析・綜合の二方法によつて歸納的に研究して行くのである。

〔研究問題〕

（一）語の論理と思想の論理との背馳する理由。　（二）語の論理と思想の論理との背馳の實例。

6　語の分類

前項に述べた分析的研究と綜合的研究とは相依り相俟つて完全なる文法學の全體系を成すのであるが、その兩研究に入るに先だつてまづ語の品別を行はなければならない。而して語の品別に當つては、これを單なる思想の論理に依つてのみ行ふことの不可なるは勿論であつて、語の論理に基き、これを思想の論理と調和せしめる如き標準に照らして行はなければならない。その標準といふのは次の三者である。

（一）形態（Form）　（二）職能（Function）　（三）意味（Meaning）

（一）形態（Form）　文法的に形態といふのは、ある語が如何なる種類の音から出來てゐるとか、その音の數が幾つあるとか、或はそのアクセントは何處にあるとかいふ樣な、音韻的方面をさすのではない。例へば、

冬去り春來る。　春來れども花咲かず。

の文に於て、「來る」は「キ」といふ音と「タ」といふ音と、「ル」といふ音とから成り、「來れ」は「キ」「タ」「レ」といふ音とから成るといふ樣なことを論ずるのではない。「來る」と「來れ」とは同一の語であるが、その語尾に「る」と「れ」とのちがひがある。このちがひは必ずこの語の職能上の差違から來てゐるに相違ない。即ち前者は文の終止に用ひられて言ひ切つてゐるが、後者は「ども」といふ助詞に連なつて或る條件を表してゐる。然るに「春」といふ語は前者と後者とで何等形の上で相違がない。かういふ異同を形態上の異同といふのである。要するに文法上の形態といふのは、意味と職能に應じて考へられたる語の外形である。

〔二〕**職能**（Function）職能といふのは、或る語が他の語と如何なる相關々係に立つかといふ關係形式である。この關係形式は連語內の場合に於ても考へられるし、文中に於ける成分間の場合に於ても考へられる。たとへば、

冬去り春來る。　來る春ごとに花咲く。

の文に於て、前者の「來る」と後者の「來る」との間には「春」といふ語に對しての關係を異にしてゐる。すなはち、前者の「來る」は「春」といふ主語に對して述語の役目をつとめてゐるが、後者の「來る」は「春」といふ語に對して形容詞的修飾語のつとめをしてゐるのである。

〔三〕**意味**（Meaning）意味といふのは、普通に辭書等に示されてゐる個々の單語の意味、所謂語彙的意味を言ふのではない。辭書に示されてゐる語彙的意味は一語一語の有つてゐる特異性を示すものであるが、文法的意味はその語の有つてゐる共通性を示すものである。從つて語彙的意味はそれぞれの語によつて一々意味を異にするのであるが、

文法的の意味は數個又はそれ以上の語が一つの群にまとまつて共通の意味を表すのである。たとへば、

冬去り春來る。　花笑ひ鳥歌ふ。

の文に於て、「去り」「來る」「笑ひ」「歌ふ」はそれぞれその語意を異にしてはゐるが、孰れも皆事物の動作を表してゐる。また「冬」「春」「花」「鳥」も同樣に示す內容は異なつてゐるが、事物の名稱を表してゐることに變りはない。又「一つ」「二つ」といふ語に就いていへば、前者が one であり、後者が two であるといふのは語彙的意味であつて、共に數を表してゐるといふのが文法的意味である。

以上、形態・職能・意味の三者を標準として語を分類すると次項に說く單語とか品詞とかいふものが表れて來る。

〔研究問題〕

（一）形態・職能・意味三者の相關々係。

7　單語と品詞

單語とは職能と意味の上から區分することの出來る言語の最小單位をいふのである。文法上取扱はれる言語として分解の極に達した單位をいふのである。卽ち分解すれば文法上の語として獨立の用をなさなくなるものをいふ。從つて思想としては單位であつても、これが語として分解出來るものは單語とは言へないのである。

梅（一單語）の（一單語）花（一單語）…………三單語
繪の具（一單語）…………一單語

木（一單語）の（一單語）根（一單語）…………三單語
矢の根（一單語）…………一單語

右の例に於て、「梅の花」は三單語より成つてゐる。從つてこれに修飾語（體言であるから形容詞的修飾語）を加へて

見ると、

美しい梅の花。　梅の美しい花。

右の兩者を孰れも成立させ得るのである。この後者の例が許されるのは「梅」と「の」と「花」との三單語の結合力が弱いからである。然るに、「繪の具」は一單語であるから、「美しい繪の具」とは言ひ得ても、「繪の美しい具」とは言ひ得ないのである。これ「繪」と「の」と「具」との語が緊密に結合して一單語となつてゐるため、その中間に他の修飾語を介在せしめ得ないのである。

なほ次の二例を比較して見よ。そこに面白い現象を觀察することが出來る。

烈しく運動せり。　烈しき運動せり。

副詞的修飾語は用言を修飾し、形容詞的修飾語は體言を修飾するのが原則であるから、「烈しく」といふ副詞的修飾語を上に戴いてゐる前者の「運動せ」は一單語の動詞でなければならぬ。同時に「烈しき」といふ形容詞的修飾語を上に戴いてゐる「運動せ」は「運動」といふ體言と「す」といふ動詞との二單語でなければならない。

つぎに單語である以上は、必ず文章構成上の直接成分となり得なければならない。たとへば、

彼は大人し。　君のみし泣かむ。

の前者の「し」は「大人し」といふ形容詞の語尾であるから、獨立して文の成分となり得る力はなく、「大人し」全體で文章構成の直接材料となつてゐるのである。之に反し後者の「し」は上の「のみ」といふ助詞と下の「泣く」といふ動詞の間に介在して、獨立の意味と作用とを以て文章構成の直接材料となつてゐるのである。これ接辭と單語との異なる所以

であつて、單語と單語との連接關係と接辭と單語との連接關係の異なる點に注意しなければならぬ。接辭は旣に成立してゐる單語に結びついて何等かの意義を加へることによつて更に一つの單語を作るだけの所謂造語成分で、直接文章構成の材料とはなり得ないものである。なほ用言の語幹も、一定の思想を表してはゐるやうに思はれる場合もあるが、これのみを以て文章構成の直接材料になることは特殊の場合の外は無いのであるから、完全なる單語といふことは決して出來ないのである。文法上の扱をうける基礎的單位は單語で、單語を分解した單語なるものは獨立しない。

品詞といふのは語の品類の意味であつて、或る人は詞品とさへ呼ばうとしてゐるものであつて、單語研究のために便宜的に設けた區分的單位である。即ち單語を曩に述べた文法的形態・職能・意味の上から分類して、各々獨立した文法的の特質を有する幾つかの群とし、その各々の群を稱する名稱である。

私は種々の說や理由や手續を參酌考慮して、單語を次の如く分類するのが妥當ではあるまいかと思つてゐる。

- 單語
  - 觀念語
    - 自用語
      - 概念語
        - 名詞
        - 代名詞
        - 數詞
        - （以上 體言）
      - 陳述語
        - 動詞
        - 形容詞
        - 形容動詞
        - （以上 用言）
    - 副用語 …… 副詞
    - 獨用語 ……
      - 接續詞
      - 感動詞

形式語 ┬ 補助語……………………助動詞
　　　 └ 關係語……………………助詞

觀念語といふのはそれ自身で獨立の或る觀念を表してゐる語であつて、獨立に文の成分となり得る語である。形式語といふのはそれ自身では獨立に何等の觀念をも表すことの出來ない語であつて、觀念語に附隨して始めて文の直接材料となることの出來る語であつて、觀念語の下に附隨するのをその形式的條件としてゐる。

自用語は文の主成分(主語と述語)となり得る語であつて概念語と陳述語との二に分れる。概念語といふのは文を構成する骨子となる概念を表す語、即ち陳述の主體となる語である。名詞・代名詞・數詞が之に屬する。陳述語といふのはその概念に對する陳述の基礎になる語である。動詞・形容詞・形容動詞がこれに屬する。

副用語といふのは獨立の觀念を表すのは自用語と同じであるが、直接に文の骨子となること、即ち文の主成分となることが出來ず、必ず他の觀念語に依據して用ひられ、文の第二次成分となる語である。副詞が之に屬する。獨用語といふのは、文の主成分とは獨立した成分として文の要素をなすものである。接續詞・感動詞が之に屬する。補助語といふのは觀念語に附屬して種々の意味を以て之を補助する語である。助動詞が之に屬する。關係語といふのはやはり觀念語に附屬して主としてそれの間の關係を示す語である。助詞が之に屬する。

なほ單語が二つ以上集つて、單語よりは稍々複雜なる觀念を表してゐるものを連語と呼ぶことがある。連語は一つの纏つた思想を言ひ表すものではないが、思想構成のための要素としての語群であつて、之を分解すれば幾つかの單語となるものである。

末濃・村濃・卷染。　朝と晝と夕。　めづらしく、をかし。（以上並列關係）

紫だちたる雲。　いとちひさく見ゆる。　よくも見やられず。（以上修飾關係）

右はいづれも連語である。連語と文とは之を外形の上より區別することは出來ない。文も一種の連語にすぎないのであるが、そこには一つの思想の統合作用が行はれて、それが表現されてゐなければならない。纏つた思想の表現といふのが之である。この點を深究すれば文法上興味ある問題に觸れることが出來よう。

〔研究問題〕

（一）接辭の本質。　（二）品詞區分の歷史的由來。

（三）國語に於ける品詞分類の歷史。　（四）山田孝雄博士の品詞分類論。（「日本文法論」參照）

（五）單語及び連語と文との關係。　（六）今日の品詞分類法にて完全に處理することの出來ない語はないか。

第二章　名　詞

8　體　言

體言といふのは實體を表す語といふ意味の名稱である。實體を表すといふのは概念を表すといふのと同義に考へ得るもので、作用に對する本體を表す意味である。「體」といふ語は元來「用」に對する語であつて、古く佛教及び宋儒の學に用ひられたものである。我が國で之を文法上品詞類別の用語に用ひたのは、鈴木朗・東條義門に始まると言ふが、これ等の人は宋儒の學に用ひられた語よりとり來つたのではなく、僧契沖は「和字」…佛書にて用ひる「體」「用」を借り來つて文法上の用語としたものと思はれる。なほこれよりはやく僧契沖は「和字

正濫鈔」の中で舉げた語の説明に就いて「體」「用」といふ語を用ひてゐること次の如くである。

> 廬　いほり　いほともいふ。農と旅とのいほりなり。萬葉に野べにいほりてとよみ、曾丹集に、いほりてならんとよみたれば、體用にわたる言なり。（「和字正濫鈔」卷二）

いま體言の有つてゐる文法上の特質を列擧すれば次の如くである。

（一）文の主格に立ち得る語であるといふこと。體言は種々の格助詞を下にとつて他の語に對して種々の資格上の位置に立ち得るのであるが、その中で體言の共通的特性として最も重大なのは、文の主語になり得るといふことである。こゝに體言の概念語としての本質があるのである。

（二）語形變化を有して居らぬこと。用言が陳述語として體言の叙述に用ひられるために、語形變化を有してゐる事實と相對的に考ふれば、體言に語形變化のないことは、副用語・獨用語・關係語などの語形變化を持つてゐないのとは、自らその意味を異にしてゐることに氣がつくであらう。

（三）普通、文法書には、體言は概念を表すものであるから、吾人の意識に於て一の箇體として認識せられるものは、之を單語で表す時は皆體言の資格を持つものである、と説いてある。たとへば、

> 人走るの「走る」は動詞なり。

の如き例がこれである。これは説かれてゐる通りで誤りはないが、體言の資格を持つといふことと、體言そのものになつてしまふといふこととは、嚴重に區別して置かなければならない。「帶（おび）」「霞（かすみ）」「霧（きり）」「光（ひかり）」「衝立（ついたて）」等の如き語は、もともと用言であつたものが完全に體言になつてしまつたものである。しかし前例の「走る」といふ如き

は、前例の文に就てのみ體言の資格を得てゐるのである。かういふ資格の得方は、體言以外の品詞にはないことであるから、これを體言の特質の一として考へることも出來よう。

體言に屬する品詞は、名詞・代名詞・數詞の三品詞である。その分類手續は、次の表に依つて示されてゐる通りである。

體言	實質體言		……名　詞
	形式體言	主觀的形式體言	……代名詞
		客觀的形式體言	……數　詞

實質體言といふのは一定の實質ある概念を表すものであつて、「花」といへば花に相當する一定の實質が定まつてゐて、他の花ならぬものでは代へることが出來ないのである。

形式體言といふのは一定の實質ある概念を表すものでなくて、吾人の考へ方によつて或るものをも、又その他のものをも表し得るのである。「我」は甲にとつても言ひ得るし、乙にとつても丙にとつても言ひ得るのであり、「三」は林檎の數をも、家の數をも、山の數をも示し得るのである。即ち、話者自身の主觀の立場によつて任意に指示し得たり、又實質ある概念を示すのでなくて、事物存在の形式を示すに過ぎない樣な、いはゞ相對的な體言を形式體言といふのである。

〔研究問題〕

(一) 體言といふ名稱の適否。　　(二) 體言の分類法。

9 名詞の本義

名詞は體言の一種で事物の概念を名稱として表した語である。その事物が具體的のものであらうと抽象的のものであらうと、それが名稱として言ひ表されてゐさへすれば名詞であつて、その内容の如何はとふところでない。

名詞は體言の一般的性質として、觀念語であつて語形の變化がない。二個以上の名詞が複合して複合語の名詞を作る時には、音韻變化の行はれることはある。「かぜ」(風)が「かざかみ」(風上)となり、「き」(木)が「このは」(木の葉)となり、「あめ」(天)が「あまのがは」(天の河)となる類はこの例であるが、これは名詞の文法的形態が變化したことではない。それは名詞の單なる語形變化であつて、このために名詞としての文法的意義や文法的職能には何等の變化も生じないのであるから、西洋語の格に應じて行はれる名詞の語尾變化と同一視することは出來ない。我々が助動詞にあるもの、例へば推量の「らし」等に就いて、同じ「らし」といふ語形でありながら、これに終止形・連體形・已然形の區別を立てて置くのは、その職能上の差違があるからである。これと思ひ合すれば上述の名詞の音韻變化が文法的形態の變化でないことに頷けるであらう。

10 名詞の性

國語の名詞には西洋語の名詞のやうに文法上の性(Gender)の區別は無い。男性・女性・中性などいふ名詞の性による區別は無い。併し、文法上の性の區別が無いといふことは、性の區別に關する名詞が無いといふことではない。「ちち」「はゝ」「をぢ」「をば」「あに」「あね」の如き名詞には性の區別による名稱の區別がある。これは名稱として表されてゐる概念の實體に性の區別があるから、その名稱にも區別があるにすぎない。この名稱の區別が何等他語との間に文法上の關係を惹起しないのであるから、これを以て文法上

の名詞の性と言ふことは出來ないのである。

〔研究問題〕

（一）性の區別に關する名詞の實例。　　（二）名詞の性に關して西洋語との比較。

11　名　詞　の　數

國語に於ける文法的數の觀念は甚だ薄弱であつて、名詞に於ても單數であるか複數であるかの區別が明瞭ではない。「人來る」や「花咲く」の「人」「花」は單數であるか複數であるか之を形態の上より判斷することは出來ないのである。これ又西洋語とその趣を異にする處である。たゞ國語に於ても或は疊語法により、或は接辭を加へて、「山々」「人々」「もろ人」「弟たち」の如く複數を表すことはあるが、これとて全ての名詞に規則的にあてはめる事の出來る方法でなく、またこのため名詞と他語との關係に文法的變化を來すのではないから、前項の名詞の性同樣、名詞の數として文法的に論ずる必要はない。

〔研究問題〕

（一）國語に於て名詞の數の觀念の發達せざる理由。

12　名　詞　の　用　法

名詞は他の語と如何なる結合關係に立つか。又、文章構成の成分として如何なる作用關係に立つか。この點より名詞の用法を研究してみると次の通りである。

（一）主格にたつこと。

春すぎて夏來るらし。（萬葉集）

（二）述格にたつこと。

春ごとに花のさかりはありなめどあひ見むことは命なりけり。（古今集）

（三）連體格にたつこと。（形修格）

夜も晝も、ただこの宮のけしき。（枕草子）

（四）副修格にたつこと。

香具山は　畝火を愛しと　耳梨と　相爭ひき　神代より　斯くなるらし。（萬葉集）

にげなきもの……下衆の家に雪の降りたる。（枕草子）

わが背子を大和へ遣るとさ夜更けて曉露に吾が立ち霑れし。（萬葉集）

（五）呼格にたつこと。

花の色はかすみにこめて見せずとも香をだにぬすめ春の山風。（古今集）

きりぎりすいたくな鳴きそ秋の夜の長き思はわれぞまされる。（古今集）

これら多くの格に立つに當つて、名詞單獨で用ひられる場合もあるが、多くはその下につく助詞によつてその職能を果すのである。右の諸格のうち副修格の本義に就いては異論異説も多いのであるが、これは文章論を俟つて明瞭になる事實である。

13　名詞の敬讓　敬讓に關する形式の發達は、國語特有の現象であつて、國語の特質としては注意すべきものであり、國民性及び國民生活との關係に重要なる意義を有するものである。併し文法としてはその内面的意義の如何に拘らず、その形式的方面に留意すれば足りるのである。

敬譲の名詞はその成立より分類すれば二種に分れる。一は成立の當初より敬譲の意味を含んでゐるものであり、一は敬譲の意味無き語に接辭を加へて敬譲の意を表すものである。前者は「仰せ」「思召」「召立」の如きこれであり、後者は「おほみ心」「おんぞ」「姉君」の如きこれである。又敬譲の名詞はその性質により尊敬の名詞・謙譲の名詞・鄭重の名詞の三種に分れる。

尊敬の名詞は對者及び一般の者に對する尊敬の意を表す名詞である。

おぐし　おほ君　み位　おほみこと　おほん時（接頭語を加へたもの）

母君　姉御　貴女上（接尾語を加へたもの）

謙譲の名詞とは自己若しくは自己に關係あるものを他に對して謙遜卑下していふ名詞である。

せがれ　拙者　舍弟　愚妹　寸志　微衷

鄭重の名詞といふのは對者の尊敬又は自己の謙遜等の意識なく、單に物事を鄭重に言ふに用ひる名詞である。

おんかへりごと　おほん時　御挨拶　御禮

以上、孰れもその實例には乏しくない。

〔研究問題〕

（一）敬譲の名詞の實例蒐集。　（二）敬譲の名詞構成の接辭の研究。

14　名詞の種類

名詞の分類の標準を、その表す事物そのものの性質によつて具體名詞と抽象名詞、普通名詞と固有名詞、種族名詞と物質名詞、集合名詞と單體名詞等に分けることがあるが、西洋

語ならばいざ知らず、國語に於てはさういふ分類は全く必要がない。もし強ひて區別を殘しておくならば固有名詞と普通名詞とのそれ位のものであらう。それも文法的必要といふよりは實用的便宜の上からである。

次に名詞の分類の標準をその成立にとつて、本來名詞と轉成名詞とに分けることがある。これも名詞である以上同一の扱を與へればよいのであつて、その成立より名詞としての文法的性質を異にすることはないのであるから、區分の絶對的必要はないのであるが、區分の道程には文法的考察を加へ得る點があるから便宜擧げておかう。本來名詞といふのは、語の成立の當初から名詞として生れたものであり、轉成名詞といふのは、元來は名詞でない他の品詞が轉じて名詞となつたものである。轉成名詞には次の如き種類がある。

(一)動詞の連用形から名詞となつたもの。

光　霞　氷　帶　謠

(二)動詞の終止形から名詞となつたもの。

茂(しげる)　勤(つとむ)　進(すすむ)　勝(まさる)　薫(かをる)　（以上人名）　かげろふ(陽炎)　すまふ(相撲)　しのぶ(忍草)

(三)形容詞の語幹から名詞となつたもの。

赤　黒　白　青　（但しこれに就いては議論がある。）

(四)形容詞の語幹に接尾語をつけて名詞としたもの。

青さ　高み　寒さ　弱み

(五)形容詞の終止形から名詞となつたもの。

あかし(燈火)　　すし(鮨)　　からし(芥子)

(六)感動詞から名詞となつたもの。

哀れ

以上二種の分類の外に、名詞が固有語であるか外來語であるかによつて固有名詞と外來名詞とを區別する場合がある。これも共に國語である以上同一に扱へばよいので、その語の郷里調べは文法の仕事ではない。わが國語の漢語を多く含んでゐることや、西洋との交渉以來多くの西洋語を國語化したことも縷說する必要のない所である。唯何處までは外國語で、何處からが國語としての外來語であるかといふことは、國語學或は言語學の問題ながらむづかしい問題である。(安藤正次著「國語學通考」二七九頁—二九三頁參照)

更に第四の分類として名詞を實質名詞と形式名詞とに分ける分類がある。實質名詞といふのは名稱に對してそれに相當する一定の實質概念が(具體的にせよ抽象的にせよ)あるものを指し、形式名詞とはその名稱に對して一定の實質的意義をもつてゐないもので、單に名詞としての一般的形式しかもつてゐないものをいふのである。從つてこの形式名詞を用ひる時は、その上に必ず之を制限する語を加へて用ひるのである。しかしその職能に於ては他の實質名詞とは變りのないものである。

そは我が欲するところにあらず。　　すつぽんのことを上方にてはまるといふ。

すまじきものは宮仕なり。　　かゝることを彼の言ふ筈なし。

右の例に於ける「ところ」「こと」「もの」「筈」が形式名詞であることは、次の例と比較して見れば明瞭であらう。

處變れば品變る。　　　　**事急なり。**

物を粗末にすべからず。　　　弓の筈破損せり。

なほこの形式名詞の例として「頃」「方(はう)」「方(かた)」「うち」「譯」「通り」「爲(ため)」「積(つもり)」「由」などを擧げる人もある。之等の中にはその性質を有つてゐるものもある樣であるが、全部をそれとは斷じ難い點もあると思ふ。形式名詞の特質はその內容の漠然としてゐる處にあるので、「走る」ことも「こと」であれば、「歩く」ことも「こと」であり、「望む」ところも「ところ」であれば「考へる」ところも「ところ」である。この點は恰も動詞サ行變格活用の「す」の如く、動作・作用を表す點は普通の名詞と違はないが、如何なる動作・作用もひろく指す事が出來るから、實質が殆ど無いといつてよいので、山田孝雄博士はこの點で、これを「形式用言」と名づけてをられる。恰もこの「す」の樣な性質をこの形式名詞は有つてゐるのである。たゞこの形式名詞を、さきにあげた形式體言(代名詞・數詞)と混同しない樣にする必要がある。

なほこの形式名詞の上にあつて之を修飾制限する語に就いては、湯澤幸吉郎氏の「修飾語に關する考察」(「國語と國文學」昭和六年五月號)と題する論文に有益なる說がある。用言にかゝる語に補語と副詞的修飾語との二つがあるならば、これと相對的に體言にかゝる語にも補語と形容詞的修飾語との二つがなければならぬ。然るに體言にかゝる形容詞的修飾語は說かれてゐるが、體言にかゝる補語は說かれてゐないといふ說である。この說によればこゝにいふ形式名詞の上にある語はすべて體言にかゝる補語に當る譯である。

〔研究問題〕

（一）固有名詞と普通名詞との本質的區別。　　　（二）西洋外來語名詞の語彙的種類。

(三)用言にかゝる補語の例。

(四)名詞にして他の品詞に轉換するものは無きか。

第三章　代　名　詞

15　代名詞の本義

代名詞が體言中の形式體言の一種であつて、觀念語であり語尾變化の無いことは今更說くまでもない。代名詞はよく名詞の代りに用ひられる品詞であるといふ風に考へられてゐるが、實は今一歩深く立入つて考へるべきで、代名詞は名目に代りに用ひる詞といふ意味である。即ち事物の名稱を用ひないで、直ちにその事物そのものを指示するために用ひる詞である。從つて名稱の分らない事物でも、未だ名稱の附けられてゐない事物でも、「あれ」「これ」「それ」と自由に指示し得るのである。名詞は as name として用ひられ、代名詞は for name として用ひられる詞であると說かれてゐるが、全くその通りである。

代名詞に於ては事物の指示といふことが重要なる本質である。この指示といふことを除けば代名詞の代名詞たる所以が失せてしまふ。指示詞とか指詞とかいふ名稱の方が代名詞の本質はよく表してゐるのである。而して前にも述べた様に、代名詞は名詞の實質體言であるに對して數詞と共に形式體言であつて、その意義に對して一定の實質ある實在を有しないのである。從つてその指示に當つては話者とその指示物との關係に於て何を指示しても差支ないと同時に、指示者の主觀と、被指示物の客觀の關係の相違によつて、同一物が或は「これ」となり、或は「それ」となり、或はまた「あれ」となり得るのである。同じ「甲」といふ人間も、甲自身が指示すれば「われ」となり、對者から指示されれば「なんぢ」となり、第三者から指示されれば「かれ」となるのである。名詞たとへば「本」或は「山田」が如何なる位置から

眺められても誰から指されても「本」であり「山田」であるのとは大いに異なる所以である。

国語の代名詞には、名詞と同じく文法上の性・數の區別をたてる必要がない。たゞ人代名詞には女だけに用ひられる者が少數あり、複數を表す形式が多少あるにすぎない。併し之とても勿論文法上着目する必要のある形式ではない。

16 代名詞の種類

代名詞は指示する事物の性質に從つて、之を人代名詞・事物代名詞・場所代名詞・方向代名詞の四種類に分けるのが普通である。且つ代名詞はその指示の方法によつて所謂稱格といふ位置關係の區別を生ずる。人稱代名詞に於ける自稱（第一人稱）・對稱（第二人稱）・他稱（第三人稱）・不定稱、事物・場所・方向の三代名詞に於ける近稱・中稱・遠稱・不定稱がこれである。今この稱格を各種代名詞に配して表示すれば上揭の如くなる。

種類＼稱	自稱	對稱	他稱 近稱	他稱 中稱	他稱 遠稱	不定稱
人代名詞	わ われ あ あれ おの おのれ	な なれ なんぢ きみ	／	／	か かれ あ あれ	た たれ
事物代名詞			こ これ	そ それ	か かれ あ あれ	いづ いづれ なに
場所代名詞			ここ	そこ	あそこ あしこ かしこ	いづこ いづく いづら
方向代名詞		／	こち こなた	そち そなた	あち あなた かなた	いづち いづかた

以上四種の代名詞の外に反射指示代名詞といふのがある。これは指示者の意志とは無關係に、事物の實體そのものをさす代名詞である。即ち

指示者と被指示物との關係如何を離れて、換言すれば相對的關係を離れて絶對的に實體そのものを指すのであつて、その用ひられるに當つてはその指すべき體言が一度表れたる後に、これの本體をさすのに用ひられる。之を反射といふのは、被指示物より出でて再びその被指示物をさすこと反射に似てゐるからである。

反射指示代名詞は「おのれ」といふ語一語だけであつて、その用例は次の通りである。

伊夜彥のおのれ神さび青雲のたなびく日すら小雨そぼふる。（萬葉集）

女はおのれを喜ぶ者の爲に顏つくりす。（枕草子）　白き花ぞおのれ獨りゑみの眉開けたる。（源氏物語）

紅葉せぬときはの山に住む鹿はおのれなきてや秋をしるらむ。（後撰集）

風ないたみ岩うつ波のおのれのみ碎けて物を思ふ頃かな。（詞花集）

なほ右の「おのれ」の決して副詞でない事は、次の「おのれ」が、「おのづから」「おのれと」「おのづと」「ひとりでに」の意味の副詞であるので分るだらう。（勿論これは「おのれ」には次に述べる「みづから」と意義の類似があるので、かく副詞に轉用したものと思ふ。）

松の木のおのれ起きかへりてさとこぼるゝ雪も、「名に立つすゑの」と見ゆるなどを……（源氏物語）

この「おのれ」に似た語に「みづから」といふ語があるが、之は本來は別の詞であつて、右の副詞の例の「おのれ」と同じ副詞である。これは他の事に依らずして起り又行ふ意味の接尾語「づから」が「み」について出來た語であること、「心づから」「足づから」「手づから」「口づから」「おのづから」と同型の出來方の語である。反射指示の「おのれ」は上の體言を再示してゐるのであるが、「みづから」は下の用言を限定してゐるのであることで兩者の差異が明瞭である。

なほ反射指示の「おのれ」が人稱代名詞の自稱に用ひられるのは轉用である。而して「おのれ」の原形は「おの」であつて之に「れ」が附いたものであるから、「おの」の形に於ても反射指示及びその轉用の人稱代名詞の自稱として用ひられること次の例の通りである。

反　射　指　示　　橘は於能が枝枝成れれども、玉に貫く時同じ緒に貫く（天智紀）

人稱代名詞の自稱　甚(かなへり)稱二吾人(おのが)之心(こころに)一。

〔研究問題〕

（一）代名詞を名詞とする論。　（二）他品詞より轉化した人代名詞。

17　代名詞の用法

代名詞は體言であるからその用法は前章で述べた名詞の用法に準じて考へればよい。且つこれら代名詞の用法は山田孝雄博士の「奈良朝文法史」(二一頁—八一頁)及び「平安朝文法史」(七頁—六〇頁)に詳述されてゐる所であるからこゝには詳述しない。たゞこゝには「この」「その」「かの」「あの」に就いてのみ考へて置きたい。

事物代名詞の原形「こ」「そ」「か」「あ」の用法は古くは今日の如く極限されてゐなかつた。その例は次を見て知ることが出來るであらう。

よき人見きとこを誰か知る。（萬葉集）　ほとゝぎす春日なきしてこゆ鳴きわたる。（萬葉集）

こもふさはず。（古事記）　こしよろし。（古事記）

此の坡の山に雪は降りつつ。（萬葉集）　このもかのもにかげはあれど。（古今集）

こや君が手をわかるべきなり。(源氏物語)　あさましうこはいかなることぞと思ひまどはるれど。(源氏物語)

馬なめて朝ふますらむその草深野。(萬葉集)　君がやどに花ぞ咲きたるそこ見れど心もゆかず。(古今集)

その事となく物ぞ悲しき。(伊勢物語)　そがなかにも人々あまたいみじくかよふ所なり。(大和物語)

そはいかならひたまふらむと。(宇津保物語)　そのかなはずば今はわがたからゐにかひなし。(宇津保物語)

そもあまりにおぼめかしういふかひなき御心ちなり。(源氏物語)

それこそはよのつねのことゝてとりまぎらはしつゝ。(源氏物語)

かの人の思ふらん心のうち。(源氏物語)　思へども人めつゝみの高ければかはと見ながらえこそ渡られね。(古今集)

御有様なにやかやとむづかしういゝしませ奉り給ふ。(源氏物語)

あの北の方はいみじう病みふしけり。(落窪物語)

酒十島寮にゆゝかぎりありければ雲立つ山をあはとこそみれ。(大和物語)

然るに現代に於ては以上の諸用法の中、格助詞「の」を伴つて連體語となる以外の用法はすつかりすたれてしまつた（僅かに「何やかや」が用ひられてゐるにすぎない）。然らばこの「この」「その」「かの」「あの」を文法的に如何に處理すればよいか。指示形容詞などいふ名稱を附けようとしても、活用もなければこれのみにて述語になることも出來ないから國語としては不適當である。このまゝ代名詞としておかうとしても「こ」「そ」「か」「あ」そのものが體言の最も重要なる主格の位置にも立つことが出來ないとすると、それにたとへ助詞「の」が結びついたとしても之を代名詞として扱ふのは妥當でない樣に思はれる。又勿論「この」「その」「かの」「あの」を代名詞と格助詞の二單語に分けて

「こ」「の」、「そ」「の」、「か」「の」、「あ」「の」とする事は文法的事實から言つて出來難い。そこで湯澤幸吉郎氏の様に、「ある」「さる」「あらゆる」「いはゆる」等と共に連詞（連體言の意味）と呼ばうといふやうな説も起るのである（この説に就いては「國語と國文學」昭和六年一月號所載「等閑に附された一品詞」參照）。又、その用法の現實性を尊重して之を接頭語として扱つてはどうかといふ様な説も起るのである。

さて熟々考へて見るのに、「この本」の「この」は「本」に對して如何なる職能を果してゐるであらうか。若し「本」を純粹の事物代名詞の近稱で呼ぶならば、「これ」と言へば足りるのであつて「この」は不用である。又單に「本」とだけいふならば何等の稱示も「本」は受けないのであつて、話者と「本」との關係は寸毫も明かにはされてゐないのである。又之を「汝の本」と言ふならば、「本」の所有主が「汝」であるといふことになつて、「汝」と「本」との關係が格助詞「の」に依つて極めて明かにされてゐるのである。然るに「この本」に於ては果して「こ」と「本」との關係が「の」に依つて「汝の本」の如く明瞭になつてゐるであらうか。成程「汝の本」の如く明瞭にはなつてゐないかも知れないが、話者と「本」との關係は「こ」の近稱の原意が働いて、「本」が話者から離れて存在してゐるのではないといふことが分るのである。分りはするが、「汝の本」の如く格助詞「の」が獨立の用法を有つてゐるのではなくて、「こ」と「の」は結合して一單語の性質を帶び、唯「こ」の原意に依つて話者の近くにある本であるといふことを示してゐるに過ぎなくなつてゐるのである。即ち代名詞本來の性質である事物の名目に代へて用ひるといふ用法ではなくて、單に近くにあるといふ意味で「本」を指示してゐるに過ぎないのである。この意味からすれば接頭語とするのが妥當らしくも思はれる。接頭語の中にも意義を添ふるものがあつて、體言の上について或意味で形修的になつてゐると見られる場合もあるからである。

ま夜中（眞正の夜中の意）　き酒（生木のまゝの酒の意）

す肌（飾のない肌の意）　を篠（小さい篠の意）

うひ孫（はじめての孫）

しかし接頭語である以上、それは獨立の單語ではなくて下の語と一緒になつて一つの單語を作る造語成分にすぎない。然らば「この本」はこれで一つの單語であるか。「この本」といふ一單語は無い。何故ならば「この」と「本」との間には他の單語を介在せしめることが出來るからである、卽ち次例の如く。

「この美しき本」　「この新しき本」

之に反して、接頭語は獨立の單語では無いのであるから、接頭語と下の單語との間に他の單語を介在せしめることは出來ないのである。出來たらそれは接頭語ではないのである。

ま靜かなる夜中（「靜かなる ま夜中」とはいへる）　き甘き酒（「甘き き酒」とはいへる）

す美しき肌（「美しき す肌」とはいへる）　を多くの篠（「多くの を篠」とはいへる）

うひ愛らしき孫（「愛らしき うひ孫」とはいへる）

右の如く言へない所から考へて、「この」を接頭語とする事は出來ないのである。（同様の理由により「ある」「さる」「あらゆる」「いはゆる」なども接頭語ではない）。故に湯澤氏のやうに「連詞」とするか、「大言海」のやうに「連體形語」といふ様な名稱を設けるかするのでなければ、やはり代名詞の一種として、その用法の極限せられたものと考へて置くのが穩當ではあるまいか。暫らく後攷を俟つことにする。

〔研究問題〕

(一)本項の問題解決。　(二)「わが國」の「わが」の處理。

(三)代名詞に於ける種類及び稱格の轉用。　(四)「あ」「あれ」と「わ」「われ」との關係。

18　古代特有の代名詞

「し」といふ代名詞がある。これ古代特有の代名詞であるが、「し」は人稱代名詞の對稱及び事物代名詞の中稱に用ひられてゐる。

しがなけば誰かかけむよあたら墨繩。(雄略紀)　しが語らへば何時しかも。(萬葉集)

しが母をとらくを知らず、しが父をとらくを知らに。(萬葉集)

以上は人稱代名詞の例であるが、次は事物代名詞の例である。

老人も女の童兒もしが願ふ心たらひに撫でたまひ。(萬葉集)　椿、しが花の照りいまし、しが葉の弘りいます。(古事記)

枯野を鹽に燒きしが餘り琴に作り。(應神紀)

右はいづれも奈良朝時代の用例であるが、平安朝時代のものにも稀にはある。

あな荒々しの書疑や、しが身のほど知らぬこそいと心うけれ。(落窪物語)

次例の「さ」はこの「し」の變化した形と思はれる。

さが髮をとりてかなぐりおとさむ。さが尻を搔き出でて、ここらのおほやけ人に見せて恥見せむ。(竹取物語)

この「し」は「そ」の轉じたものかと思はれるが、「そ」と「し」との區別は明瞭でない。山田孝雄博士の「奈良朝文法史」(六六頁―六七頁)には次の如く見えてゐる。

「そ」と「し」との區別は十分に明ならず。一面より見れば「し」は人の指示に用ゐ、「そ」は人以外の指示に用ゐたりと見ゆる點多し。然れども一概にはいふべからぬは「しが花」「しが葉」などの例あるを見ても知らるべきなり。又新古の別あるかといふに、この點も多少存在するが如し。即「し」は古くして稍廢滅に近づきたる詞なる證はその用法局せるものにても知らるべく中古期に入りてはその形殆なくなりゐるを見ても察せらるべきなり。要するにこの區別は文獻上の論議としては未決の問題なりとす。

〔研究問題〕

（一）この他の「いまし」「みまし」「わけ」「い」等の用法。　（二）「し」について「文學」昭和八年九月所載「萬葉集の「し」の字の訓について」（佐伯梅友氏）參照研究。

19　代名詞の敬讓　事物・場所・方向の代名詞には敬讓は無いが人代名詞には敬讓がある。それも多くは他より轉來した代名詞に多い。「小生」「野生」「迂生」等の自稱に於ける、「貴君」「貴殿」「大兄」等の對稱に於ける、「こやつ」「そやつ」「かやつ」等の他稱に於ける、いづれも敬稱もしくは謙稱である。人代名詞の稱格の區別によりて表るゝ敬讓は相當注意すべきものである。ことに口語に於けるは文語のそれよりも區別の度が甚だしい。これ等は國語の本質として注意すべき現象である。

第四章　數　詞

20　數詞の本義　數詞は體言の中の形式體言の一種であつて、事物の存在狀態を數量・順序で表したものである。從つてその事物の實質が何であらうと構はない。「三つ」といへば、石でも蜜柑でも年齡でもあてはめることが出來る。これが即ち數詞の形式體言たる所以であり、かねて名詞と異なる點でもある。

數詞が觀念語であつて形態變化のないことは他の體言と變りがない。
數詞は事物の數量を量り、又順序を數へる語である。數詞が單に事物の數量・順序の名目を表すだけの語にすぎないのならば、之を名詞の中に入れてもよいのであるが、一品詞として體言中に位置を占めてゐるのは、この量り數へるといふ動的の特質があるからである。これは恰も代名詞が事物を指示する性質を有つてゐるのとよく似てゐる。量り數へるといふことは數詞の根本的特質である。

21 數詞の用法

數詞には、數量・順序を量り數へること、數量・順序の名目として用ひること、連體語となること、副詞的修飾語となること、などの用法がある。

(一)數量及び順序を量り數へること。

朝顏の花咲きぬ。一二三四五、五つ咲きぬ。

彼の家は角より一軒目二軒目三軒目、多分三軒目なるべし。

右の用法が單に數の名目を示してゐるに過ぎない(二)の用法と異なることに注意しなければならぬ。

(二)數量・順序の名目として用ひること。

一三五は奇數にして、二四六は偶數なり。　九の三分の一は三なり。

七に八を加ふれば十五となる。　道程三里に達す。　遂に第一位を贏ち得たり。

右の諸例に於ける數詞の文章上の成分關係に注意してほしい。

(三)連體語となること。

唐崎の一つ松は夜の雨に名を得たり。　古の七の賢き人どもも欲りするものは酒にしあるらし(萬葉集)

これ等の如く格助詞をとりて形容詞的修飾語となることは體言の通有性であるから、この點で數詞と名詞との差は認めることが出來ない。

(四)副詞的修飾語となること。

我に兄弟は二人あり。　海上に船五艘浮べり。

金を十圓紛失す。　旅程を二日増加したり。

右の「二人」「五艘」「十圓」「二日」は、いづれも副詞的修飾語として用ひられたもので、下の用言を修飾限定してゐる。この數詞の副詞的修飾語として用ひられる用法は、數詞全體の有つてゐるものであつて、數詞を名詞から區別する著しい職能上の特質である。勿論、名詞にも副詞的修飾語となることがある。(下に助詞を作つて副修になることは勿論多いが、單獨でなる場合のことをここでは論じてゐるのである)。例へば、

余は明日君を訪問せん。　幸明日は日曜日なり。

つゆまどろまれ給はず。(源氏物語)　我が行は七日は過ぎじ立田姫ゆめこの花を風に散らすな。(萬葉集)

の「明日」「幸」「ゆめ」「つゆ」は元來は名詞である。そして右の文では、いづれも副詞的修飾語として用ひられてゐるのである。併し、かくの如く名詞が副詞的修飾語として用ひられるのは、名詞の全部に亙る用法ではなく、時に關するものとか、その他或る特殊なものに限られてゐる。從つて之を名詞の職能とは言ふべきではなくて、この「明日」「幸」「ゆめ」「つゆ」はもはや名詞ではなく、品詞が轉換して副詞となつてゐると考へなければならない。全體の名詞

として考へれば、この用法は部分的であるから、名詞の副詞法とは呼べないのである。これに反して數詞の方は如何なる數詞でも副詞的修飾語となり得るのであるから、これは數詞が副詞に轉化したのではなくて、數詞の副詞法と考へるべきである。この數詞の副詞的用法は名詞と數詞とを區別する有力なる特性である。

なほ數詞の副詞的用法と、數詞が主語若しくは世に所謂客語として用ひられてゐる場合とを混同しない樣にする必要がある。

象は體大なり　　兄弟は三人あり。

右の「體」と「三人」とはそれ〴〵同じく下の「大なり」「あり」に對して主語になつてゐるやうに思はれるが、之を口語文になほして見ると、

象は體が大きい。　　兄弟は三人ある。（「兄弟は三人がある」とはいへぬ。）

となつて、前者の「體」は「大きい」といふ述語に對して主語であることが明瞭になるが、後者の「三人」は「ある」といふ述語に對して副詞的修飾語になつてゐることが分るのである。又、

金三圓を借りたり。　　金を三圓借りたり。

の例に於て、前者の「三圓」は下に格助詞「を」をとつてゐるので所謂客語であるが、後者の「三圓」は上に格助詞「を」があるのであるから、所謂客語ではなくて副詞的修飾語である。若し、

金三圓あり。　　金三圓借りたり。

といふ文があるとすれば、この「三圓」は主語であるか、副詞的修飾語であるか、所謂客語であるか不明である、外形

に之を判斷すべき材料がないから。

22　助　數　詞

數詞はその固有語たると外來語たるとを問はず、事物の數量をはかり順序を數へる時に、その事物の種類又は性質に從つて、その特質を示す他の語を附ける事がある。これを助數詞といふ。「家五軒」「本三冊」「刀一腰」「人二人」「蜜柑四箱」の「軒」「冊」「腰」「人」「箱」等はこれでその數は非常に多い。この助數詞に對して數のみを表す部分を本數詞といふ。助數詞と本數詞とは合せて一つの數詞である。

これ等助數詞の本質は何であらうか。前にあげた「五軒」「三冊」「一腰」「二人」「四箱」等は全體として數を表してゐる語であるから、本數詞と助數詞とどちらが重いかといへば、勿論本數詞が重いのである。而して國語に於ける語句の複合關係を見るに、その關係には、並立關係と一致關係と主從關係の三樣式がある。並立關係といふのは「木々」「人々」「山川」（山と川の意。「山川もよりてつかふる」といふのが「萬葉集」にある）の如きもので、これは熟語ではないから、熟語に於ては一致關係と主從關係の二者のみ考察すればよい。一致關係といふのは「山水」（風景の意）・「黒白」（差別）・「春秋」（年令）の如きもので、二者の觀念が合致して一つの新しい觀念を表すのであるから、何れを主何れを從とも考へることの出來ないもので、これも數詞の考察には除いて考へてよい。主從關係といふのは、「山櫻」「櫻山」「谷川」「川水」の如きもので、この際は必ず上の語が從で下の語が主である。「山櫻」は「櫻の一種」であり、「櫻山」は「櫻の生えてゐる山」であり、「谷川」は「谷にある川」、「川水」は「川の水」である。これは觀念語と觀念語との複合關係であるが、一方が形式語である時は、位置の上下に拘らず觀念語の方が主で形式語の方が從である。即ち次の如き主從關係が成立するのである。

觀念語（從）＋觀念語（主）（A）　形式語（從）＋觀念語（主）（B）　觀念語（主）＋形式語（從）（C）

所で今、助數詞「軒」「冊」「腰」「人」「箱」を觀念語と見ると、その上にある本數詞は觀念語であるから、Aの形式にあてはまつて當然その本數詞が從となり助數詞が主とならなければならぬ。然るに前にも述べた樣に「五軒」「三冊」「一腰」「二人」「四箱」は全體として數量をいひ表してゐるのであるから、「五」「三」「一」「二」「四」が本體（主）でなければならぬ。「五」「三」「一」「二」「四」が主であれば當然この結合形式はAでなくて、Cでなければならない。即ち「軒」「冊」「腰」「箱」が從でなければならぬ。即ちこれらの助數詞は形式語でなければならぬ。而して文法上の形式語は助數詞と助詞の二品詞であつて、この助數詞はこの二品詞中の何れでも無いから、これは當然造語要素たる接辭でなければならぬ。どうしてもこれを獨立した單語と扱ふ譯には行かないのである。「第一」「第二」等の「第」はB式に當るもので接頭語である。「第三級」「第六等」等はB式とC式との混同で、上と下とに接辭を持つてゐるものである。「おかあさん」「おねえさん」等の名詞と同樣の出來方である。

文法家によつては「百圓」「十石」「五斤」「六尺」の如きを前にあげた樣な例と區別して、「圓」「石」「斤」「尺」等は貨幣度量衡の單位の名稱であつて純粹の名詞である。且つこれ等には數へるといふ動的の作用意義がないから、上の數のみが數詞であつて、これ等は名詞である、と說く人がある。これも一理あることながら、私は前述の樣に接尾語と見て敢て兩者の區別をたてないのが妥當であると思つてゐる。

なほ「ひとつ」「ふたつ」などの數詞が助數詞をとる時は、「ひとり」「ふたもと」等の如く、「つ」といふ語尾を失つてしまふのである。（この「つ」は元來は助數詞であるが、現代の國語では數詞としては必ず「つ」を附けて用ゐる。）名詞

が複合語を形成する時はもとのまゝの姿でするのであるが、數詞の複合する時はかく語尾を落すのである。複合語形成の上にも名詞と數詞との間にはかく相違がある。

〔研究問題〕

（一）助數詞の實例蒐集。　（二）「圓」「石」「斤」「尺」等の本質研究。

23　數詞の種類

數詞の種類には、（一）數量をはかるもの（量數詞）、（二）順序を數へるもの（順位數詞）、の二種があり、右の二者の各々に固有語の數詞と外來語の數詞との二者があり、合せて四種となる。これ等には文法上の問題とすべきものが無いからこゝには詳述をさける。（拙著「高等口語法講義」九三頁—九八頁、一〇五頁—一〇六頁參照）

なほ數詞の中に不定數詞なるものを說く場合がある。「あまた」「すこし」の如く漠然と數をあらはすもの、「いくつ」の如く不明の數をあらはすもの等がこれである。これは代名詞の不定稱の如きものであつて、數詞に入れて說く合理性もある樣ではあるが、不定數詞の全部が體言としての用法を完全に果すことが出來るであらうか。格助詞「が」「の」「に」「を」を全部下につゞけ得るであらうか。これを考へると、こゝに完全なる數詞の職能を果すことが出來ないのではあるまいか。なほ研究の餘地がある樣に思ふ。（「大言海」では「あまた」「すこし」を副詞とし、「いくつ」を名詞としてゐる）。

〔研究問題〕

（一）數詞の定義。　（二）數詞の特殊なるもの（例へば「五十」を「い」といふ如きもの）の研究。

24　用　言

用言はその形態からいふと語尾變化を有する詞である。しかし、語尾變化のあるもの必ずしも用言ではない。助動詞は語尾變化があるけれども用言ではない。これ助動詞は形式語であるからである。

用言はその意義からいふとある一定の觀念を表す觀念語である。而してその觀念は事物の屬性を表すといふことである。事物の動作を示す場合は「走る」「書く」「植う」等これである。事物の作用を示す場合は「滿つ」「流る」「落つ」等これである。事物の有様を示す場合は「似る」「勝る」「見ゆ」等これである。その他形容詞の示す事物の分量とか性質とか狀態とかは同じく屬性を示すものである。

用言はその職能からいふと述語になり得る詞である。これは用言としての根本的特質であつて、所謂用言が陳述の作用を表す特質があるといふのは、この職能に依つて發揮される點をいふのである。山田博士が「用言の用言たる特徴はその陳述の作用をあらはす點にあり。この作用は人間の思想の統一作用にして主位に立つ概念と賓位に立つ概念との異同を明にして之を結合する力を有す。」（「日本文法講義」四八頁）と言つてをられるのはこの謂である。從つて、たとへ事物の屬性が明瞭に現れてをらない場合でも、陳述といふ力が寓せられてある詞は、これを用言としなければならないことになる。山田博士の文法系統に於て「なり」「たり」「如し」が用言と認められてゐるのはこのためであり、用言が實質用言と形式用言との二種に分類されるのもこの根據に基くのである。併し本講では、屬性と陳述との併せ

存在してゐるもののみを用言と認める立場に立つことにする。これは暫らく舊來の文法系統によつたのである。

25 動詞の意義

動詞は用言の一種であるから當然觀念語である。動詞と形態は同じであつても觀念語でないものは動詞といふことが出來ない。

天皇老臣に鳩杖をたまふ。　天皇寒夜に御衣を脱がせたまふ。

前者の「たまふ」は「鳩杖を」といふ文の成分所謂客語を上にもつて述語になつてゐるのであつて觀念語である。後者の「たまふ」は「せ」といふ助動詞に連り、「脱がせたまふ」といふ述語の一部をなしてゐるので形式語である。從つて後者の「たまふ」は同じ尊敬の意味を表す他の助動詞、たとへば「らる」を以て置き換へることが出來るのである。

天皇寒夜に御衣を脱がせらる。

しかし、前者の「たまふ」には「らる」の代入が出來ないのである。

天皇老臣に鳩杖をらる。

これ「らる」が形式語であるから、形式語の代用は出來るが、觀念語の代用は出來ないのである。

動詞は事物の動作を表す用言である。

父は書を讀み、母は着物を縫ふ。　兄は球を投げ、弟は之を受く。

動詞は事物の作用を表す用言である。

火燃ゆ。　水流る。

動詞は事物の有様を示す用言である。

子父に似る。　富士山車窓より見ゆ。

右の例の中「似る」「見ゆ」の如き事物の有様を示す語が動詞であるとすれば、事物の有様を示すことをその本性としてゐる形容詞との區別が認められなくなる。「老ゆ」と「若し」、「富む」と「貧し」の間には如何なる區別が存するか。山田孝雄博士の「日本文法講義」では「動詞とは事物の性質狀態が推移的發作的の觀念として意識内に描かれたるものをあらはす用言なり。」（八九頁）といひ、「形容詞とは靜止的固定的に時間に關することなく心内に畫かれたる事物の性質狀態を說明する用言なり。」（八二頁）と言はれ、又、吉岡郷甫氏も「文語口語對照語法」の中で、「動詞が物事の移動し、變化する屬性を表すに對して、靜止し、安定する屬性を表すものを形容詞と云ひます。言を換へて申しますれば、動詞が流動的屬性を表すに對して、固定的屬性を表すものを形容詞と云ひます。」（一二六頁）と言つてをられるが、併しこれだけで區別の出來ないものがあるとすれば、單にかうした觀念上の區別に止まらないで、どうしてもその區別を形態上に求めなければならなくなる。即ち、五十音圖の同行に活用する用言が動詞で、五十音圖の別行（カ行とサ行）に活用する用言を形容詞といふ様な形式的區別法を設けなければならないのである。なほ「出る」「入る」「渡る」等の語が動作と狀態との兩樣に用ひられる事實なども、これに連關させて考へて見ると興味ある事實といふべきである。

次に動詞は事物の動作・作用・有樣を表す外に事物の存在を表す用言でもある。

昔男ありけり。　動物園には象がゐる。

右の「あり」は「無し」の反對語であつて共に同範疇に屬すべき語であるが、「無し」は形容詞で「あり」は動詞である。これも形態上の特質による區別であつて觀念上の區別ではない。山田博士はこの「あり」を動詞より分離せしめて、獨立

に「存在詞」といふ一類の品詞を立て、次の如く言つてをられる。「『あり』といふ用言は存在の義をあらはし、なほ進みてはたゞ陳述の義のみをあらはす。之を存在詞と名づく。」(『日本文法講義』一〇九頁)而して存在と陳述のみの用例として次の例があげてある。

昔小野篁といふ人ありけり。(存在)　　われ世の中にあらん限りに。(存在)

人の心こそうたてあるものはあれ。(陳述のみ)　　とのもりつかさこそなほをかしきものはあれ。(陳述のみ)

〔研究問題〕

(一)存在詞の種類とその本質。　　(二)状態を表す動詞の本質。

26　動詞の形態

動詞の形態としての最も著しい特質は所謂活用と呼ばれてゐる語尾變化の現象である。動詞はこの語尾變化といふ形態的特質によりて、意義に應じつゝその職能を全くすることが出來るのである。いま「滿たす」といふ動詞に就いてその語尾變化の現象を調べて見ると、

みた ｛ さ し す せ　　　mitas ｛ a i u e

の如くなる。「みた」は變化しない部分で「さ」「し」「す」「せ」は變化する部分である。この變化しない部分を「語幹」(stem)といひ、變化する部分を語尾(ending)といふ。而して語幹のうち更に根本的な部分を認め得る時には、その

部分を語根(root)と名付けるのである。その根本的な部分の認め得られないものは語幹即語根である。

み{た・ち・つ・て}　mit{a・i・u・e}

従つて、次の如くなるのである。

語根 み 語幹 た 語尾{さ・し・す・せ}　root mitas stem ending{a・i・u・e}

今文語全動詞に亙つてこの語尾變化の現象の起り方を歸納してその種類を擧げて見ると次の如くになる。

(一)語幹と語尾との區別のあるもの。

1 語尾の音の母音に變化のあるもの。(四段・ラ變)

書(か){か・き・く・け}　話(はな){さ・し・す・せ}　打(う){た・ち・つ・て}　有(あ){ら・り・る・れ}

2 語尾の音に變化があつて、そのあるものに「る」「れ」「よ」の音を添へるもの。（ナ變・上二・下二）

死　な　に　ぬ　ぬる　ぬれ　ね

起　き　く　くる　くれ　きよ

受　け　く　くる　くれ　けよ

忘　れ　る　るゝ　るれ　れよ

（二）語幹と語尾との區別のないもの。

1 語幹部語尾のものが音に變化なく、そのあるものに「る」「れ」「よ」の音を添へるもの。（上一・下一）

射　い　いる　いれ　いよ

着　き　きる　きれ　きよ

似　に　にる　にれ　によ

蹴　け　ける　けれ　けよ

2 語幹部語尾のものが母音を變化し、そのあるものに「る」「れ」「よ」の添へるもの。（カ變・サ變）

來　こ　き　く　くる　くれ　こよ

爲　せ　し　す　する　すれ　せよ

文語動詞の語尾變化は右にあげた四種の型の何れかに屬するのである。而してその語尾變化の各形にはそれ〴〵その用法に基いての名稱がついてゐるのである。今、その各〻がすべて形を異にしてゐる「死ぬ」といふ動詞に就いて、その名稱をあげよう。

1 人死な｛む。／ば……／ず。｝ （未然形）

2 人死に｛絶ゆ。／たり。／て……｝ （連用形）

3 人死ぬ。 （終止形）

4 人死ぬる｛時……／事……｝ （連體形）

5 人死ぬれ｛ば……／ども……｝ （已然形）

6 人よ死れ。 （命令形）

27 動詞活用の種類

文語動詞には九種類の活用があるが、この種類の區別される主點は、前項で述べた活用の形式の現れ方に基くのである。從つて動詞活用の種類は全く形態上の分類と言つてよいのである。その種類は次の如くである。

正格活用
- 四段活用
- 上二段活用
- 下二段活用
- 上一段活用
- 下一段活用

變格活用
- カ行變格活用
- サ行變格活用
- ナ行變格活用
- ラ行變格活用

右に上げた正格活用と變格活用とは如何なる相違をもつてゐるかといふに、正格活用といふのは、語尾變化の形式が一定の型にはまつたものであるが、變格活用といふのはその形式が一定の型で律せられないものをいふ。勿論その以外にも助動詞などに對する承接關係に異例がある。以下九種の活用に就いて要點のみを説明しておかう。

〔一〕四段活用　語尾變化が五十音圖の同行のア・イ・ウ・エ四列に亘つて行はれるものであつて、これに屬する動詞はカ・ガ・サ・タ・ダ・ハ・バ・マ・ラの各行に存在する。この活用に屬する動詞の數は諸活用中最も多く、文語でこの活用に屬する動詞は口語でも四段活用に屬くのが普通である。四段活用は歴史的に見て諸活用中最も古い形であるとされてゐる。

〔二〕上二段活用　語尾變化が五十音圖の同行のイ・ウ二列に亘つて行はれ、そのある部分に「る」「れ」「よ」の添はるもので、これに屬する動詞はカ・ガ・タ・ダ・ハ・バ・マ・ヤ・ラの各行に存在する。文語のこの活用に屬する動詞は口語では皆上一段活用になつてしまふ。

〔三〕下二段活用　語尾變化が五十音圖の同行のエ・ウ二列に亘つて行はれ、そのある部分に「る」「れ」「よ」の添はるもので、これに屬する動詞は五十音圖の全行及びガ・ザ・ダ・バの各行に存在する。その所屬動詞は、四段活用に次いで多數に上つてゐる。文語のこの活用に屬する動詞は口語では皆下一段活用になつてしまふのである。

〔四〕上一段活用　語尾變化が五十音圖のイ列の一列のみに行はれ、そのある部分に「る」「れ」「よ」の添はるもので、これに屬する動詞は、カ・ナ・ハ・マ・ヤ・ワの各行に存在する。併しその數は極めて少く、大體次の數語にすぎない。

着る　似る　煮る　乾る　簸る　嚔る　見る　廻る　惟る（おもんみる）　顧る（かへりみる）　鑑る（かんがみる）　夢る（ゆめみる）　射る　鑄る　沃る　居る　率る　用ゐる

この活用に屬する動詞は口語でも上一段活用に働くのである。

〔五〕下一段活用　語尾變化が五十音圖のエ列一段にのみ行はれ、これに「る」「れ」「よ」の添はるもので、この活用に屬する語は「蹴る」の一語のみである。今日では「蹴る」は四段活用の如く用ひられることが多い。「綜る」「殕る」は下一段活用ではなくて下二段活用である。

〔六〕カ行變格活用　語尾變化が五十音圖のイ・ウ・オの三列に行はれ、そのある部分に「る」「れ」「よ」の添はるもので、これに屬する動詞は「來」の一語のみである。この活用はカ行上二段活用に似てゐるが、未然形及び命令形にオ列のある所が異なつてゐる。併し三段活用を一つの型とすればこれをカ行三段活用と呼んでも差支ない。又さう呼ぶ人もある。

〔七〕サ行變格活用　語尾變化が五十音圖のイ・ウ・エの三列に行はれ、ある部分に「る」「れ」「よ」の添はるもので、これに屬する動詞は本來では「爲」の一語のみである。この活用は下二段活用に似てゐるが連用形にイ列をもつてゐる所が異なつてゐる。併しこれもカ行變格活用に準じてサ行三段活用と呼ばれることもある。「おはす」といふ語は山田孝雄博士の「日本文法論」にも論じてある通り、四段活用と下二段活用との兩樣の活用をしたのでサ行變格活用ではなかつたのである。

なほ「爲」といふ語はその觀念に於て一般的形式的の所があるために、他の觀念語の名詞や漢語と結びついてサ變の熟語動詞を作ることが多い。

旅す　介す　面す　與す　給す　御す

高うす　低うす　全うす　空しうす　久しうす

重んず　軽んず　甘んず　疎んず

無みす　蔑ふす

愛す　屈す　察す　響す　讃す　賭す

罰す　賞す　具す　判ず　煎ず　禁ず　封ず　賞ず　課す　通ず　報ず　應ず　命ず　詠ず

勉強す　消費す　合治す　統治す　退治す　前進す　敗北す　宣揚す

ほしいまゝにす　専らにす　昔にす　清らかにす　にこ〳〵す

〔八〕**ナ行變格活用**　語尾變化が五十音圖のア・イ・ウ・エの四列に行はれることは四段活用と全く同じであり、ウ列の音に「る」「れ」の添はることは上二・下二・カ變・サ變活用と似てゐるが、六種の活用形がすべてその形を異にしてゐるのが他の孰れの活用ともちがふ點である。こゝに變格活用といはれる所以がある。この活用に屬する語は「死ぬ」「往ぬ」の二語のみであるが、現代では「死ぬ」といふ語は、「居り」（ラ變）「恨む」（上二）と共に四段活用として用ひても妨ないといふことに許容されてゐる。

〔九〕**ラ行變格活用**　語尾變化が五十音圖のア・イ・ウ・エの四列に行はれることは四段活用と全く同じであるが、終止形がイ列であるといふ點のみを異にする。この終止形がイ列であるといふ點は、他の八種の孰れの活用とも異なる點である。こゝに變格活用といはれる所以がある。この活用に屬する動詞は「有り」「居り」「侍り」「いますかり」の四語のみである。

以上九種の動詞活用を表示すれば次の如くになる。

活用の種類	語例	語幹＼活用語尾	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
四段	書く	書(か)	か	き	く	く	け	け
上二	盡く	盡(つ)	き	き	く	くる	くれ	きよ
下二	受く	受(う)	け	け	く	くる	くれ	けよ
上一	着る	(着)	き	き	きる	きる	きれ	きよ
下一	蹴る	(蹴)	け	け	ける	ける	けれ	けよ
カ變	來(く)	(來)	こ	き	く	くる	くれ	こよ
サ變	爲(す)	(爲)	せ	し	す	する	すれ	せよ
ナ變	死ぬ	死(し)	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ね
ラ變	有り	有(あ)	ら	り	り	る	れ	れ

〔研究問題〕

(一)動詞活用の種類の分化形式。　(二)變格活用の特質。

28　動詞活用形の用法

動詞の職能は種々あるが、その職能は孰れの種類の動詞にあつても、必ずその活用形を通して果されるのであり、その活用形は動詞の職能を全からしめるための變化形式にすぎな

いのである。従つて動詞の職能は、その活用形の用法を観察することに依つて明かにされるのであるから、以下、その検討を行ふことにする。動詞の活用形は、前項末の表でも分る通り、活用の種類によつてその型を異にするのであるが、これを歸納してみると用法には一定の法式が定まつてゐる。この用法の範疇を活用形の名稱として「何活用形」と稱してゐるのである。而してこの活用形は各〻その形を異にしてゐるナ行變格活用を基本にして六種を立てるのである。左に各活用形の主たる用法を考察して併せて動詞の職能を明かにすることにしよう。

〔一〕未然形　この活用形は、未然條件形ともいふべきもので、助詞「ば」に連つて未だ成立しない事實を假定的に示す形である。同じ助詞「ば」に連り乍ら、意味が全く正反對である事に於て已然形と對立するものである。

若し戰爭起らば勇躍出征せん。　櫻花咲かば告げんといひけるを。

又この形は、助動詞「る」「らる」(受身・可能・尊敬)、「す」「さす」「しむ」(使役・尊敬)、「ず」「ざり」「じ」(打消)、「む」「まし」(推量)、「まほし」(希望)に連り、助動詞の意味と合してその職能を全くするのである。但しカ變・サ變は過去の助動詞「き」のある活用形にも連り、サ變は完了の助動詞「り」にも連る。従つて未然形なる名稱は「ば」に連る一つの用法を以てこの形の名稱の代用としたものであつて、決してこの名稱がこの形の全用法をつくしてをるものでないことに注意しなければならぬ。

〔二〕連用形　この形は他の用言(動詞・形容詞)に連る形である。

櫻花咲きはじめたり。　書を讀み終りぬ。　求め難き寶を得たり。

この用言に連る動詞の連用形の用法は、形容詞と動詞とを區別する重要なる點であることに注意しなければならぬ。

なほ動詞の中には、

ゆかしげなき事なしも思ひそめ給ひて(源氏物語)

爲さすまじき事の今日すぐすまじきな打ちおきて(枕草子)

このさうぞくどもいとよし、よく縫ひおほせたりと譽むれば(落窪物語)

しぬびつゝ來れど來かねて水尾が崎眞長の浦をまたかへりみつ(萬葉集)

心の内に思ふことをも言ひあへずなむ誰れ聞えたまひける(源氏物語)

の例に見ゆる「そむ」「さす」「おほす」「かぬ」「あふ」の様に、他の動詞の連用形に連つて、その意味を發揮するだけで、獨立に用ひられぬものがある。これ等の動詞は元來は觀念語として、獨立の用法をもつてゐた時があつたのかと思ふが、右の用例に於ては全く接尾語化してゐる樣に思はれる。從つて上の動詞と合せて、一つの複合語の動詞と見るべきではあるまいか。

又この形は助動詞「き」「けり」(過去)、「つ」「ぬ」「たり」(完了)、「けむ」(推量)、「たし」(希望)、「けり」(詠歎)に連つて、その助動詞の表す意味に助けられて動詞の職能を果す場合がある。又動詞より轉換した敬語の助動詞「聞ゆ」「奉る」「致す」に連ることもある。

又この形は語句をいひさして一時中止する時に用ひられる事がある。從つてこの用法に立つてゐる場合に限り連用形といはずに「中止形」といふことがある。

勇將は死に、弱卒は損はる。　花咲き、鳥歌ふ。　人は何處より來り、何處へか去る。

この形から動詞は名詞になることがあるので、この形を「名詞形」といふことがある。併し、全部の動詞がこの形から名詞になり得るのではなく、ある動詞にさういふ事實があるといふに過ぎない。

日の光（ひかり）　清き死（しに）　讀（よみ）が下らず　長き帶（おび）　紙のやぶれ　千金の富（とみ）

又この形から他の語と熟合して、複合語の名詞を作ることがある。

行（ゆき）先　爲（し）事　犬じに　山ごもり　早起（おき）　いでたち

この形は或場合には文中の上に向つては動詞、下に向つては名詞といふ、兩用を兼ねることがある。

彼は魚を釣りに行けり。　落し物を探しに出かけたり。　友人を見舞ひに行かむ。

右の例は、「を」に對しては動詞、「に」に對しては名詞の用をなしてをる様に思はれる。併し、これは文中の成分の考へ方によつて、「……十を」「……十に」ともに副詞的修飾語であると見るならば、問題は更に別になるべきものである。

外山の櫻散りやせん。　未だ行きはせじ。　そは思ひもかけぬ事なり。

右の例に於ける連用形は下の動詞と合して始めて完全したる意味を表すのである。

なほこの形から動詞が副詞になることがある。これも動詞中のあるものにすぎない。

あまり　はじめ　絶え絶え　しみじみ　とりどり　休み休み

〔三〕**終止形**　これは動詞活用の基本の形であつて、動詞のいひはらはす事柄をいひ切る事を表す形である。

花散る。　月落つ。　人來。

又この形は助動詞「べし」「べかり」(可能・推量)、「まじ」(打消)、「らし」「らん」「めり」(推量)等に連る形である。

同時に、助詞「とも」に連つて假定法を表す形でもある。

死すとも歸らじ。　學ぶとも及ばざるべし。

この形から名詞に轉ずる動詞も稀にはある。

かげろふ(陽炎)　すまふ(角力)　しのぶ(忍草)

進(すすむ)　勤(つとむ)　光(ひかる)　順(したがふ)　融(とほる)　競(きそふ)　渡(わたる)　保(たもつ)(人名)

この形を重ねて副詞とすることもある。

行く行く　泣く泣く　かへすがへす　かはるがはる

〔四〕**連體形**　體言に連續して、その體言を形容詞的に修飾する形である。この職能は恰も形容詞と同樣である。

日の出づる頃　失望する夜

この形は助動詞「なり」(指定)、「ごとし」(比況)及びラ行變格活用の動詞は「べし」「べかり」(可能・推量)「らし」「らむ」「めり」「まじ」(推量)にも連る形である。

上に係助詞「ぞ」「なむ」「や」「か」が來る時にはこの形で文の終止となる。所謂「第二終止」と呼ばれるものがこれである。係結の法則に應ずる形である。

前に連用形の條下で述べたと同樣に動詞と名詞との兩性質を表す場合がある。

友の遠方より來るを喜ぶ。　道の窮るに至りて止まる。　隣に人の在るを忘れたり。

この場合もし連體形の下に體言を省略したと見るならば、この連體形は所謂「分詞法」(participle)となつて、動詞と形容詞との働をすることになるのである。孰れにしろ、この場合この動詞を述語とする上の文は、獨立を失つて節となつてゐることに注意しなければならない。

又この形から熟語の名詞が形成されることがある。併しこれは例としては稀である。

行先（ゆくさき）　行方（ゆくへ）　[illegible]　[illegible]　[illegible]

〔五〕已然形　前に述べた様に未然形と相對する形で、助詞「ば」を伴つて、動詞の表す動作・現象等が既に成立したことを示す條件形である。

戦爭起れば。兵士は勇躍出征せり。　櫻花咲けば。美しき吉野山。

なほこの形は「何々であるとすると」といふ風に、條件の既に成り立つたことを、更に假定の位置に立てる様な言ひ方に立てる時に用ひられる。

徳あれば。人に心服せらる。(徳があるとすると人に心服せられる。)

心を虚しくすれば事理分明となる。(虚心になるとすると物の道理が明かに分るやうになる。)

このいひ方と「徳あらば」「心を虚しくせば」のいひ方との相違點を玩味すべきである。

四段活用の動詞のこの形には完了の助動詞「り」が連續する。山田孝雄博士はこの場合の形を次の様に説明してをられる。

「あり」は上に來る四段活用、左行三段活用の動詞と合併して「けり」「せり」「てり」「へり」「めり」「れり」となることあり。

今これを動作存在詞といふ。(「日本文法講義」一一三頁―一一四頁)

これは存在詞の研究と共に考究すべき一問題であらう。

上に係助詞「こそ」が來る時には、この形で結ぶのがきまりである。所謂「第三終止」と呼ぶもので、係結の一法則である。

〔六〕命令形　この形は對者に向つて、動詞の表す動作を行ふ樣命令又は願望する形である。

本をはやく讀め。　雨よ、降れ。　詳しくはなほ考へよ。

對者に對する命令又は願望でなくて、自己の希望を表す場合もある。この時には、文がこの形で終止してゐないことに注意すべきである。

明日のみは雨も降らであれと願ふ。　いま一と歲生命生きてあれかし。

放任・假設の意を表すと說いて次の樣な例をあげてゐる人もある。

梅花は落ちば落ちよ。(放任)　何人にもせよ之を犯すを得ず。(假設)

何が放任又は假設の意を表してゐるかに就いては研究の要がある。

なほこの命令形は、これを一つの活用形として獨立せしめて置くべきものかどうかに就いても、考究すべき餘地があ十分る。

所屬語數の最も多いと言はれる四段活用の命令形は已然形と同形であり、ラ行變格活用も同樣である。その他の動詞の命令形は、未然形に「よ」をつけた形である。ただナ行變格活用の「死ね」だけは、他の活用形と異つた「死ね」とい

ふ形である。このナ行變格活用を基本として活用形の型を整へるために、命令形を設けて置かねばならぬ樣にも思はれる。この四段・ナ變・ラ變以外の動詞の命令形に附いてゐる「よ」は、本來は動詞の語尾でなくて間投助詞であつたらうと思ふが、現在ではこの「よ」を取離せば命令の意味が成立しないと思ふから、私はこれを語尾と考へておく。

カ四　命令形	間投助詞	
讀め	よ	（讀めや）

右の「よ」は動詞の語尾ではないから、この「よ」を他の間投助詞「や」に更へて「讀めや」と言ふことが出來る。

カ上二　命令形	
起きよ	（起きや）

右の「よ」は「起く」といふ動詞の語尾であるから、これを「や」に更へて「起きや」と言ふことは出來ないのである。これ、この「よ」は獨立した助詞から、獨立しない語尾に變つてゐることを物語るものである。

月夜よし夜よしと人に告げやらば來てふに似たり待たずしもあらず。（古今集）

食薦敷き蔓菁煮持ち來梁に行縢懸けて息む此の公。（萬葉集）

四の船はや還り來と白香著け朕が裳の裾に鎮ひて待たむ。（萬葉集）

右の「來」は現在の「來よ」の意であつて命令形である。「出雲風土記」の國引の段の中にある「國來、國來」も同樣である。これ等を見ても「よ」が本來は動詞の語尾で無かつたことが知られるのである。從つて今日の文法家の中にも、この「よ」を動詞の活用語尾の中に入れない人もある。

〔研究問題〕

（一）活用形研究の歷史的經過。　（二）品詞の轉換と活用形との關係。

動詞の職能は前項で述べた活用形の用法を通して果されるのであるが、その職能のみを總括的に述べて見れば次の如くになるであらう。

29 動詞の職能

（一）文の述語となること。

花笑ひ、鳥歌ひ、水踊る。　　九十九里の濱に玉拾ひをり。

この場合には終止形が出るのが普通であるが、中止形で述語になることもあれば、連體形・已然形・命令形で述語になることもある。又動詞が助動詞を伴つて述語になる時は、その助動詞との承接關係に依つて、種々の活用形が現れるのは當然のことである。

（二）形容詞的修飾語となること。

驕る平家を咲く花に譬ふ。　千曲川いざよふ波の岸近き宿。

この場合は連體形に限られるのであるが、

朝あけて船より鳴れる太笛の。　つけすてし野火の煙のあかあかと。

右の如く助動詞を下に持つて、それと共に形容詞的修飾語となる時には、その承接關係に從つて活用形を異にすることも勿論である。

（三）副詞的修飾語となることはないか。

動詞が副詞的修飾語になるか否かの問題に就いては、山田孝雄博士の「同格連用」と「修飾連用」との說を顧みる必要

がある。その著「日本文法講義」（三七九頁）に曰く、

用言の連用形は中止の連格をなし、又連格をなしつゝ下に重ぬるに用ゐらるゝことあり。之を連用言といふ。この際には下なる用言と同等の資格にて合同する意のものあり、下なる用言に従属して之が修飾格に立つものあり。甲を同格連用といひ、乙を修飾連用といふ。

又同書（三六八頁）に曰く、

連用言には二の用あり。一に下の用言と合同をなす類のものにして、たとへば「壁を白く塗る」に於ける如し。この時の「白く」は「塗る」ことの修飾語にあらずして「壁」の色の説明たり。而「白く」と「塗る」と相合して一の述語となれるものなり。動詞の連用言はこの性質のものなり。たとへば「馬車にて走り過ぐ」などの如し。これら同格連用といふ。又この項にいへる如く下なる用言に従属してその修飾語となることあり。こは形容詞には多し。動詞にはこの修飾的用法のもの多からずといへども、稀にはあり。たとへば、「雪しきりにふる」の「しきり」の如し。但この時は「に」助詞を伴ふものとす。

なほ同書には動詞の同格連用の例として次があげてある。

父母は飢ゑ寒からむ。　　風はいよいよ吹きすさぶ。
京にありわびて田舎に下りけり。　　偉績燦然としてひかりかゞやけり。
春の色いたりいたらぬ里はあらじ。　　いでいる人の遊び敬はぬはなし。

又修飾連用としては次の例があげてある。

默然ないそぎがふ。　　木の葉あらそひ落つ。

書なくりかへし讀む。　　　　牛と熊とあひうつ。

形容詞の場合に於いてはいろ／＼問題があると思ふが、動詞の場合に於ては、私は同格連用と修飾連用とは次の様な方法で區別することが出來ると思ふ。

〇動詞連用形　〇且つ〇〇動詞　（同格連用）　　〇動詞連用形　〇て〇〇動詞　（修飾連用）

即ち「且つ」といふ接續詞の間に入り得るものは同格連用であり、「て」といふ助詞の入り得るものは修飾連用であると思ふ。從つて右の諸例のうち、

父母は飢ゑ（且つ）寒からむ。　偉績燦然としてひかり（且つ）かゞやけり。

等は同格連用であるが、

京にあり（且つ）わびて……

等は言へないから、「ありわぶ」を一個の動詞として扱ふのがよいのではあるまいか。又、

木の葉あらそひ（て）落つ。　書なくりかへし（て）讀む。

は修飾連用であるが、

牛と熊とあひ（て）うつ。

は修飾連用でなくて、「あひうつ」といふ一つの動詞として扱ふのがよくはあるまいか。なほ前例の「雨しきりに降る」の「しきりに」等も相當問題であつて、「しきり」を修飾連用とすることは出來難いものと思ふ。（併し山田博士は同書（三八二頁—三八三頁）の中で、「さて『打ちかたらふ』『立ち別る』『取りみだす』『さしうつむく』『かきくもる』『あひ成

る「手の例の『うち』『たち』『とり』『さし』『かき』『あひ』などは、即ちこの修飾連用の慣熟したるものなり。これを接頭辭とする人あれど、これただ慣用ありといふに止まり、なほ動詞の連用形にして修飾連用に立てるものと認むるを穏なりとす。」と言つてをられる。これを要するに動詞の連用形は稀に副詞的修飾語として用ひられることがあるのは認めてよいと思ふ。

なほ動詞が文の述語となつて、その文が更に大きな文の一部分となり、所謂副詞的修飾節をなしてゐる時には、その述語になつてゐる動詞が接續助詞を作つて、副詞的修飾作用を營んでゐることは言ふまでもない。

月輝けど心喜ばず。　水流るれば魚死せず。

〔研究問題〕

（一）動詞の職能と動詞の活用形との關係。　（二）同格連用と修飾連用の深究。

30　古代の動詞

平安朝時代の動詞の種類は前述した通り九種類揃つてゐるが、奈良朝時代には下一段活用「蹴る」がワ行下二段活用であつたから、之を除いて八種類であつた。且つ奈良朝時代から平安朝初期にかけて上二段活用であるものが、上一段活用に變りつゝあつたと思はれるものがある。

八拳須至レ于二心前一啼（なき）伊佐知伎（いさちき）也。（古事記）　何由以汝不レ治下所二事依一之國上哭伊佐知流（いさちる）。（同上）

問二賜僕之哭伊佐知流（いさちる）之事一故。（同上）

右の「いさちる」は連用形と連體形としかないので果して上一段活用であつたかどうか疑はしいのであるが、上一段活用でないと否定する材料もない。又、

荒夫琉神（古事記）　荒賊、俗曰阿良夫流爾斯母乃（常陸風土記）

陸奥國荒備流蝦夷等乎（續紀四十、延暦八年九月詔）

右の前二例の「あらぶ」は上二段活用であるが最後の例は連體形が「あらびる」であるから、上一段活用とも考へられるのである。

なほ平安朝時代には二段活用であるもので奈良朝時代には四段活用であつたものが多少ある。

怖る。すゝむ。隠る。止む。觸る。忘る。放る。垂る。

又奈良朝時代に於ては、終止形から「らむ」「べし」「まじ」等の助動詞に連つたものが、平安朝では連體形から連る様になつた動詞がある。次はその例である。

散るまをだにも見るべきものを（古今集）　見るまじきもの（竹取物語）

かくれゐて見るらむを誰かは知らむ（枕草子）　去年に似るべくもあらず（伊勢物語）

〔研究問題〕

（一）時代による特殊動詞の用法。　（二）時代による動詞の變遷。

31 動詞の自他

動詞を分けて自動詞と他動詞にすることは古く本居春庭の「詞の通路」以來、又新しくは西洋文法の輸入以來普通のことであるが、その論の是非に就きては既に山田孝雄博士の「日本文法論」中「動詞の性質上の分類」（同書二七一頁―三一二頁）に詳しいので、こゝには說くことを避ける。唯國語に於てはその語の性質上の分類の不可能論や不必要論よりも、同語根を有する動詞が二種の活用に分れるといふ形態上の

區別に注目すべきであらうと思ふ。若し之を顧みずして單に客語や副詞的修飾語に卽しての區別を說かうとするならば、それは寧ろ文章論に於ける客語論副修論であつて、單語としての動詞の特質を說く品詞論の仕事でなくなると思ふ。勿論品詞論に於て動詞の自他を說くか說かないかに依つて、文章論に於ける客語の特殊如何の問題が起るのであるが、さういふ問題を離れてなほかつ品詞論に於て動詞の自他を說く必要があるとするならば、活用形態に基く動詞の種類如何といふ點に卽して說くの程度にとゞめておくべきであらうと思ふ。

起る(ラ四)	起す(サ四)
上る(ラ四)	上ぐ(ガ四)
終る(ラ四)	終ふ(ハ下二)
起く(カ上二)	起す(サ四)
燒く(カ下二)	燒く(カ四)
聞こゆ(ヤ下二)	聞く(カ四)
明く(カ下二)	明かす(サ四)
埋もる(ラ下二)	埋む(マ下二)
煮ゆ(ヤ下二)	煮る(ナ上一)

迷ふ(ハ四)	迷はす(サ四)
始まる(ラ四)	始む(マ下二)
すたる(ラ四)	すつ(タ下二)
亡ぶ(バ上二)	亡ぼす(サ四)
折る(ラ下二)	折る(ラ四)
絕ゆ(ヤ下二)	絕やす(サ四)
出づ(ダ下二)	出だす(サ四)
うまる(ラ下二)	うむ(マ四)
似る(ナ上一)	似す(サ下二)

沸く(カ四)	沸かす(サ四)
はさまる(ラ四)	はさむ(マ四)
落つ(タ上二)	落す(サ四)
懲る(ラ上二)	懲らす(サ四)
流る(ラ下二)	流す(サ四)
枯る(ラ下二)	枯らす(サ四)
こぼる(ラ下二)	こぼつ(タ四)
結ぼる(ラ下二)	結ぶ(バ四)
着る(カ上一)	着す(サ下二)

右の樣な實例はその一部分を示しただけで他にも非常に多い。上下對照してその活用形態の相違を研究して見る必要がある。

〔研究問題〕

（一）動詞の自他區別可能論。　（二）動詞の自他區別必要論。

（三）動詞の自他區別に關して西洋文法との比較。　（四）動詞の自他區別に關する品詞論と文章論との交渉關係。

32 敬語動詞

動詞にもその本來の意義の外に、待遇關係をも併せ示すものがある。これを敬語の動詞といふ。その主なるものは次の如くである。

〔一〕尊敬の動詞　尊敬の動詞といふのは、その現す動作が尊敬すべき人の動作であるものをいふ。

あそばす（爲る）　います（在る・行く・來る）　ます（在る・行く・來る）

おはします（在る・行く・來る）　おまします（在る・行く・來る）　まします（在る・行く・來る）

おぼす（思ふ）　おぼしめす（思ふ）　おもほす（思ふ）

きこしめす（聞く・食ふ・飲む）　しろしめす（知る・治める）　みそなはす（見る）

めす（呼ぶ・着る・乘る・食ふ・飲む）　たぶ（與ふ）　たまふ（與ふ）

たまはる（與ふ）　たてまつる（着る・乘る・めす）　のたまふ（言ふ）

おはす（「います」と同じ。）　おほす（言ひつく）　渡らす（在る・行く・來る）

御覽ず（見る）（漢語）　行幸す（みゆきす）（漢語）　出御す（いでます）（漢語）

〔二〕謙讓の動詞　謙讓の動詞といふのは、その現す動作が卑下すべき自分の動作であるものをいふ。

うけたまはる（聞く・承諾す）　候ふ（侍す・居る）　たてまつる（與ふ）

たまはる(受く)	申す(言ふ)	仕る(爲す)
まゐる(行く・來る)	致す(爲す)	拜む(見る)
聞ゆ(言ふ)	侍り(「候ふ」に同じ)	參らす(與ふ)
たぶ(食ふ・飲む)	參ず・來ず・拜す・奏す・參上す・參拜す・拜觀す・拜見す・拜聽す　拜借す・奉納す・奉呈す・頂戴す(漢語)	

右の括弧内は動詞の示す辭書的意味である。

〔三〕**鄭重の動詞**　鄭重の動詞とは對者の尊敬・自己の卑下を現すのでなく、ただ鄭重の意を現すにすぎないものをいふ。

申す　侍る　仕る　致す　參る　候ふ(在る)　侍り(同上)

以上三種の外、なほ次の如く漢語の敬語名詞の下に「あり」「候ふ」「なる」「なす」等の動詞をつけて尊敬の意を現すことがある。

御座あり。御氣色あり。御進出候ふ。御覺悟候ふべし。御幸なりぬ。遷御なる。仰せなる。遷幸なし奉る。

右のうち「候ふ」のみは原義の敬語の動詞であるが、「あり」「なる」「なす」等は本來何等敬語の意味をもつてゐない動詞であるが、上の敬語の名詞に相應じて敬語の意味を發揮してゐるのである。思ふに「あり」「なる」は自然にその事が存在し又は自然にその樣に成りゆく意味から間接的表現となつて敬意を表し、「なす」は高貴の人が自ら手を下して行はるゝといふ意味でなく、他のものがさうおさせするといふ樣な言ひ方であるから、敬意が寓せられることにな

つたものと思ふ。こゝに國語の微妙なる敬語意識の働いてゐることを見るべきである。

〔研究問題〕

（一）國語に於ける敬語意識と動詞との關係。

33　動詞の音便

音便といふのは或る音が他の音と連絡して發音せられる際に、發音の便宜に從つて本來の音を變化させることをいふ。「かは」（川）を「カワ」と發音し、「かほ」（顏）を「カオ」と發音するのも嚴密に言へば音便であるが、これ等のものは音便と稱しないで、用言の活用形の或種のものに限つて音便といふ。音便は決して語頭音に現れることはない。且つ音便と稱せられるものは、その音の變化を必ず變化された通りに書き更めるのである。音便の起る根本原因は發音勞力の經濟によると思はれるが、漢語の影響より起つたとする說が有力に行はれてゐるが研究の餘地がある。

動詞の活用形に於ける音便は次の四種類である。

〔一〕イ音便　動詞の語尾「き」「ぎ」「し」が「い」に變るものをいふ。

（カ四連用形）咲きて→咲いて　（ガ四連用形）仰ぎて→仰いで　（サ四連用形）落して→落いて

右の中「し」が「い」が變るのは現代ではあまり多く用ひられない。

〔二〕ウ音便　動詞の語尾「ひ」が「う」に變るものをいふ。

（ハ四連用形）問ひて→問うて　（ハ四連用形）買ひて→買うて

右の外に「頼みて」（マ四、連用形）、「喜びて」（バ四、連用形）を「頼うで」「喜うで」といふのもこの種の音便で、

鎌倉以後行はれた様であるが、現在は口語として一地方に行はれるのみである。

〔三〕撥音便　動詞の語尾「に」「み」「び」「り」「る」が撥ねる音「ん」に變るものをいふ。

死に（ナ變連用形）て→死んで　富み（マ四連用形）て→富んで　飛び（バ四連用形）て→飛んで

去り（ラ四連用形）ぬる→去んぬる　あり（ラ變連用形）めり→あんめり

右のうち「り」「る」の「ん」となるのは現代文では用ひられない。

〔四〕促音便　動詞の語尾「ひ」「ち」「り」が促音に變るのをいふ。促音といふのは、聲音學上斷音の一で、二音の中間で氣息が口腔内につまつて生ずる中止的の音である。國語では「つ」の假名をかりて表記するが、「つ」の音を實際に發音してゐるのではない。

買ひ（ハ四連用形）て→買つて　絶ち（タ四連用形）て→絶つて　取り（ラ四連用形）て→取つて

〔研究問題〕

（一）音便發生の歴史的考察。　（二）文語と口語に於ける音便現象の差違。　（三）音便と假名遣との關係。

第六章　形容詞

34　形容詞の本義　形容詞は事物の性質・狀態を表す品詞である。觀念語であつて用言の一種であることは既に述べた通りである。而してこの形容詞が動詞との間に如何なる區別を有するかといふこ

とに就いては既に二五項に於て述べた通りであるが、なほその他の區別に就いては次の如きことも考へ得られると思ふ。

(一)動詞の活用形には命令形があるが、形容詞の活用形には命令形が無い。

(二)動詞の未然形には助詞「ば」助動詞「ず」が連るが、形容詞の未然形には「ば」は連るが「ず」は連らない。その他同活用形に連る助詞・助動詞に就いては非常な差別がある。

(三)連用形の用法に於て、動詞は所謂連用法があつてそのまゝの職能で他の用言に連るのであるが、形容詞は副詞的修飾語となる以外の職能を以て他の用言に連ることは出來ないのである。

櫻花散り過ぎにけり。(動詞)　櫻花美しく咲けり。(形容詞)

これ、形容詞の連用形が副詞形といはれる所以である。動詞の連用形には、稀に所謂修飾連用として下の用言の副詞的修飾語になることはあり得るのであるが、形容詞の連用形は一つの例外もなく、全部副詞的修飾語となるのである。

〔研究問題〕

(一)形容詞と動詞との發生的關係。　(二)形容詞と動詞との非區別點。

35　形容詞の形態

形容詞には動詞と同じく語尾變化の作用があることは言ふまでもない。又この語尾變化の形式上の差異によつて、形容詞が「久活用」と「志久活用」と、二つの種類に分れてゐることも說くまでもない。即ち左の通りである。

	語幹	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形
久活用	良	く	く	し	き	けれ
志久活用	樂し	く	く	○	き	けれ

しかるに、普通の文法書では右表は左の如く記されてゐるのが常である。

	語幹	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形
久活用	良	く	く	し	き	けれ
志久活用	樂	しく	しく	し	しき	しけれ

併しこの第二表の活用形に現れてゐる志久活用の語尾に就いては承服し難い點がある。即ち用言の活用に於ては、その變化しない部分を語幹とし、變化する部分を語尾といふのである。然らば志久活用の「し」は全部の五活用形の中に存在するのであるから、變化しない部分でなければならない。變化しない部分である以上「し」は語幹でなければならない。故に第一表の如く語幹は「樂し」であつて、語尾は「く、く、○、き、けれ」でなければならない。終止形は無いが、文の終止の用をなさしめる時には「樂し」といふ語幹そのまゝを用ひるのである。「休暇は樂し。」の「樂し」は、文の終止に用ひられたものであつて、語幹がその用をなしてゐると見るのである。

又「深さ」「深み」「高さ」「高み」の様に形容詞が名詞になる時には、形容詞の語幹に「み」「さ」或は「げ」をつけるのである。從つて志久活用に於ても、「樂しさ」「樂しみ」「樂しげ」の「樂し」は「み」「さ」「げ」に連つてゐるのであるか

ら語幹でなければならない。

更に形容詞が名詞と複合する時には、いづれも語幹よりするのが常である。久活用の「淺瀨」「高山」「深川」などはこの例である。從つて志久活用の「細女」「空烟」「嬉涙」の「くはし」「むなし」「うれし」等は當然語幹でなければならない。

この如く若し「し」が志久活用の語尾であるならば、その終止形は「樂しし」「嬉しし」「悲しし」「淋しし」とならなければならないのに、單に「樂し」「嬉し」「悲し」「淋し」といふ語幹を代用させて「し」を重ねないのは、同語音の重複を避けたのであらうと思はれる。口語では「樂しい」「嬉しい」「悲しい」「淋しい」といふ。この語尾の「い」は「し」の音便ではあるまいか。(勿論口語の終止形は連體形の語尾「き」の音便「い」に依り同化されたとも考へられる。)而して、

家苞にきのみな折りそ櫻花山の思はむこともやさしし。(後撰集)

秋深み夜風烈しし宜しこそ四方の里人衣打つなれ。(永長二年東塔東谷歌合)

祇王にも劣らず歌の音のよさよいししと嘆られたり。(源平盛衰記)

折節風は烈しし、炎木は一つなりけれども、吹迷ふ風に多くの伽藍に吹きかけたり。(源平盛衰記)

友あらがひ共詮なし、平家の漏聞かむもおこがましし。(源平盛衰記)

等の例は「廣日本文典別記」にもあげてある樣に、鎌倉時代から用ひられかけたもので、平安朝の正格語法では無かつたことに注意しなければならない。その正格語法が「し」を重ねなかつたのは、聲音現象での所謂不同化作用ではあるまいかと思ふ。とにかく志久活用の語幹と語尾との關係は以上の如く考ふべきではあるまいか。

なほ形容詞の活用形に就いて問題になるのは、その活用形發達の歷史的過程に就いてである。卽ち「けれ」「しけれ」といふ語尾變化が古事記や日本書紀には存在しないで、萬葉集では條件法となる場合にのみ存在してゐるので、その成立が新しいものであるといはれる如き、且つその上代の形容詞が語幹だけで用ひられる形が多いためにこれは語幹ではなくて、その發達のある過程を示すものであると說かれる如き、或はその語尾「し」の發生の如き、幾多考察を要すべき問題が殘されてゐるのである。これ等の問題に就いては、

上田　萬年　形容詞考（「國語のため第二」所收）　　大島正健　形容詞組織考（「早稻田文學」）

金澤庄三郎　形容詞考（「教育學術界」）　　山田孝雄　奈良朝文法史

武田　祐吉　形容詞の論（「白鳥博士記念東洋語學の研究」所收）　　折口信夫　形容詞の論―語尾「し」の發生―（「同上」）

など有益なる參考論文がある。とにかく形容詞の活用に就いては歷史的文典の與るべき點が多いのである。

〔研究問題〕

（一）形容詞の發達過程論。　（二）志久活用の語幹論。

36　形容詞の職能

形容詞の職能としては、文の述語となること、形容詞的修飾語となること、副詞的修飾語となること等であるが、第一に注意すべきは文の述語となることである。

花　美し。　月　淸し。

稀に語幹が述語に使はれることがあるが、これも感動を表す場合に限られてゐるやうである。（口語では普通に用ひられてゐる。）併し語の單位とならぬ語幹が文の成分となるといふ說き方には議論の餘地があらうと思ふ。

あなおもしろ　　あなさやけ

第二に形容詞の職能として主要なるは形容詞的修飾語となることである。

美しき花　　清き月

なほ次の句は語幹が格助詞「の」を伴つて體言の形容詞的修飾語になつてゐるものである。

面白の樂の音や　　情なの心の様よ

形容詞が形修になるといふ務は、形容詞といふ名稱の本義に即してゐるものであることは言ふまでもないが、名詞を形容する詞(英語の所謂 adjective はこれに當る)が日本語では全部形容詞でないことに注意しなければならぬ。

この人　かの女　その本　赤色の旗　緑色の草葉　三十六峯　六歌仙　咲く花　照る月　歸る雁　活潑なる子供

これ等は文章法として形修であることは言ふまでもないが、品詞としては形容詞でないのである。助詞に連體格を示す格助詞があり、動詞・助動詞等に連體形といふ活用形の發達してゐることを思ひ合すべきである。

形容詞の第三の職能は副詞的修飾語となることである。

花美しく咲く。　月清く照る。

右の「美しく」「清く」はともに形容詞の副詞形であつて、下の用言「咲く」「照る」を副詞的に修飾限定してゐるのである。動詞には所謂連用法といふのがあつて、その連用形が修飾關係を離れて他の用言に連るのであるが、形容詞にはこの意味の連用法は絶對に無くて、必ず副詞的修飾語になることに於て他の用言に連る所謂副詞法があるのみなのである。これ形容詞にも同格連用といふのがあると説く人がある所以である。即ち山田孝雄博士の「日本文法講義」(三

八〇頁）には次の様に說いてある。

櫻の花うるはしくさけり。　望月のかげ淸くさやけし。

この場合のものは「うるはしく」「淸く」は下の「さけり」「さやけし」と共に主格たる「櫻の花」「望月のかげ」に對して陳述をなせるものにして之を分解して次の如くなすことをうるものなり。

櫻の花うるはし。　櫻の花さけり。

望月のかげ淸し。　望月のかげさやけし。

しかして、之を陳述する時にあたり、この二の意義を以て同時に說明せんとするが爲にかく連用形にて連れたるものなり。又、

け高く潔き丈夫の魂。　あしげの馬の太く逞しきに乘る。

の如く連體格準體言にもあらはるゝことあり。かくしてこれらの二の用言は共に同等の資格を有するものなるが故に之を同格連用と稱す。

右の說の中、連體格準體言にもあらはるゝといふ「け高く」「たく」の例は、形容詞の連用形が中止形として使はれてゐるものであつて、語の位置は他の用言の上に置かれてゐるけれども、實は、

け高き潔き丈夫の魂。　あしげの馬の太き逞しきに乘る。

とも言ひ得るものであるから、所謂副修法でないこと勿論である。又「望月のかげ淸くさやけし。」の例は、所謂述語の併置であつて、所說の如く、

望月のかげ淸し。
望月のかげさやけし。 ｝望月のかげ淸くさやけし。

となつたものであるから、用言の副修法では無く、「清く」は「さやけし」が下にあるために一時中止された中止形である。中止形は元來語の位置的承接にすぎないのであつて、若しその順序を轉倒しようと思へば轉倒しても差支ないものである。即ち、

望月のかげ清く（中止形）さやけし。　望月のかげさやけく（中止形）清し。

のいづれをとるも文意に於て支障は來さないのである。これ、上の用言の連用形が下の用言に對して修飾關係に立つてゐない證據である。

右の立場からすると、同格連用として山田博士の擧げてをられる前述の例、

櫻の花うるはしくさけり。

は同格連用ではなくて修飾連用ではあるまいかと思ふ。何故ならば、

櫻の花咲き（中止形）うるはし。

とは言ひ得ない樣に思ふし、又、動詞の場合に述べた同格連用と修飾連用との識別法（二九「動詞の職能」の條參照）をも完全にあてはめる事が出來ないと思ふ。即ち、

櫻の花うるはしく且つ咲く。

とは言ひ得ないのである。從つて「うるはしく」と「咲く」とは決して同格的に連續してゐるのでは無いのであつて、これは修飾的に連續してゐるのであると思ふ。即ち「うるはしく」といふのは形容詞の連用形が副詞法として用ひられてゐるのであつて、下の動詞「咲く」を副修的に修飾してゐるのである。茲に於て形容詞の連用形はその用法に於て、中

止法であるか、副修法であるかの識別が大切となるのである。

なほこれに連關して考ふべきは次の如く論ずる人のあることである。即ち形容詞の連用形が用言に連る場合に二つあるとして、

山高く聳ゆ。　詳しく知る。

名殘惜しく思ふ。　世を狹く見る。

に就いて、「高く」「詳しく」は、下なる用言「聳ゆ」「知る」を副詞的に修飾してゐると説くのであるから、これは問題は無いが、「惜しく」「狹く」は下なる用言を修飾せずに、上なる體言「名殘」「世」の性質を表す用ひ方であると説くのである。即ち「名殘が惜しい」と思ひ、「世を狹い」と見るのである。

家を小さく造る。　肉を柔かく煮る。　竹を短く切る。　屋根を赤く葺く。　石を細かく碎く

等の形容詞は、皆、上にある體言の屬性を説明するとなすのである。(湯澤幸吉郎著「解説日本文法」八二頁―八三頁參照)

併しこれに就いて考へるに、

名殘惜しく思ふ。

に於て、これを文章法上より成分的に解剖すれば、

名殘　惜しく　思ふ。

となるのであるから、「惜しく」は「名殘」の述語と見て差支なく、從つて之を「思ふ」にかゝる副詞的修飾語とは見られ

ないのである。けれども、

世を狭く見る。　家を小さく造る。

等の例に於ける「狭く」「小さく」「柔かく」「短く」「赤く」「細かく」等は、皆、下の用言「見る」「造る」「煮る」「切る」「葺く」「碎く」等を副詞的に修飾してゐるのであつて、

山高く聳ゆ。　詳しく知る。

の「高く」「詳しく」と何等の差もないと思ふ。まして一部文法學者の間には、右の例に於ける「世を」「家を」「肉を」「竹を」「屋根を」「石を」の如き例を客語とは見ないで、副詞的修飾語と見る說があるに於てをやである。

世を狭く見る。

は世を見るのであつて、その見方は狭く見るといふ意である。「世を」はどうしても「見る」にかゝるのであつて、「狭い」にかゝるのでない。「世を狭い」とはどうしても續き得ないのである。

なほその他の形容詞の職能は、次項の形容詞の各活用形の用法に讓ることにする。

〔研究問題〕

（一）「世を狭く見る」の「狭く」の見方。

37　形容詞活用形の用法

こゝに、形容詞の語幹及び各活用形の用法を說明しようと思ふが、その大體は次の如くである。

〔一〕語幹　文の終止に用ひられることは既に述べた通りである。

語幹は又格助詞「の」をとつて體言の形容詞的修飾語になることがある。

面白の樂の音や。　めざましの事や。

あぢきなの世の中や。　あなめでたの人や。

平安朝に多く用ひられた用法である。

語幹は又獨立して體言となることがある。體言になつてしまへば、品詞が轉換してしまつたのであるから、もはや形容詞ではないが、轉換以前は語幹であることに留意すべきである。

青　赤　白　黒

しかし、これは「青」「赤」「白」「黒」といふ體言が、形容詞を作る接尾語「し」をとつて形容詞になつたものであるかも知れない。さうであれば此の說は成立しない。後考の餘地がある。

他の名詞と熟合することがある。

甘口　甘皮　端近　輕業　長歎　遠乘　弱腰

接尾辭をとつて名詞となるものがある。

高み　高さ　樂しみ　樂しさ　嬉しげ　さかしら

他の動詞形容詞と熟合することがある。

長引く　近づく　遠ざかる　細長し　薄暗し

接尾語を伴つて動詞になるものがある。

おやしむ　おやぶむ　いたむ　うとむ　かなしむ　くるしむ　したしむ　にくむ

かういふ例は「奈良朝文法史」(九七頁—九八頁)に多數あげてある。なほこれに聯關して考ふべきは、

むらぎもの心を痛み。　心をいとほしみ。　瀬をはやみ。

の如き、「痛み」「いとほしみ」「はやみ」を何と解くかといふ問題である。「を」は主格を現す語であつて「心が痛いので」「心がいとほしいので」「瀬がはやいので」など說くべきであるとは、普通の說であるが、下の「痛み」「いとほしみ」「はやみ」を動詞化したと說く山田博士の說は、注意すべきであると思ふ。同博士の「萬葉集講義卷第一」(四九頁—五〇頁)に曰く、

心乎痛見……「イタミ」は「痛し」といふ語を動詞に化せしめたるものにして「痛く思ひ」「痛きによりて」などいひかふるを得べし。……これらの例を釋するにその「み」を「サニ」といふべしといふ說あり。大意はそれにてもわかるべし。されど、文法上よりいへば、これは連用形なれば、「痛み」は「痛きによりて」、「なつかしみ」は「なつかしきによりて」などいふを可とす。さて又「心乎」「野乎」などの「を」は格助詞即處分する意ありやといふに、しかは見えず。これは古く行はれたる感動の助詞にて力强くいふに止まりてそれを處分する意なし。さればただ理解するのみのときには「を」を釋せずして「心をいたみ」は「心がいたきによりて」「野をひろみ」は「野がひろきによりて」の如く解すべし。この「を」が處分する意あるにあらぬことは「を」をあらはさずしていへる例の多きにても知るべし。……

これは主として語句解釋上の議論であるけれども、移して文法上の議論にも適應せしめることが出來るのであつて、形容詞と動詞との交涉に微妙なる關係の存することが知られるのである。

語幹が重複して副詞を作ることがある。

長々(ながなが)　近々(ちかぢか)　細々(ほそぼそ)　薄々(うすうす)　久々(ひさびさ)

語幹が重複して他の形容詞を作ることがある。

長々し　重々し　遠々し　弱々し

「み」をつけて更にサ變の「す」と熟合することがある。

[illegible]みす　無みす　輕んず(輕みす)　重んず(重みす)　疎んず(疎みす)

〔二〕未然形　假定條件形ともいふべき形であつて、接續助詞「ば」「とも」をとつて假定法を示すのに用ひられる。

性質良くば採用せん。　何は無くとも心ばかりの款待をなすべし。

未然形と連用形とは形容詞に於ては同形であるので、區別する必要なく、この「ば」「とも」のつく形も之を連用形と見なさうといふ考がある。即ち、

良くば→良くあらば　無くとも→無くありとも

の如く、活用形と「ば」「とも」との間に「あり」といふ動詞を省いたものであると考へるのである。これも一説ではあらうが、動詞に準じて未然形連用形の區別を立ててゐるのであるから、未然形を認めて置いて差支は無からう。形容詞の未然形には打消の助動詞「ず」の連ならないことは既に述べた通りであるが、若し形容詞を打消さうと思ふのであつたら、これに動詞「あり」をつけて、更に「ず」を連ねるか、さもなくば形容動詞として後に「ず」を連ねるのである。

〔三〕連用形　用言に於ける連用形の職能は非常に重大であるが、形容詞に於ても種々重要な用法を果してゐるので

ある。

副詞的修飾語となること。

　空清く晴れたり。　彼は寂しく笑へり。

動詞の連用法との差違に就いては既に度々述べた通りである。

なほこの「清く」「寂しく」の如く副修法に立つてゐる形容詞の連用形を副詞だとして、品詞の轉換してしまつてゐるものと説く説もあるが、茲には取らない。何故ならば、形容詞の連用形はすべてこの副修法のはたらきに立ち得るのである以上、それは形容詞全體の持つてゐる特質である。從つてそれは形容詞本來の職能である。形容詞本來の職能である以上どこまでも形容詞の活用形の一つでなければならない。品詞の轉換は行はれてゐないのである。山田博士は「日本文法論」(二三五頁以下)の中で、

　水清く流る。　壁を白く塗る。

の例をあげて、右の「清く」「白く」が副詞でないことを論じようとして、次の如く言つてをられる。『實にこの「清く」「白く」は「流る」「塗る」に對してその屬性的觀念を修飾せずして體言の屬性を指示せることは明なり。「流る」「塗る」の修飾ならば「早く」「うまく」の如きものこそふさはしからめ。云々』とて詳説がある。併し動詞の連用形にすら副修法がある以上、形容詞の連用形に副修法があるのは當然である。たゞ副詞といふ品詞に轉換してゐないことだけは前述の理由によりてあくまでも主張したいと思ふ。

形容詞の連用形を、連用形と稱へないで副詞形と呼ばうとする人もある。この形に連用法が無くて、副修法が非常

に多い所からすれば、これも適當と思はれるが、活用形の名稱は動詞に準じて附けたものとすれば强ひて異をたてるにも當るまい。

中止法。

山高く水清し。　冬は寒く夏は暑し。

右の「高く」「清く」は下に用言がなくて、意味を一時中止してゐるのであるから中止法に用ひられてゐるのである。

白く美しき花。　樂しく嬉しき日。

右の「白く」「樂しく」も花に對する形修になるのであるが、下に「美しき」「嬉しき」があるために、一時中止してゐるのであつて中止法である。勿論連用法ではない。

名詞法。形容詞の連用形が名詞になることは動詞に比してはるかに少い。

遠くの方を望む。　近くに移り住めり。

多くを望まず。　若くより聰明なり。

且つ名詞につく格助詞「が」「の」「に」「を」を全部とることが出來ない點からすれば、完全に名詞に轉換してゐるとは言ひ難いのである。

動詞は連用形から熟語を作るのであるが、形容詞は語幹からすること前述の通りである。

〔四〕**終止形**　文の終止に用ひる。これは説明の要もあるまい。

この形から名詞になることがある。

あかし（燈明）　おもし（重）　よしあし（善惡）　ながしみぢかし（長短）　からし（芥子）　すし（酢）　たのもし（頼母子）

正(たゞし)（人名）　等(ひとし)（人名）　猛(たけし)（人名）

格助詞「の」を作つて體言の形容詞的修飾語になることがある。

來る人無しの宿の庭（古今集）

他の品詞と結びついて熟語を作ることがある。

ありなし（有無）　意氣地無し　根なし言　棚なし小舟

右の例の如くこれは「無し」といふ形容詞に多い。

〔五〕 **連體形**　體言に連る。次の例はこれである。

美しき花　よき日

形容詞の名稱にふさはしい働きはこの形に於てなされるのである。英文法に於ける Adjective の義はこの形で果されるのである。文章法的に言へば形容詞がそのまゝ體言の形修になる形であり、用法として言へば形修法、格でいへば連體格に立つ形である。

第二終止法。上に「ぞ」「なむ」「や」「か」の係助詞が來る時はこの形で結ばれること動詞と同樣である。奈良朝時代までは「こそ」に對してもこの形で結んでゐた。これ已然形の發達が遲れてゐたからである。

おのが妻こそとこめづらしき。（萬葉集）

野をひろみ草こそしげき。（萬葉集）

衣こそはふたへもよき。（書紀）

冬の來て山もあらはに木の葉降り殘る松さへ峯にさびしき。（新古今集）

の如く、係助詞に應じたのでなくて連體形で終止してゐる連體止は、修辭上の要求によつてなされたもので餘韻法の一つである。文法的には係助詞に應じた場合を正格とし、これは變格とすべきものであらう。修辭學と文法學とはその領域を異にすることに注意しなければならぬ。

助動詞「なり」「如し」に連る。

見かけは短かけれど實は長きならん。　有れども無き如し。

體言の格に用ひられることがある。

心の美しきは容貌の美しきに百倍す。　醜きをきらひ美しきを好む。

苦きと甘きといづれかよき。　樂しきは友の遠方より來れるなり。

右の用法は所謂準體言に立つてゐるのであつて、下に來てゐる助詞に對し、文の成分としては體言同樣の資格に立つてゐるのである。この場合第一例の「美しき」の如きを形容詞と動詞との兩性質ありといふ人もある。或はこの連體形は體言の資格を持つてゐるのでなくて、下に來べき體言が省略されてゐると說く人もある。

〔六〕已然形　接續助詞「ば」「ど」「ども」に附いて確定の條件を示すのは動詞の場合と同樣である。

味甘ければ小兒に好まる。　命長ければ恥多し。

水清けれど魚棲まず。　質良けれども價高し。

文の終止に用ひられることがある。

月見れば千々にものこそ悲しけれ。（古今集）　山里は秋こそことにわびしけれ。（古今集）

上に「こそ」といふ係助詞の來た場合の終止に用ひられるのである。奈良朝時代に於ては「こそ」に對する結びとして連體形を用ひたことは前述の通りである。

なほこの已然形の「けれ」に就いては、山田博士の「平安朝文法史」（六六頁―六七頁）に次の如き說が見えてゐる。

この「けれ」は元來は「く」が存在動詞「あり」に熟してなれる「かり」の已然形の轉訛せしものなることは萬葉期の研究によりて明なるが、今この期に入りては「き」を以て「こそ」に對する終止とすること殆やみて、その代りに、これを以て終止とすることとなりしなり。さればこれが、この已然形なるものの證は、終止となれるものをとるにあり。何となれば、「こそ」に對する「き」が消失して、その地位を占めたるを以てなり。こはいつ頃よりかくなりしものかといふに、この連體形の「き」が「こそ」に對する終止たることやみたると同時ならざるべからず。しかれども之を精査すること難し。古今集はその如何に古き語とみゆるものもみな「けれ」にして「き」にあらず。（例略）とにかくにこの期の始より、卽、萬葉以後には「き」を以て「こそ」に對すること見えずなりぬ。

さて又この「けれ」が何の原因によりてこの種の用言の已然形となりしかと考ふるに、こは必、かの「ば」といふ助詞の力なるべく思はる。かの「ば」は未然形と已然形と二方に附屬するものなるに、形容詞にはこの已然形を缺けり。この故に、かの形式用言の熟せる、「かれ」を使用せしが、これとても「からば」と相對して形式用言のものなること明に見ゆれば形容詞の「くば」に對するものとしては、「かれば」と稍形を異にせる「ければ」を使用せるが、いつしか形容詞の變化たるが如き感想を生ずるに至り

しにあらざるか。いささか私見を記して後の研究にまつ。

〔七〕命令形　形容詞には命令形が無いから、命令の意味を形容詞に就いて表したい時には、動詞「あり」をつけるか、形容動詞とするかの孰れかの方法をとるのである。

〔研究問題〕

(一)形容詞の連用形の用法。　(二)形容詞に命令形なき理由。

38　形容詞の音便

形容詞にも動詞同様音便があるが、種類は少くて僅かにウ音便とイ音便との二種だけである。(口語には促音便もあるが文語にはない。)

〔一〕ウ音便　形容詞の連用形の語尾「く」が「う」に變る場合である。

くちをしう侍りけり。(竹取物語)　聲いみじうなかしう聞ゆ。(宇津保物語)

はかなうつくりたる家なりけり。(源氏物語)　秋ちかう野はなりにけり。(古今集)

〔二〕イ音便　連用形の語尾「き」が「い」に變る場合である。

うちとけず苦しいこと多かり。(源氏物語)　若い心地に戀しかり。(同上)　あゝ悲しい哉。

用言の音便は動詞に於ては連用形に現れたのであるが、形容詞に於ては連體形に現れることに注意すべきである。その原因は品詞上、活用形上の差に基くのではなくて、專ら音聲學上の原理に基くものであらうと思ふ。

39　敬語の形容詞

敬語の形容詞は敬語動詞に比して遙かにその數が少く、殆ど論ずるに足りない。これ形容詞は動作を現さないからである。しかもその敬語の現れ方も極めて單純であつて、接頭語

「御」を形容詞に冠せしむるにすぎない。

御。なやましう。　　　　御。うしろめたきこと。

御。めざましく思召され。　御。うるはしき樣。

第七章　形　容　動　詞

40　形容動詞の本義

形容動詞といふのは、その名稱の示す通り、形容詞の性質と動詞の性質とを併せ有してゐる詞である。卽ち事物の性質・狀態を表す點では形容詞でありながら、その形態は動詞のラ行變格活用と同樣の活用語尾をもつてゐるものである。（なほ形容詞と動詞との兩性質を持つてゐることに就いては次項で詳說する。）これを一つの品詞と認めるか否かに就いては、種々の議論があつて、未だ一般的には承認せられてはゐないが、吉澤博士は之を一品詞として特設する理由があることを主張してをられる。（これに就いては次項で詳說する。）前にも述べた樣に、國語に於ける動詞と形容詞との區別は、その觀念上には無くて、主として形態上、卽ちその語尾變化の樣式の相違にありとするならば、形容動詞も形容詞の意味を有する動詞として、動詞の中に屬せしむべきものであると思はれるが、もしその本質に於てなほ動詞に屬せしむることの出來ないものがあるとしたら、この一品詞を特設するより外はあるまいと思はれる。この點よく研究しなければならぬ問題である。以上の點よりして形容動詞は勿論用言の一種と見なさるべきである。

何故にこの樣に二種の品詞の特性を持つたかくの如き形容動詞と呼ばるべきものが發生したであらうか。これは畢

竟するに形容詞そのものの有する缺點を補はうとする所から起つたものと思はれる。即ち形容詞は動詞と同樣文の述語になることが出來るに拘らず、動詞の樣に、否定・推量・完了などの助動詞と連ることが出來ないのである。又、動詞は活用形に命令形を持つてゐるけれども、形容詞にはこれがないといふが如き多くの缺點を持つてゐるのである。たとへば次の如きはその缺點が形容動詞のために補はれる例である。

打消	推量	過去	命令
早からず	早からむ	早かりき	早かれ
穩かならず	穩かならむ	穩かなりき	穩かなれ
平然たらず	平然たらむ	平然たりき	平然たれ

〔研究問題〕

（一）形容動詞發生論。

41　形容動詞の形態　形容動詞はその活用に於ては動詞と全く同樣であるが、その成立過程に於てはこれを三種に分けて考へて見ることが出來る。

	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
善	から	かり	かり	かる	ケレ	かれ
靜か	なら	なり	なり	なる	なれ	なれ
堂々	たら	たり	たり	たる	たれ	たれ

右の表に於ける「善かり」「靜かなり」「堂々たり」の三語は共に活用は動詞のラ行變格活用と同樣であるから、語尾

は「ら、り、り、る、れ、れ」であつて、その間に何等の區別も無いのである。從つてこれを、

善かり……カリ活用　靜かなり……ナリ活用　堂々たり……タリ活用

の如く三種に區別する必要は文法的形態の上からは何も無いのである。しかし、もしこれ等三種の語をその成立上から考へると、その間に區別を認めることが出來るのである。（尤も語の成立的考察は文法の正しい仕事ではない。文法は與へられた語、既に成立してゐる語、存在してゐる語に就いて、その形態・意味・職能を研究するのであるから、成立の考察は單に便宜上のことにすぎない）。即ち、

善かり←善く＋あり　靜かなり←靜かに＋あり　堂々たり←堂々と＋あり

の如く語尾の「く」「に」「と」がそれぞれ動詞「あり」と熟合して、「かり」「なり」「たり」が出來たのである。併し出來上つてしまつた形容動詞の語尾は「ら、り、り、る、れ、れ」であるから、「かり」「なり」「たり」の區別は全然不要である。依つて活用は次表に示す通り記せば足りるのである。

語幹	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
善か 靜かな 堂々た	ら	り	り	る	れ	れ

なほ形容動詞「靜かなり」「堂々たり」の「なり」「たり」を指定の助動詞と混同したり、從つて、「靜か」「堂々」を體言と誤つたりしない樣にする必要がある。これに就いては次の三點に留意すればその混同を避けることが出來よう。

（一）「靜か」「堂々」は體言でないから、これに形容詞的修飾語をつける事が出來ない。卽ち、

いみじき靜かなり。　まことの堂々たり。

右の如くいふことが出來ないのである。「靜か」「堂々」が體言でない以上、下の「なり」「たり」も指定の助動詞ではないのである。この場合若し「なり」「たり」の上にある語が純粹の體言であつたならば、次の如く何等の不都合もなく、形容詞的修飾語を加へることが出來るのである。

正成はいみじき忠臣なり。　君まことの君たれば、臣も亦まことの臣たり。

「忠臣」「君」「臣」が體言である以上、その下にある「なり」「たり」も當然指定の助動詞でなければならない。

（二）「靜かなり」「堂々たり」の上には次の如く副詞的修飾語を加へることが出來る。

いみじく靜かなり。　まことに堂々たり。

これ「靜かなり」「堂々たり」が一つの用言であるからである。（一）の場合に於ては「忠臣なり」「君たり」「臣たり」はまだ一語にはなつてゐず、「忠臣」「君」「臣」といふ體言と助動詞「なり」「たり」とが連續してゐるだけに過ぎないから、その上の體言だけにかゝる形容詞的修飾語を加へることが出來るのである。これに反して「靜か」「堂々」はこれに「なり」「たり」を加へて始めて完全な一語をなすので、「靜か」と「なり」、「堂々」と「たり」とは、離すことの出來ない緊密さをもつて一語となつてゐるのであるから、卽ち、一語の用言となつてゐるのであるから、「いみじく」「まことに」の如き副詞的修飾語を加へることが出來るのである。

（三）「靜か」「堂々」には名詞につく格助詞「が」「の」「に」「を」を全部連續せしめることが出來ない。これによつて

も「靜か」「堂々」が體言でないことが分るのである。これに反して「忠臣」「君」などには「が」「の」「に」「を」を何の不都合も無くつけることが出來るのである。これ「忠臣」「君」が純然たる體言であるからである。

更に今一つの問題は、「靜か」「堂々」を以て副詞と見なし、「靜かなり」「堂々たり」に副詞的修飾語がつくのは、それが「なり」「たり」と一語となつてゐるからではなくて、「靜か」「堂々」だけでも立派に一つの副詞であるからであるとする說に就いてである。右の說の如くとすれば「靜か」「堂々」に助詞「が」「の」「に」「を」が附かないのも當然といふ譯になるのである。これに就いては吉澤博士の「所謂形容動詞に就いて」(「國語・國文」昭和七年一月號所載)中に見える左の說にその解決はつきてゐると思ふ。

> 右の問に答へるには、自然「靜かに」「賑かに」が副詞か、「靜か」「賑か」が副詞かの問題が解決せられなければなるまい。「靜か」「賑か」を副詞と見る人は、「に」を助詞或は接尾語と見るのである。が、此の問題に答へるのは極めて簡單である。——「靜か」「賑か」といふ語はそれ自體で獨立に使はれることがあるだらうか。いつでも「靜かに」「賑かに」といふ形即ち「に」に導かれた形で用ひられてゐるではないか。尤もこの語の類には「遙か、へだたつて」とか「つく〴〵見てゐる」のやうに「に」や「と」に導かれることなくして使はれる場合のあるものも無いではないが、それらも歷史的に考へて、後世「に」や「と」が落脫した第二次的な略體であつて、やはり「遙かに」「つく〴〵と」を本體と認めなければならない。「靜かに」「賑かに」などにはまだその略體は發達してゐないから、必ず「に」「さ」「だ」等他の語に結合した形、即ち「靜かに」「靜かさ」「靜かだ」等の形でなければ使はれないのである。さうした形でなければ用ひられないとすれば、その結合した形を一單語として認めなければならないではないか。「ひとつ」「ふたつ」は數詞である。が、語尾の「つ」は明かに接尾語であり、「ひと」「ふた」は語幹であり、「ひ」「ふ」は

語根である。けれども「つ」なしにそれらの語が用ひられることはないから、吾人は「ひとつ」「ふたつ」を一語として、それらを數詞と呼んでゐるのである。「靜かに」「賑かに」の成立を解剖すれば語根は「し」「に」乃至は「しづ」「にぎ」であり、語幹は「しづか」「にぎやか」であり、それに「に」が結びついたものではあるが、その形でなければ使はれない以上、それらを二語なり三語なりに分解することは、文法では認められぬ筈のものでない。若しそれが別けられなければならないならば、「あらゆる」は「あら」と「ゆる」とに別けらるべきであるし、「おそらく」は「おそら」と「く」とに別けられなければなるまい。「あらゆる」「おそらく」といふ形でなければ用ひられないから、「あらゆる」が接頭語であるし、「おそらく」が副詞であるやうに、「靜かに」「賑かに」が一語でなければならない。即ち「靜か」「賑か」は語幹であつて一語ではなく、また「に」もこの場合語尾であつて、一語ではないのである。で、「靜か」「に」とか「賑か」「に」とか解剖せらるべきものではなく、「靜かに」「賑かに」と解剖せらるべきものである。

〔研究問題〕

（一）形容動詞と副詞との關係。

42　形容動詞特設の理由

形容動詞は、既にのべた樣にその活用形態は全くラ行變格活用の動詞と同じであるから形態を主とする文法的分類に於ては、當然動詞に入れられなければならない。しかるに動詞に入れないでこれを一品詞として獨立的に特設しようとするからには、其處にそれ相當の理由が無ければならない。この理由の考察に於ては、吉澤博士の前述の論文「所謂形容動詞に就いて」が從來の諸説中最もすぐれてゐると思はれるから、その説に基いて要點のみを述べて見よう。

大矢透氏の「語格指南」及び三矢重松氏の「高等日本文法」を見ると、形狀言又は形容詞として說いてあるのではあるが、カリ活・ナリ活・タリ活にそれ〴〵「く」「に」「と」の活用形が認めてある。これらの活用形を認めることになると、中止法が認められるばかりでなく、副詞法が認められることになるのであるから、形態にも職能にも特色ある用言が出現するわけで、形容詞でなく動詞でもない、特殊の品詞を立てなければならぬことになるのである。

- 動詞
  - 連用法（花散り果てたり。）
  - （副詞法無し）
  - 中止法（本を讀み字を習ふ。）
- 形容詞
  - 中止法（山高く水清し。）
  - （連用法無し）
  - 副詞法（月清く澄む。）

- 形容動詞
  - 連用法
    - （命長かりき。）
    - （風靜かなりけり。）
    - （風采堂々たりしかば。）
  - 中止法
    - （命長く譽高し。）
    - （風靜かに浪穩かなり。）
    - （風采堂々として辯舌爽かなり。）
  - 副詞法
    - （命長く續くべし。）
    - （風靜かに吹き出でたり。）
    - （彼は堂々と主張せり。）

即ち形容動詞は動詞にも形容詞にもある中止法を有する外、動詞に無い副詞法も、形容詞に無い連用法も併せ有つてゐるといふことになるのである。故にこの「く」「に」「と」といふ形が、果して形容動詞の活用形であるか、それとも

從來說かれてゐるが如く、副詞の語尾であるかを解決しなければならない。もし活用形であつたら、形容動詞といふ獨立の一品詞が特設せられることになるのである。さて次の例、

風靜かに浪穩かなり。

に於て「靜かに」は中止法であること疑ない。この場合「靜かにて」「靜かにして」ともいふが矢張中止法である。この「に」を形容動詞を作る副詞の語尾の「に」と說く人(吉岡鄉甫氏)もあるが、ある用言の中止形に他の品詞を借りて來て充當すると解釋することは合理的ではあるまい。かうなるとカリ活の中止形は「く」であるから、形容詞の中止形を借りて形容動詞の中止法を果させると見なければならぬことになる。若しこの代用を認めなければ、「く」といふ形の中止はいつも形容詞の中止法であつて、カリ活の中止法はその代用語すらも無いものだと見なければならなくなる。とにかく、カリ活とナリ活・タリ活との間には中止法に就いて別様の解釋を施さなければならなくなる。從つて一つの用言の活用形の說明に他の品詞を借りて來るといふことは贊成出來ない。そこで他の合理的解釋を求めなければならなくのである。

よく泳ぐ者は溺る。

少しく說の妥當を缺けり。

右の「よく」は、本來は「惡しく」に對する「善く」から發達したもので、出典「淮南子」には「善」の字が用ひてある。しかし、右の如く用ひられた「よく」は「能く」の字をあてゝもよいもので、「惡し」に對する「善し」の活用ではない。意義も變つて、品詞は副詞に轉じてゐるのである。又「少しく」も本來はこの活用の形容詞であつたらうが、今はその活用を

失つて全く副詞に轉成してゐる。かく副詞に轉成した「能く」「少しく」はもはや「あり」と熟合してカリ活用に活らく事は出來ないのである。つまり同じ「く」の語尾があつても副詞の語尾であるものにはカリ活には活用しないのである。

又次の例、

堂々と　平然と　颯々と　斷乎と

は、いづれもタリ活用に活用することが出來るのであるが、次の例、

つくぐと　しみぐと　ふと　おのづと

は、タリ活用に活用することが出來ないのである。即ち「と」といふ語尾をもつてゐる語の中でもタリ活に活用するものと、しないものとがあることになる。前述の「能く」「少しく」より推せば、タリ活に活用しないものが本當の副詞であり、タリ活に活用する語の語尾「と」は副詞の語尾でなくて、用言の活用語尾と見なければならぬ。

このことはナリ活に就いても言へるのであつて、

まれに　大切に　靜かに　穩かに　優に

はナリ活に活用することが出來るが、

遂に　既に　實に　誠に

はナリ活に活用することが出來ないのである。即ち同じ「に」といふ語尾を持つてゐる語の中にも、純粹の副詞であるものと、ある用言であるものとが認められる譯である。

以上の三つの場合を綜合してみると次の如くになる。

(一)長く。 深く。 早く……カリ活に活用す。(用言)
少しく。 能く。 ……活用せず。 (副詞)

(二)堂々と。 平然と。 斷乎と……タリ活に活用す。(用言)
つくぐ\と。 ふと。 おのづと……活用せず。 (副詞)

(三)靜かに。 稀に。 大切に……ナリ活に活用す。(用言)
遂に。 既に。 試に……活用せず。 (副詞)

これを實例に徵して見るに、

かたちなどよからねどかたはに見ぐるしからぬわかうどなり。(源氏物語夕顏卷)

の「見ぐるしからぬ」の「ぬ」といふ否定の助動詞は「かたはに」も係るものと見なければ、「容色などは佳くはないけれど、かたはでなく見ぐるしくない若人だ。」といふ本文の意味が生きて來ない。この場合「かたはに」を「かたは」といふ名詞に「に」といふ助詞の連續したものと說いたとすれば、助詞に打消の助動詞が連續することになり、助動詞が名詞を打消すといふ不合理に陷るのである。(「見ぐるしから」は形容動詞のカリ活の未然形であることといふまでもない)。

父の年老いものむつかしげにふとりすぎ、せうとの顏にくげに、おもひやりことなることなきれやの內に、いといたく思ひあがり、はかなくしいでたる事わざも故なからず見えたらん、かたかどにてもいかゞ思ひのほかにをかしからざらむ。(源氏物語帚木卷)

右の場合に於ける「いかゞ思ひのほかにをかしからざらむ。」は、本文の意味から考へて次の如く解釋しなければなら

ない。

いかど｛思ひの外ならざらむ。
　　　　をかしからざらむ。

かくて、この場合「思ひの外に」を從來のまゝに副詞だとすると、打消の助動詞が副詞に連續し、副詞を打消すといふ不合理に陷るのである。

從つて以上の實例に於て、「かたはに」の「に」を助詞と見、また「思ひの外に」の「に」を副詞の語尾と見るよりも、

｛「かたはに」の「に」は指定の助動詞「なり」の中止形。
　「思ひの外に」の「に」は用言（形容動詞）の中止形。

と見るのが合理的であらうと思ふ。國語には動詞が重用せられる場合に、前者をその中止形で止め、後者にのみ打消の助動詞を連續せしめて、それによつて前者を否定する方法が行はれてゐるのであるから、「かたはに」及び「思ひの外に」の助動詞によつて打消されてゐる「に」は、活用語の中止形と見るべきものと思はれる。卽ち「思ひの外に」はナリ活用の形容動詞の中止形と認めるべきものと思ふ。

以上の論によつて「く」「に」「と」は形容動詞の活用形であるものと副詞の語尾であるものとの間に截然たる區別があることが明瞭になり、形容動詞特設の基礎が定まつた譯である。吉澤博士は大體如上の論理を骨子として、形容動詞を獨立の一品詞として特設しようとしてをられる。以下は、博士の作られた形容動詞の活用圖と、その論の結語である。

	第一活用	接辭	第二活用	接辭	第三活用	接辭	第四活用	接辭	第五活用	接辭	第六活用	接辭	第七活用	接辭
カリ	から	バ ズ	かり	キ	かり	トモ	かる	メリ ラム	かれ	バ	けれ かれ	ヨ	く	テ
ナリ	なら	ム マシ	なり	ケリ ツ	なり	ヤ ナ	なる	ベシ ラシ	なれ	ド	なれ	ヤ	に	シテ
タリ	たら	シム	たり	ヌ	たり	カシ	たる	マジ	たれ	ドモ	たれ	カシ	と	

この所謂形容動詞は、一方、助動詞に連續する點に於て動詞的性質を有し、一方副詞法を有する點に於て形容詞的性質を持つてゐる。卽ち動詞的性質はありながら動詞でもなく、形容詞的性質はありながら形容詞でも無い一種の用言である。こゝに於てか、所謂形容動詞は、動詞並に形容詞から獨立して、一品詞に立てられなければならぬ理由があるわけである。而して活用形は動詞的でありながら、形容詞的性質を有つてゐるから、形容動詞の名稱はこの新品詞に最もふさはしいものと考へる。

この吉澤博士の形容動詞說は主として文語に對して說かれてゐるのであるが、その文法的論理はこれを口語に移すことも出來るのである。私は拙著「高等口語法講義」(二二四頁—二五〇頁參照)で、この論理に基いて口語の形容動詞を整理して見たのであつたが、世にはさうしたとき方に對して反對してゐる學者もある。卽ち、

人物が靜かに、おほやうだ。　見た目が綺麗で、値がやすい。

の「に」「で」を、形容動詞の語尾に數へるのは、誤解であるといふのである。何故ならば「穩かな」「綺麗だ」は、「穩かに」「綺麗で」に、「ある」のついたものを一語と見て、その語尾を定めるのであるから、その「ある」を除いた副詞の

「穩かに」「綺麗で」を、その一活用形に數へるのは、形容動詞の成立を全然無視したものであり、この論法で行つたら、「に・あり」「と・あり」から出來た、いはゆる助動詞「なり」「たり」の連用形も、それぞれ、「に」であり、「と」であると言はねばならぬ理であるからと反駁するのである。更にこの論法で行けば、助動詞「ざり」（ず・あり）、「べかり」（べく・あり）、「たかり」（たく・あり）等の連用形も、それぞれ、「ず」「べく」「たく」であると言はねばならぬと言つて、その不合理を述べるのであるが、これはこゝに縷說するまでもなく、前述の吉澤博士の說に於て明瞭であると信ずる。

なほ序ながら、山田博士はこゝにいふ形容動詞に就いては、「日本文法講義」（一一二頁－一一五頁）の中で次の樣に述べてをられる。

形容存在詞――「あり」は上に形容詞を受けその連用形の語尾「く」と熟合して「かり」といふ形をなすことあり。今これを形容存在詞といふ。かくの如きは現代の文章にも盛んに用ゐらる。從來の文法家は多くは之を輕視せりき。余は敎科書には之を形容動詞といひてはやく之を說けり。

說明存在詞－助詞「に」又は「と」を伴へる名詞副詞が、「あり」に接して形體融合して「なり」「たり」といふ用言をなす。これらは他語を伴ひて說明の用に供する働を有するが故に今之を名づけて說明存在詞といふ。「なり」は「にあり」の約まれるもの、「たり」は「とあり」の約まれるものなり。この二語は共に必ずその上に名詞又は副詞を受け、それと合してはじめて用をなす、これ元來その「なり」「たり」の中に含まれたる「に」「と」がその名詞副詞の補助として用ゐらるべきものなればなり。

而して右の說明に相當する例の擧げてあるのを見るに、形容存在詞としては、

産物は國々の習慣風土によりて同じからず。

封建時代には實業の輕視せられし事甚しかりき。

豐な生活しといへども粗食よりは長かるべし。

稗な食料に用ゐるには憚ることなかれ。

はしたなめわづらはせたまふ時もおほかり。（源、桐壺）

の如きものであるから、前に述べた形容動詞の所謂カリ活に相當することが明かである。

次に說明存在詞の例としては、名詞を伴へるものとしては、

楠木正成は忠臣なり。

豪傑たり哲人たるを望まむもとより不可なし。されど豪傑たらむとしてえせ豪傑となり、哲人たらむとして生物識となるは不可なり。

が舉げてある。これは本講で說く形容動詞ではなく所謂指定の助動詞であつて、本講では用言とはみないのである。

又副詞を伴へるものの例としては、

氣候溫和なり。

その生活や質朴なり儉素なり。

滿天地の氣象に一種の偽善なる感情を起したり。

茫漠たる平野至る所にあり。

この事例異たらば、後人の爲ともなるべし。

立ちて窓戶を排けば星斗燦たり。

が舉げてある。これは本講で說く形容動詞のナリ活及びタリ活である。而して山田博士は我々の說く助動詞を以て單語とは認めず、用言の補助成分たる複語尾としてをられるのであるが、その立場に於てこの「なり」「たり」を複語尾とは見ず、單語と認めてをられるのである。本講に於ける形容動詞の見方と、山田博士の見方との相違は文法學上注

意すべき點であると思ふ。

〔研究問題〕

（一）形容動詞の本質を更に深究する必要はないか。　（二）文語の形容動詞と口語の形容動詞との比較研究。

（三）形容動詞の各活用形の用法。　（四）「かかり」「しかり」「さり」などの語を如何に考ふべきか。

（五）山田博士の動作存在詞（「あり」は上に來る四段活用、タ行三段活用の動詞と合併して「けり」「せり」「てり」「へり」「めり」「れり」となることあり。今これを動作存在詞といふ。——「日本文法講義」一一三頁—一一四頁——）を如何に考ふるか。

第八章　助　動　詞

43　**助動詞の本義**　助動詞といふのは、その名稱の如く、主として動詞に附いて、種々の意味の下にその敍述を助ける語である。

本日は雨降らず。　昨日は空晴れたりき。　明日は風吹かむ。

然るに助動詞の中には動詞以外種々なる品詞につくものがある。それを擧げてみると

（一）體言につくもの。

富士山は日本一の名山なり。　君君たり、臣臣たり。　總數二百萬なり。

（二）形容詞につくもの。

困難は距離の遠きなり。

(三)形容動詞につくもの。

風烈しかりしかば舟を出さざりき。

(四)助詞につくもの。

歳月は水の流るゝが如し。

(五)他の助動詞につくもの。

行幸あらせ給はぬなるべし。

など五つの場合がある。右の中、動詞・形容動詞・助動詞につく場合は、助動詞の承接するものとしては文法的に不都合は無いのであるが、體言・形容詞・助詞の三者に助動詞の連續することには、助動詞の本義より考へて妥當を缺くものと言はなければならない。

いま助動詞の中、この體言・形容詞・助詞の三者に連續する助動詞には如何なる語があるかと見るに、前述の例でも分る樣に、「なり」「たり」「如し」の三語のみである。然らばこの三語は果して助動詞と稱してよいであらうか。こゝに重要な問題があると思ふ。今次の例を見るに、

富士山はたしかに日本一の名山なり。　君實に君たり。臣實に臣たり。

總數およそ二百萬なり。　落花恰も雪の如し。

の如く、「たしかに」「實に」「およそ」「恰も」の副詞的修飾語は、下に用言も他の副作も無いにも拘らず、その職能を完全に果してゐるのである。これは下にある「なり」「たり」「如し」が敍述の職能を持つてゐるからであつて、もし

叙述の職能のない他の助動詞或は他の品詞であつたらこの事はあり得ないのである。従つて、「なり」「たり」「如し」の三語は厳密に言つて助動詞より除き去つて、観念語的要素のある用言の一種と見なすのが妥當であると思はれる。山田孝雄博士が、「なり」「たり」は陳述の形式のみをあらはし、「如し」はある狀態の形式のみをあらはす點に着眼し、「す」(動作の形式のみをあらはす)及び「あり」(汎く事物の存在のみをあらはす)とともに形式用言として扱はれたのは卓見であると思ふ。又三矢重松博士も「如し」を「高等日本文法」(舊版一二三頁—一二四頁)に於て特殊の形容詞として居られる。併し本書では、三語とも便宜助動詞として說くことにする。これ一般說に從つたためで嚴密なる文法的論理に從へば、當然助動詞より除くべきものであらう。

なほ山田孝雄博士が本講にて說く助動詞(勿論「なり」「たり」「如し」は除く)を以て複語尾と名付け、その本質を次の樣に考へてをられるのは注意すべき說である。(「日本文法講義」一二五頁—一二八頁)

> 動詞存在詞の本來の活用のみにて十分に陳述の作用を果すこと能はざる場合にその下に附屬して種々の意義を用言に補ふ特別の語尾を複語尾といふ。……これらは近來の文法書には助動詞と稱せられたれど、單語にあらずして用言の語尾の複雜に發達せるものなること……、しかしその助動詞といへる名稱は英文典の術語の譯語を轉用せるものなれど、その實を照すに吻合せぬものなること……
>
> 複語尾は形體上獨立せるものにあらずしていつも用言のある活用形に附屬して離れず、中間に他の語を容るゝことを許さずして常に連續體をなすものなり。……即ちこの場合にはその複語尾と上の活用形とは一體となりて離れず、その附屬せるまゝにて一の用言と見るなり。この故に分別書法をとりて各單語を分離して記載する場合にもこの複語尾は本幹たる用言の活用形と

決して分離してかきらはすべきものにあらざるなり。……國語の所謂助動詞と稱せらるゝものは實に語尾の複雜に發達したるものにして動詞の活用の一部なりとす。この故にその所屬に一定の法則ありて動かすべからざるなり。……漢語英語の助動詞は一の單語にしてしかも主たる動詞を助くるものなり。而主たる動詞とは形體上の連結なきものなり。

山田博士の說は右の樣であるが、

（主語）我は　（述語）行く。
（主語）我は　彼を　（述語）行かしむ。

（主語）彼は　（述語）褒む。
（主語）彼は　父に　（述語）褒めらる。

この例を見るに、述語の下に助動詞「しむ」「らる」を加へることによつて「彼を」「父に」といふ別の成分を必要とするに至るを見れば助動詞も亦單語としての資格を有してゐると見るべきであらう。

助動詞は勿論觀念語ではなくて形式語であるが、もし助詞を獨立の單語とするならば、助動詞も亦獨立の單語となし得るのではあるまいか。

〔研究問題〕

（一）「なり」「たり」「如し」の文法的處理。　（二）助動詞を單語とするの可否。

卅　助動詞の形態

助動詞は活用する品詞である。而してその活用形態によつて分類してみると、次の六種類がある。

（一）下二段型活用

る　れ　れ　る　るゝ　るれ　れよ

らる	られ	られ	らる	らるゝ	らるれ	られよ
す	せ	せ	す	する	すれ	せよ
さす	させ	させ	さす	さする	さすれ	させよ
しむ	しめ	しめ	しむ	しむる	しむれ	しめよ
つ	て	て	つ	つる	つれ	てよ
(二)形容詞型活用						
べし	べく	べく	べし	べき	べけれ	／
たし	たく	たく	たし	たき	たけれ	／
まほし	まほしく	まほしく	まほし	まほしき	まほしけれ	／
ごとし	ごとく	ごとく	ごとし	ごとき	／	／
まじ	まじく	まじく	まじ	まじき	まじけれ	／
(三)ナ行變格型活用						
ぬ	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ね
(四)ラ行變格型活用						
けり	けら	けり	けり	ける	けれ	／
り	ら	り	り	る	れ	／

めり	／	めり	めり	める	めれ	／
べかり	べから	べかり	べかり	べかる	べかれ	／
なり	なら	なり	なり	なる	なれ	なれ
たり	たら	たり	たり	たる	たれ	たれ
ざり	ざら	ざり	ざり	ざる	ざれ	ざれ

（五）四段型活用

む	／	／	む	む	め	／
らむ	／	／	らむ	らむ	らめ	／
けむ	／	／	けむ	けむ	けめ	／

（六）特殊型活用

き	／	／	き	し	しか	／
まし	／	／	まし	まし	ましか	／
ず	ず	ず	ず	ぬ	ね	／
らし	／	／	らし	らし	らし	／
じ	／	／	じ	じ	じ	／

而して右の活用表でも分る様に、六種の活用形を完備してゐるものは、下二段型活用の六語と、ナ行變格活用の一

語と、ラ行變格型活用中の三語と合せて十語にすぎない。その他は、

未然形を缺くもの　八語　　連用形を缺くもの　七語
已然形を缺くもの　一語　　命令形を缺くもの　十七語

である。而して右の活用形の缺如は二つ以上を兼ねるものもあつて、活用形は動詞・形容詞に比して著しい變態を呈してゐるといはなければならない。

45　助動詞の職能

助動詞の職能は前にも述べた樣に、主として動詞に附いて、その意味を助けて、動詞の職能を完からしめるものである。一つの助動詞で足りない時には、更に他の助動詞を重用してその意味を完からしめるのである。而してその意味は、それぞれの助動詞が內在してゐるのであるが、それは他の語に附屬することによつて發揮されるものである。こゝに助動詞の形式語たる所以が存するのである。

かく助動詞の職能は他の語との承接關係を離れては考へられないものであるから、助動詞に就いては、それが如何なる語の如何なる形に連續するかを重要視しなければ、その運用を全くすることは出來ないのである。

助動詞はそれが用言に連續するに當つては、その活用形との間に一定の連續規定があつて動かすことが出來ないのである。卽ち、未然形に連るものはその他の活用形に連る事能はず、連用形に連るもの亦然りである。今その用言の活用形を主としてその連續關係を區別すれば次の如くになる。

(一)未然形に連續するもの

「る」(四段)「らる」(四段・ナ變・ラ變以外)

「す」(四段)「さす」(四段・ナ變・ラ變以外)「しむ」
「む」　　「り」(サ變)
「まし」　　「まほし」

(二)連用形に連續するもの。
「ず」「ざり」「じ」
「き」(カ變・サ變には特殊の連續法がある)「けり」
「つ」「ぬ」「たり」
「けむ」
「たし」

(三)終止形に連續するもの(ラ變に於ては連體形に連る)
「らむ」「めり」「らし」「べし」「べかり」「まじ」
「なり」(咏嘆)

(四)連體形に連續するもの。
「なり」

(五)已然形に連續するもの。
「り」(四段)

右の連續關係は助動詞が助動詞に連續する場合にも準ぜらるべきものである。

以上の如く助動詞の職能の本體は用言に接續してその意味を全からしめるものであるから、用言がなり得る文の成分には、用言に伴はれ、用言と一體になつて立ち得るのである。次はその例の一部分を示す。

やがて花も咲きぬべし。　　花咲きなば鶯も來鳴かむ。

天巧の妙實に感ずべく、又驚くべし。(「日本文法講義」)　　射られたる矢は歸り來らず。

慰めまゐらせむ術も盡き果てたり。　　げにえたふまじく泣きたまふ。

人に知られで來る由もがな。

〔研究問題〕

(一)助動詞相互の連接用法の實際。

46 助動詞の分類

助動詞の分類は之を(一)意味の上から、(二)形態の上から、(三)連續の上から、の三方面より行ふことが出來る。

(一)意味上の分類。助動詞をその表す意味より分類すると次の如くになる。

受身の助動詞　使役の助動詞　可能の助動詞　敬語の助動詞　自發の助動詞　時の助動詞

推量の助動詞　希望の助動詞　比況の助動詞　指定の助動詞　否定の助動詞　詠嘆の助動詞

(二)形態上の分類。助動詞をその活用形態の上から分類すると次の如くになる。

下二段型の助動詞　形容詞型の助動詞　ナ行變格型の助動詞　ラ行變格型の助動詞　四段型の助動詞　特殊型の助動詞

(三)連續上の分類。助動詞はその連續によつて次の如くに分類される。

未然形連續の助動詞　連用形連續の助動詞　終止形連續の助動詞　連體形連續の助動詞　已然形連續の助動詞

體言連續の助動詞　助詞連續の助動詞

なほ山田博士は複語尾をその性質により次の如くに分類して居られる。(「日本文法講義」一四二頁―一四四頁)

(一)屬性の表現の方法に關するもの。

- 狀態性の間接作用
  - 受身「る」「らる」
  - 可能「る」「らる」
- 發動性の間接作用(使役「す」「さす」「しむ」)

（以上）未然形連續

(二)統覺の作用に關するもの。

- 希望をあらはすもの……………「たし」)連用形連續
- 陳述の狀態に關するもの
  - 打消すもの
    - 斷言するもの(打消「ず」「ざり」)
    - 不確實のもの
      - 打消の豫想「じ」
        （以上）未然形連續
      - 打消の推量「まじ」)終止形連續
  - 肯定するもの
    - 斷言するもの
      - 現實の確め(完了)「つ」「ぬ」「たり」
      - 過去の回想(過去)「き」「けり」
        （以上）連用形連續
    - 不確實のもの
      - 豫想するもの(未來「む」「まし」)未然形連續
      - 現實性のもの
        - 過去の想像「けむ」)連用形連續
        - 現實の推量(推量)「らむ」「らし」「めり」「べし」
          （以上）終止形連續

而してかく二大別する理由に就いては次の如く述べてをられる。

上に示せる二大別を生ずるは素用言の本性を因とし、用言の本幹と複語尾附屬のものとの對比を緣とす。卽用言の本幹たる第一語尾はその屬性の直接に作用せること又單純なる陳述をあらはすが、ここにその屬性の直接に含まれざるものをあらはし又その統覺の運用を委曲に陳述すべき必要生じ來る。この際にあたりて之をあらはすには複語尾によらざるべからず。かくて用言の所因は屬性と統覺との二者なるが故にそれらを助くるものにも亦二者の區分を見るに至る。かくの如くなれば、この二者は必然的に區分せらるべき理由あり。然るに世の語學者この大別に着眼せずして漫然助動詞を分類せるものあるは實に系統なきの甚しきものといふべし。

右の山田博士の分類も要するに意味分類の系統的整理といふべきものであらう。

47 受身の助動詞

助動詞の連つてゐる動詞の主語が他のものの動作を受けることを表すものを受身の助動詞といふ。

木の葉風に吹き落さる。　生徒教師より褒めらる。

受身の助動詞の活用と連續とは次表の通りである。

	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形	連續
る	れ	れ	る	るゝ	るれ	れよ	四段・ナ變・ラ變の未然形
らる	られ	られ	らる	らるゝ	らるれ	られよ	その他の動詞の未然形

西洋語では他動詞のみが受身となるのであるが、日本語では自動詞も受身となり得るのである。次の例はそれであ

る。

親、子に寄なる。　雨に降らる。

国語では受身になるのは、その動作を受けるものが不本意である場合が多いと言はれたのであるが、現在ではそんな窮屈な用法に束縛されてはゐない。次はその例である。

弟、兄に伴はれて旅行せり。

奈良朝時代には次の如き受身の助動詞が用ひられた。

	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	連続
ゆ	え	え	ゆ	ゆる	ゆれ	四段・ナ變・ラ變未然形
らゆ	らえ	らえ	らゆ	らゆる	らゆれ	その他の動詞の未然形

その用例は次の様であつた。

見るに知らえぬうまひとのこと。（未然形）　都の手ぶり忘らえにけり。（連用形）

音のみし泣かゆ。（終止形）　はろばろに思ほゆるかも。（連體形）

ませ越しに麦はむ駒ののらゆれど。（已然形）　妹を思ひのいのねらえぬに。（未然形）

今日の「謂はゆる」「有らゆる」はこの連體形の熟語となつて残つてゐるものである。（「奈良朝文法史」一七五頁—一七九頁參照）

〔研究問題〕

（一）「……セラル」といふべき場合に「……サル」と用ひる習慣あるものは之に從ふも妨なし、といふ「文法上許容ニ關スル事項」の說明。

（二）「人知れずこそ思ひそめしか」「醜き姿を人に見えじ」の「知れ」「見え」を如何に解釋するか。

48 使役の助動詞

助動詞の連つてゐる動詞の主語が、自らその動作をしないで、他のものをして、その動作を行はしめる意を表す助動詞を使役の助動詞といふ。

下女を使に走らす。

つかさを得さすとも兄にはまさらむ。（落窪物語）

犬をして家を守らしむ。

使役の助動詞の活用と連續は次表の通りである。

	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形	連續
す	せ	せ	す	する	すれ	せよ	四段・ナ變・ラ變未然形
さす	させ	させ	さす	さする	さすれ	させよ	その他の動詞の未然形
しむ	しめ	しめ	しむ	しむる	しむれ	しめよ	全動詞の未然形

右のうち「す」「さす」は古い時代には四段活用に活らいたもので、使役の意味を持つてゐるサ行四段活用の動詞「散らす」「飛ばす」「驚かす」等はこの使役の助動詞の結びついて出來たものであらうと說く說がある。これは一つの說にすぎなからうが、かうしたサ行四段活用の動詞と、單なる四段活用の動詞に使役の助動詞「す」の結びついたものと

を混同しない様にする必要がある。

散らす→散らさず 飛ばす→飛ばさず 驚かす→驚かさず	ア列より打消の助動詞に續く。 「さ」は動詞の語尾。	讀ます→讀ませず 書かす→書かせず 賣らす→賣らせず	エ列より打消の助動詞に續く。 「せ」は使役の助動詞。

右の區別法は打消の助動詞「ず」が動詞の未然形に連續することを用ひたものであるが、大體はこれで區別することが出來ようかと思ふ。併し、文法がいくら言語の現實を研究の對象にするとしても、言語がＡの狀態からＢの狀態に推移しつゝある場合には、その移動狀態そのものを研究對象にしなければならぬから、一つの言語事實に對して兩樣の解釋のあり得ることも止むを得まいかと思ふ。

又「著る」「似る」「見る」は上一段活用の動詞であるから、これに使役の助動詞に「さす」「しむ」を連ねる時には、

著さす——著しむ　似さす——似しむ　見さす——見しむ

とすべきである。これを「著す」「似す」「見す」といふ下二段活用の動詞に使役の助動詞「さす」「しむ」を連ねた、

著せさす——著せしむ　似せさす——似せしむ　見せさす——見せしむ

と混同してはならない。助動詞を除いたあとの動詞が、上一段活用であるか、下二段活用であるかを見極める必要があるのである。即ち「著さす」「著しむ」より「さす」「しむ」を除いた殘りは「著」であるから、これに打消の助動詞「ず」をつけると「著ず」となるから、「著」が上一段活用の未然形だといふことが知れるのである。又「著せさす」より「さす」を除いた「著せ」に打消の助動詞「ず」を連ねると「著せず」となつて下二段活用だといふことが分るのである。併し「著

せ」（終止形「著す」）は、動詞「著」（終止形「著る」）に、使役の助動詞「す」が連なつてゐるのかも知れないといふことを一應疑つてみる必要がある。併し「著」は上一段活用の動詞であるから、「さす」は連るが「す」は連らないし、又「す」と「さす」といふ樣に、使役の助動詞が二つ重ね用ひられるといふことは絶對にないことであるから（一體助動詞は敬語以外同じ意味のものが二つ以上重ね用ひられるといふことは絶對に無い。）「著」の下に「す」といふ使役の助動詞が連つてゐるといふことは否定出來るのである。

これに就いて「廣日本文典別記」（五五頁—五六頁）には次の如くある。

上一段活用ノ動詞モ、スベテ、其第四活用ヨリ、使役ノ「さす」ニ連ルコト、例ノ如シ。扨、其活用中ノ「着る」「似る」「見る」ニハ、相對シテ「着す」「似す」「見す」アリ。此三語、下二段活用ナル生得（シヤウトク）ノ他動詞ナルガ如ク、（固ヨリ「着」「似」「見」ヨリ、直ニ、使役ノ「す」ニ接シタルニハアラズ、「煎（ニ）す」「居（キ）す」ナド無キニテ知ルベシ。）活語雜話（初篇）ノ說、從フベキガ如シ。サルニ、或人ハ、此三語ニ限リテ、「着さす」「似さす」「見さす」（但シ、此ノ用法、多クハ、敬語ニ用キル、使役トシタルハ、稀ナリ。）ノ約マリテ成レルモノニテ、生得ノ他動詞ナラズト云。サレド、榮華物語ノ御裳着ニ、「あやしき女ども、黑かいねり着せて、白粉（ハニフ）といふもの、塗りつけて、かつらせさせて、傘、ささせて、足駄、はかせたり、」トアル文中ノ「着せて」ハ、他ノ使役ノ語ト併列シタレバ、誠ニ「着させて」ノ約トモ見ルベシ。然レドモ、同書、鳥邊野ニ、「殿、今は、醫に見せさせ給ふべきなり、いとおそろしき事なりと、たび／＼聞えさせ給へど、醫に見すばかりにては、生きてかひあるべきにあらずと、心強く宣はせて、見せさせ給はず。」源氏物語、若紫ニ、「物ども、取りにつかはして、見せ奉り、」ナドハ「見させ」ニハアラデ、「示す」トイフ程ノ意ナラム、（同書、東屋ニ、「たゞ、眞心に、おぼしかへりみさせ給はゞ、」同、浮舟ニ、「かの人の御けはひに似

せてなむ、もてまぎらしける、」「まづあけよと宣ふ聲、いとようまねび似せ給ひて、」（若菜ニハ、「人に似させ給はぬを、」ナド、スベテ、生得ノ他動詞ト見ルベキガ如シ。元來、「歌よませさせ給ひ」「琴弾かせさせ給ひ」ナド、使役ヲ重用スルハ、（下ナルハ敬語ニテ、）四段活用ニ限ルガ如シ。下二段活用等ニテハ、「失せさせ給ひ、」「御几帳、引寄せさせ給ひ、」「心にえ任せさせ給ふまじく」ナド單用スルノミニテ、「失せさせさせ」「任せさせさせ」ナド重用セヌガ如シ。サレバ、「着せ、させ」「見せ、させ」等ノ「着せ」「見せ」モ「着、させ、」「見、させ」ノ約ニハアラザルベシ、然ラザレバ、「着させさせ、」「見させさせ、」ト重ナルコトトナル。又「乘る、乘す、」「寄る、寄す、」ナドモ、「似る、似す、」「見る、見す、」ト同趣ナリト思ハル、「乘す」「寄す」ヲ生得ノ下二段他動詞ト見レバ、「似す」「見す」モ同ジト見ルベキナリ、サラバ、「見せしむ」ナド用ヒルモ、（甲ヲシテ、乙ヲ使役セシムル意ナラバ、）妨ゲナシトイフベキガ如シ。

更に、サ行變格活用の動詞に「さす」が連る時には、その末然形から連つて、「勉強せさす」「運動せさす」となるのが正格である。然るにこのサ變動詞の語尾「セ」を略して、「勉強さす」「運動さす」といふ場合が多い。「文法上許容ニ關スル事項」の五では次の如く之を許容してゐる。

「……セサス」トイフベキ場合ニ「セ」ヲ略スル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ。

例　手習サス　周旋サス　賣買サス

なほ、前述のサ行下二段活用の動詞「著す」「似す」「見す」に使役の助動詞「しむ」を連ぬる時、又は、サ行變格活用の動詞「勉強す」「運動す」に使役の助動詞「しむ」を連ねる時には、

著せしむ　似せしむ　見せしむ　勉強せしむ　運動せしむ

となることは言ふまでもないが、これ等の類推から、サ行でない下二段活用の動詞、例へば「得」「歴」などに「しむ」を連ねる時に、次の如く誤ることがある。

得せしむ　歴せしむ

右の「せ」は下二段活用の動詞の語尾でもなければ使役の助動詞の一部分でもない。全く誤つた類推(fals analogy)から侵入して來た不用語である。勿論正しくは、

得しむ　歴しむ

といはなければならないのである。併し、今日では「文法上許容ニ關スル事項」の七で次の如く許容されてゐる。

「得シム」トイフベキ場合ニ「得セシム」ト用ヒルモ妨ナシ。

例　最優者ノミ褒賞ヲ得セシム。

上下貴賤ノ別ナク各其地位ニ安ンズルコトヲ得セシムベシ。

右に就いて「廣日本文典」(一一六頁―一一七頁)には次の如く見えてゐる。

「う」(得)ハ、下二段活用ナレバ、使役ノ「しむ」ニ連ヌルモノハ、其第四活用ノ「え」ヨリ、「我に依之米(エシメ)し、山苞ぞこれ。」(萬葉、二十)ノ如ク、直チニ「しむ」ニ連ヌベキヲ、常ニ、「得、せし、む、」と誤用スルコトアリ。此ノ「せ」ハ、サ行變格ニ、「せしむ、」ト用ヒルコトアルヨリ、紛レ入ルモノト見ユ。サレド、「得す」トイフベクモアラネバ、加ハルベキ謂ハレナクテ、衍ナリ、「無、せ、しめ」ナドモ、然り。又、「見る」「鑄る」(一段活用)ヲ、尋常ノ使役相トシテ、「しむ」ニ連ヌルモ、「花の盛に、あひ見、之米(シメ)とぞ。」(萬葉、十七)又ハ、「錢を鑄しむ、」ノ如クナルベシ、コレヲモ、「見、せ、しむ、」「錢を鑄、さ、しむ、」

ナド誤用スルコトアリ。（下二段活用ヨリ、「見せしむ」トナルトハ。別ナリ。）

次の如きは「しむ」の連用形が名詞として用ひられたもので、全體は一つの名詞と見るべきものである。

使はしめ　見せしめ　懲らしめ

下に「が」「の」「に」「を」を連ねることが出來るので知るべきである。

又、次の例は「よ」を添へないで「す」「しむ」の命令形としたものである。

幼ければ道行き知らじ幣はせむ下方の使負ひて通良世（とほらせ）。（萬葉集）

布施おきて我は祈願む欺かず直に率ゆきて天道知之米（しらしめ）。（同）

撫子が花の盛にあひ見之米（みしめ）とぞ。（同）

これによつて助動詞に於ても命令形の「よ」が後に加はつたものでないかと思はれるのである。

平安朝時代の使役の助動詞の中には、次の如き異例がある。（「平安朝文法史」一五六頁—一六〇頁參照）

其の日の夕つ方たてまつらさせ給ふ。（源氏物語、若菜、上）

けしからず人にてんつかるべきふるまひはさせじとおもふものを。（同上、下）

たゞ袖をとらへてとうざいなさせずこひとりもてこずば。（枕草子、四）

よき男の車とゞめて物いひあないさせたる。（枕草子）

〔研究問題〕

（一）「す」「さす」が下二段活用でなくて四段活用に用ひられた例が平安朝の文獻に見えるのはどういふ譯か。「平安朝文法史」

一五六頁―一五七頁參照）

（二）「平家物語」に見える次の「させ」如何。

小松大臣は急ぎ中宮の御方に參らさせ給ひて……（卷三、御産卷）

49 可能の助動詞

可能の助動詞といふのは所謂勢相の助動詞といふもので、或る動作を能くなすことが出來ることを現すものである。受身の助動詞「る」「らる」を轉用する。活用も連續も受身の場合と變る所が無い。

高山も難なく登らる。　この問題は予には解せらる。　かくてもあられけるよ。（徒然草）

「る」「らる」の外に、推量の助動詞「べし」を轉用することもある。

三尺の秋水鐵をも斷つべし。

次の例に於ける「能ふ」「得」は動詞であつて助動詞ではないから混同しない樣にする必要がある。

本を讀む能はず。　早く走る能はず。

問題を解き得たり。　望む物を求め得ざりき。

50 自發の助動詞

「る」「らる」は可能の意より一轉して、動作が自然に起つて止められぬ如きを現す場合がある。これを自發の助動詞といふ。活用も連續も受身・可能の場合と變りが無い。

筆をとればものかゝれ、樂器をとれば音を立てんと思ふ。（徒然草）

あら玉の年たちかへるあしたより待たるゝものは鶯のこゑ。（拾遺集）

行末のみ案ぜられて安く眠り難し。

〔研究問題〕

(一)助動詞の專用といふことを文法上説くことは妥當であるか。

51 敬語の助動詞

敬語の助動詞の中には受身の「る」「らる」の轉じたもの、使役の「す」「さす」「しむ」の轉じたもの、その他動詞より轉じたもの等がある。いづれも本來の意味を轉じて敬意を現すにのみ使はれるに至つたものである。

〔一〕「る」「らる」　この二語は受身より轉じて敬語になつたとも、或は受身が轉じてなつた可能から更に敬語に轉じたとも言はれてゐる。後説に就いては「廣日本文典」(一二〇頁)及び「廣日本文典別記」(五七頁)に次の如くある。

貴人、尊長ノ動作ヲ言フニ、親シクモノスト言ハムヨリハ、何事ヲモ能クスル勢力アルヤウニ言ヒ、或ハ、能ク、侍者ヲ使役シテ、セサスル威力アルヤウニ言ヒ做セバ、鄭重ニ聞ユルガ故ニ、尋常ノ動作ヲモ、勢相、又ハ、使役相ニイヒシヨリ、慣用ノ久シキ、終ニ敬語トハナリシナリト云。(「廣日本文典」)「喜ばる」「考へらる」ナドノ方ハ、所相ニテ、貴人ハ、何事ニモ、自ラ手ヲ下サズ、侍者ニセラルヽヨリ起レリトイフ説モアリ、已レモ、初ハ、其説ニ従ヒシカド、非ナリキ、勢相ノ方ナリ。(所相ニ要スベキ「何に」ノ標準語ヲ要セザル場合モアレバ、)(「廣日本文典別記」五七頁)

敬語に用ひられた「る」「らる」の活用も連續も受身と變りはない。

君は殊の外喜ばる。　　同じ御時せられける菊合に。(古今集)

次の例は、上にある動詞が本來敬語の意味を持つてゐる詞であるから、下の助動詞と相待つて、尊敬の意味が加は

るのである。

君は覺束なく覺さる。　　歌合せんと仰せらる。
聞し召さる。　　御覽ぜらる。

候文に用ひる例、

御來駕被下度候。　　御機嫌よくお暮し被遊候や。

の「被」も「る」といふ敬語の助動詞である。

〔二〕**「す」「さす」「しむ」**　この三語は使役から轉じて敬語に使はれるものである。而してこれらの語が敬語に用ひられる時には、多く「給ふ」とか「おはす」とか「らる」とか、敬語の意味に用ひられた他の助動詞と重ね用ひられるのが常である。活用・連續すべて使役と同樣である。

琵琶をよく彈かせ給ふ。　　かれての本望遂げさせらる。
御位に卽かしめ給ふ。　　帝かくれさせおはします。

次の例(「廣日本文典」による)は本來のまゝの受身・使役の助動詞と、敬語に轉じたものとが重用されたものであるから、混同しない樣にする必要がある。

人々に齋かれ(受身)させ(敬語)給ふ。　　御首取られ(受身)させ(敬語)給ふ。
あはや、法皇の流され(受身)させ(敬語)おはしますぞや。(平家物語)　人々に歌詠ませ(使役)させ(敬語)給ひける時。(玉葉集)
御笛賜びて吹かせ(使役)られ(敬語)ける。(宇治拾遺物語)

〔三〕**「給ふ」** この語はもと敬語動詞の「賜ふ」であつた。

天皇、老臣に杖を賜ふ。

これが轉じて敬語の助動詞となつたものである。活用は四段活用と同じく、連續は活用言の連用形である。

御衣を脱がせ給ふ。　行幸せさせ給ふ。

右の「給ふ」が動詞でなくて助動詞である證據には、第一に助動詞の下に連つてゐるといふことである。觀念語である動詞は決して助動詞の下に連るといふことはない。第二に右の「給ふ」は之を他の敬語の助動詞「らる」と置き換へる事が出來る。もしこれが觀念語の「給ふ」であつたならば形式語の「らる」と置き換へる事は絶對に不可能な筈である。

なほこの「給ふ」は敬語の助動詞「す」「さす」「しむ」とは重ね用ひられるが、同じ敬語の助動詞「る」「らる」とは決して重ね用ひられることがない。これは「る」「らる」の原意である受身と、「給ふ」の原意である「與へる」との意とが全く相反した事實であるからではあるまいか。詳しくはその理由を知らない。

〔四〕**「遊ばす」** もとサ行四段活用の動詞であるが、これが形式語化して敬語の助動詞として用ひられるのである。

御機嫌うるはしくお歸り遊ばされたり。

連續は活用形の連用形である。もしこれを次の如く言ふ時には、「遊ばす」は動詞として用ひられたもので、上に格助詞「を」を省略した形と見なければならぬ。如何となれば、「御歸還」は名詞であつて、サ行變格活用の連形用ではないからである。(尤も右の「お歸り」を動詞と見ないで名詞と見る説も成立し得る。)

御機嫌よく御歸還遊ばされたり。

尤も右の「御歸還」は漢語本來は動詞であるから、その動詞の意味から「遊ばす」といふ助動詞に連つたものであると見られないこともないが、この説は形態を重んずる國語文法としてはやゝ穏當を缺いたものであるかも知れない。

〔五〕「**おはす**」（「**おはさふ**」）「**おはします**」（「**おはしまさふ**」） 「おはす」は「居る」「居り」「有り」「來」「行く」等の意味を含んだ敬語動詞であるが、これが形式語化して助動詞のやうに用ひられるのである。

三條殿にわたりたまひて、取らせおはしたり。（宇津保物語）

おとゞいとをかしとほのきゝおはす。（源氏物語）

入りおはしたれば。（同上）

「おはします」は「おはす」に「ます」を添へて一層敬意を強めた動詞であるが、これが同じく助動詞として用ひられるのである。

天暦の帝四十に成りおはしましける時（拾遺集）　上は涙のひまなく流れおはしますな（源氏物語）

〔六〕「**ます**」　「ます」は元來「在り」「居る」の意味を持つ敬語動詞である。

君まさで烟絶えにし鹽釜の浦さびしくも見えわたるかな。（古今集）

柏木いとをかし、葉守の神ますらむもいとかしこしかし。（枕草子）

右の「ます」は動詞としての「ます」である。之に反して左の「ます」は敬語の助動詞としての「ます」である。

うちそをみの大君あまなれやいらこが島の玉藻かります。（萬葉集）

杖つきもつかずも吾は行かめども君が來まさむ道の知らなく。（萬葉集）

暇なみ來まさぬ君に郭公我がかく戀ふと行きて告げこせ。（新千載集）

わが背子が來まさぬ宵の秋風はこぬ人よりも恨めしき哉。（拾遺集）

活用言の連用形に連續して、自らは四段活用に活く。「ましま す」「おはしま す」などの中に含まれてゐる「ます」も この助動詞化した「ます」である。

〔七〕「めす」　「めす」は「食ふ」「飲む」「著る」「乘る」「浴ぶ」などの動作を表す敬語の動詞であるが、これが助動詞化して用ひられる事がある。「きこしめす」「おほしめす」「しろしめす」「おぼしめす」などの中に含まれてゐる「めす」はこの助動詞化したものである。次例の「めす」なども これである。

遠くあれば一日一夜も思はずてあるらむものと思ほしめすな。（萬葉集）

〔八〕「たぶ」　「たぶ」は「給ふ」に同じ四段活用の敬語動詞であるが、「給ふ」と同じく敬語の助動詞化して次の如くに用ひられる。

わが聞きし耳によく似ばあしかびの足なへわがせつとめたぶべし。（萬葉集）

かかる歌なん、神代より神もよみたび。（土佐日記）

〔九〕「す」　奈良朝時代特有の敬語の助動詞で、

	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	接續
す	さ	し	す	す	せ	多くは四段活用の未然形

の如く四段活用に活用して、多くは四段活用の動詞の未然形に連續した。（「奈良朝文法史」一五九頁―一六三頁參照）

手束弓手に取り持ちて朝獵に君は立たしぬたなくらの野に。（萬葉集）

たまきはる宇智の大野に馬並めて朝踏ますらむその草深野。（萬葉集）

この岳に菜摘ます兒。（萬葉集）　さゐまつと我がたたせば。（書紀）

この「す」は「ます」「います」「給ふ」などよりも意味が輕くて、單に親しみの意味に用ひられてゐる場合が多いと言はれてゐる。

〔一〇〕「**まつる**」　「まゐらす」「たてまつる」といふ意味の敬語動詞が助動詞化して用ひられるのである。對者の尊敬を表すのではなくて、謙讓の意を表す助動詞である。

大君にかたく仕へまつらむと（雄略紀）　まつろへぬ人をもやはしはき清め仕へまつりて（萬葉集）

〔一一〕「**たてまつる**」　これも「まつる」と同じく動詞より助動詞に轉化したもので、自己の動作を謙遜して表す卑下の助動詞となつてゐることも「たてまつる」と同樣である。

ここら大きさまで養ひたてまつる心ざし、おろかならず。（竹取物語）

その人、この頃なん見たてまつりいでたるに。（源氏物語）

かかるせうそこにて見たてまつる、返す返すつれなき命にも侍るかな。（源氏物語）

〔一二〕「**まゐらす**」　これも動詞より助動詞に轉化したもので、他人に對する自己の動作を示す動詞に添へて、その人を尊敬する意を示す謙讓の助動詞になつてゐる。

かゝる人こそ世におはしましけれと、驚かるゝまでぞまもりまゐらする。（枕草子）

げにいかならむと思ひまゐらする氣色。（枕草子）

〔一三〕「まうす」　これも元來の動詞を謙讓の助動詞に轉化して用ひるのである。

后かしこく制し申させ給ひて。（大鏡）

〔一四〕「きこゆ」　もとは「言ふ」といふ意味の敬語動詞である。

思ふこと少しきこゆべきぞ。（源氏物語）　何くれと御物語きこえ交したまひて。（同上）

右はいづれも動詞の例である。これが次の如く助動詞化して用ひられるのである。

疑なきまうけの君と、世にもてかしづき聞ゆれど。（源氏物語）

この御方の御いさめをのみぞ、なほ煩はしく、こころぐるしう思ひ聞えさせ給ひける。（同上）

かしこき御蔭をば頼み聞えながら。（同上）

活用は下二段活用で、活用言の連用形に連るのである。

〔一五〕「侍り」　「有り」「居り」の謙讓動詞が、謙讓の助動詞に轉化して用ひられるのである。

なでふ、さる事かしはべらん。（竹取物語）　上が上はうち置き侍りぬ。（源氏物語）

活用・連續は共に動詞の「侍り」と同じである。

〔一六〕「候ふ」　「侍候する」意又は「あり」の敬語動詞が、助動詞化して用ひられるのである。

面を塞ぎてさぶらへど。（竹取物語）

右は動詞の「さぶらふ」であるが、次は助動詞の「さぶらふ」である。

辛目を見さぶらひつる、誰にかは愁へ申しさぶらはむ。（枕草子）

この「候ふ」は鎌倉時代以後活用の語となり、今日の書簡文の一體所謂「候文」にその俤をとどめてゐるのである。この「候ふ」が述語に用ひられる場合には、動詞の場合でも助動詞の場合でも、主語に對する敬意を表してゐるのではなくて、鄭重なる意を示すものにすぎない。

（一七）「給ふ」　さきに述べた尊敬の意を表す「給ふ」と形は同じ助動詞であるが、その用ひられ方がちがつてゐるから混同しない様にする必要がある。この「給ふ」は自己の動作を表す動詞に連つて謙讓又は卑下の意を表す助動詞であつて、その活用は下二段活用である

自己の動作を表す動詞＋給ふ（下二段活用）
尊敬すべき人の動作を表す動詞＋給ふ（四段活用）

いとかく思ひ給へましかば。（源氏物語）　物思ひ給へ知らぬ心地にも。（同上）

うちうちに思ひ給ふるさまを奏し給へ。（同上）　まことそらごと見給へんとてまうで來つるなり。（宇津保物語）

〔研究問題〕

（一）敬語法に於ける助動詞の地位。

（二）口語の「ます」と文語との關係。（口語の「ます」は文語から如何にして發展して行つたか。）

（三）動詞が助動詞に轉化するかいふ事實の文法的解釋。

52 時の助動詞

普通の文法書には時を三つに分けて過去・現在・未來とし、これに完了を配して、過去完了・現在完了・未來完了と六つの時を說いてゐるのが常である。併し文法上の時といふものは、果して文法的論理體系の上に正しい位置を占め得るものであるかどうか、この點は重要なる考察に値すると思ふ。

事實上の論理から考へるならば、すべての動作現象はすべて時に關係なく行はれるといふことは絕對にあり得ないのである。從つて文法上、動作・現象を表す動詞は、すべて時間に關係なく言ひ表されることもあり得ない譯であるが、所謂論理的範疇と文法的範疇とは完全に一致しない別個の範疇であるから、決して同一に考へることは許されないのである。山田孝雄博士はその著「日本文法論」に於て、「文法上の時の論」(同書四一二頁―四四二頁)といふ題をかゝげて論じて居られるが、その中に次の樣な一節がある。

> 過去・現在・未來三者の區別は……實在界に存在する區別にあらずして、いづこまでも吾人の主觀と時間經過との關係によりて生じたるものなることを忘るべからず、吾人が觀察の立脚地よりして三別は生じたるなり。この故に其の觀察點によりて同一の時も或は過去たるあり、未來たるあり。又その觀察點の區域の廣狹により現在と稱するものにも廣狹の差あるなり。要するに主觀と客觀との區別がいづこまでも相對的にしてしかも際限なく消長しうるものなることは深く初頭に顧みざるべからざる要點なり。

この論はやはり文法時といふものと事實時といふものとを峻別しようといふものであつて、この點に立たなければ文法時の正體は正確に把握することは出來ないであらう。

文法上の時の本體は、その表されてゐる動作や現象が、事實として現在であるか、はた過去であるか、或は未來で

あるかといふことを區別するにあるのではなくて、その動作・現象が主觀の如何なる認識を經たかといふ認識的存在の區別にすぎないのである。從つて如何なる動作や現象も、主觀の認識對象とならなければ文法時の問題に入つて來ないのである。從つて文法時はどこまでも所謂思想法なのである。つまり事實上の動作や現象を時間的にどんな風に認識するかといふことによつて文法時が成立するといふことである。山田博士によれば、出來事(博士は「白金は最重き金屬なり。」といつた樣な斷定的事實は時を超越したものであつて、時の區別を施し得べき場合はどこまでも出來事(occurrence)でなければならぬと說いてをられる)が意識內に直接の表象として現れるもの、卽ち純粹知覺を表すものが現在であり、復現表象として現れるもの、卽ち復現表象を表すものが過去であり、豫想設想として現れるもの、卽ち想像表象を表すものが未來であるといふことになつてゐる。これ文法時が思想法の上に立つてゐるものと考へての區別である。

このことは國語の文法上のみのことかと思へばさうではなくて、英語文法などに於ても同樣のことが言へると見えて、細江逸記氏の「動詞時制の研究」(昭和七年二月刊)の中には次の樣に書いてある。

Present Tense——暫定的に此語形を「直感直叙」の語形と名付ける。卽ち "Present Tense" なるものは吾々が「かうだ」とか「かうでない」とか感ずる事柄を、その感ずるが儘に言ひ表はす用をなすもので、それは思想の所謂「直接表象」の具である。故にその描出表現する事柄が時間の如何なる區分內に存在するものであらうとも、それは問題とはならないのである。……而して「Tense」も亦その實思想樣式の區別を表はすもので mood と別箇の平面に置いて考へらるべき性質の存在ではないことを悟らなければならない。(同書四二頁—四四頁)

Present Perfect――一切の迷と疑と矛盾と錯誤とは「Tense則time」の考から起り來るので、其弊根を去れば全體を見透す光明は得られなければならない。私は已に前章に於いて〃Present Tense〃は本質的には決して現在の時を表はすものにあらずして、それが屢現在の時を表はすのは、時の區別とは無關係なる、その本質を構成する思想の様式に附隨し來る效果に過ぎないと言つた。そして所謂〃Present Tense〃は「直感直敍」の語形であつて、その描出する事柄が時の區分の何れの部分内に屬するかは、本來の問題ではないのであると斷じたが、私は今こゝに所謂〃Present Perfect〃なるものは「確認確述」の語形であると言はんと欲する。即ちその描出する事件そのものが客觀的な時間の内の過去界に屬するものであらうとも、將又現在界に入るものであらうとも、乃至は過去界より現在界に亙り何等かの連系を有するものであらうとも、それは根源的には何の問題でもないのである。只その陳述さるゝ事件が、言者の發言する際その知覺意識内に強力なる印象を與へて居る時、それを明瞭確實に提示するのが此語形の本義であるのである。而してその「現在完了」といふべきものを示すことの多いのは然る關係に立つものが最も「確認確述」の對象たることが多いからであるに過ぎない。（同書七一頁―七二頁）

Past Tense――要するにそれは「回想敍述」の語形であると斷じて差支へがない。過去の時を表はすことが普通なのは、此本義より生ずる效果であつて其本義ではない。（同書一二一頁―一二二頁）

Future Tense――「想像（推測）敍述」の語形である。本來は時の現在に關すると未來に關するとは問ふものでない。（同書一四八頁）

右の細江氏の説は英語の多くの實例に依つて根據づけられてゐるのであるが、その説の根本義に於ては山田孝雄氏の論と同説であると思ふ。

文法時が客觀的事實の時間的存在形式に依らずに、主觀の認識的區別に從つて變化することの例は次に於て明らかであらう。

今我書物を讀み居れり。

右の例の「居れり」は所謂現在ではあらうが、時間の長さは極めて短い。

今日は彼は不在なり。

右の「不在なり」も現在であらうが、時間の長さは前例より長くて日が單位になつてゐる。

今年は屢々雪降る。

右の「降る」も現在であるが、年が單位である。これによれば觀察點の廣狹によつて、現在といふものにも廣狹の差の生ずることが分るであらう。又、次の例、

塵も積れば山となる。　大日本帝國は萬世一系の天皇之を統治す。

春來れば花咲き鳥歌ふ。　月は地球の周圍を廻轉す。

彼は毎朝六時に起く。

に於ける動詞はいづれも、現在の形といふべきであらうが、時間的區別を超越した事實を表してゐるのであつて、所謂、恒時である。

その他所謂現在を以て過去を表したり未來を現したりすることが往々ある。

戰は愈々始まれり、砲聲地にひゞき、爆音天に轟き、彈丸は耳邊をかすめ、喚聲は全軍を振はし、實にその狀悽慘の極みなりき。

賀茂丸は明後日出帆す。

これは前に述べた樣に、事實はたとへ過去であり未來であつても、吾人のその事實に對する認識が現實として表す時には現在となるのである。

かくの如く考へることが國語の文法時に對する正しい見解と考へるので、本講では舊來の如く「時の助動詞」「過去の助動詞」「未來の助動詞」といふ名稱は設けるけれども、その意味に於ては以上述べた說を肯定したいと思ふ。

〔研究問題〕

(一)西洋文法と日本文法とに於ける文法時の比較研究。　(二)國語の時の助動詞は果して時を表さぬか。

53　過去の助動詞

動作及び現象等の事實そのものが、現實としては現在に存在してはゐないが、嘗つて過去に於て存在したといふことを、思想として回想して敍述するために用ひられる助動詞である。

死にし子は顏よかりき。

昔男ありけり。あづまへ行きけるに、友だちどもに道よりいひおこせける。

右のごとくこれに用ひられる助動詞は「き」と「けり」との二語である。その活用と連續は次の通りである。

	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	連續
き	（せ）	○	き	し	しか	活用言の連用形。カ變とサ變とには特別連續がある。
けり	（けら）	けり	けり	ける	けれ	活用言の連用形

右の表に掲げてある「き」の未然形「せ」は、奈良朝時代にも平安朝時代にもその用例が見えて居る。

沖つ風いたく吹きせば。(萬葉集)　かみな月雨間もおかずふりにせば。(萬葉集)

世の中にたえて櫻のなかりせば。(古今集)　紅葉の流れざりせば。(古今集)

玉鉾の道のそらにて消えにせば。(赤染衛門集)

右の用例を見るのに動詞の連用形に連つてゐるものは、或はサ變動詞「す」の未然形かとも思はれるが、完了の助動詞「ぬ」の連用形「に」及び打消の助動詞「ざり」の連用形「ざり」に連つてゐるものは、どうしても「き」の未然形と考へなければならない。何故ならばそれらは決して下に動詞を連ねる力を持つてゐないからである。從つて山田博士の次の如き意見も出て來るのである。(「奈良朝文法史」二一三頁—二一四頁)

……この複語尾は「き」の系統と「し」の系統との二流あるにあらざるか。かくて又「しか」は本來「し」なるものに「か」の加はりたるものにあらざるか。そは此の期に「まし」といへるものの次期に「ましか」といふ形を分出せると、著者の生地たる越中にては形容詞の已然形なる「けれ」が「こそ」に對しての終止たる時には、必、

これこそよけれか。

といふ如き形をとれるに徴してもこの「か」は後に加はれるものなることを考ふるをうるなり。さるときは本來は次の如き形なりしものと見ゆるなり。

「き」の系統　け　き

「し」の系統　せ　し

この二系統、或は時代の前後か、若くは意義の直寫と傍觀との差がありしものが、久しく用ゐらるゝにつれて混合せるにはあらざるか。しかれども、こは未遽に斷ずべきものにあらず。

これと同樣のことは打消の助動詞「ず」の中に「ぬ」の系統の入りこんでゐる所にも考へられる樣に思はれる。

前表に示した通り「き」はカ變及びサ變の動詞に連る時には特別なる連續法をなすのである。即ち左表の如き連續をなすのである。

	語幹	未然形	助動詞	連用形	助動詞
カ變	來	こ	し しか	き	し しか
サ變	勉強	せ	し しか	し	き

かういふ所に、カ變サ變の變格活用たる特質が現れて居るのかも知れない。併し考へて見るのに、サ變の連用形は「し」のみとしてあるが、實は「せ」と「し」との兩形があつて、

（爲）　せ　せ／し　す　する　すれ　せよ

の如く活用してゐて、助動詞「き・し・しか」の中、「し・しか」は一個の連用形の中の「せ」に連り、「き」は他の連用形「し」に續くと說明すべきであるかも知れない。同樣にカ變の連用形にも「こ」と「き」とがあつて、

（來）　こ　こ／き　く　くる　くれ　こよ

の如く活用してゐて、助動詞「き・し・しか」の中「し・しか」がその二個の連用形の孰れにも連ると說明するのがよいのかも知れない。これは恰も今日の口語のサ變が、

（爲）　せ／し　し　する　する　すれ　せよ／しろ

の如く活用して、「せ」の未然形からは打消の助動詞「ぬ」が連り、「し」の未然形からは同じ打消の助動詞「ない」が連るのと同樣ではあるまいか。後攷を待つ。

なほ、サ變・サ行下二段・サ行四段活用の動詞に「し・しか」の連つて生ずる相似た形を混同しない樣にする必要がある。即ち左表に示す連續である。

	語幹	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
サ變	勉強	せ{し しか（正しき連續）	し	す	する	すれ	せよ
サ下二	瘦	せ	せ{し しか（正しき連續）	す	する	すれ	せよ
サ四	暮	さ	し{し しか（正しき連續）	す	す	せ{し しか（許容された連續）	せ

中古の語法ではサ行四段活用の連用から「し・しか」を連ねて少しも誤らなかつたのであるが、鎌倉時代以後、已然形から續ける事が多く、德川時代に至つては更に多く誤つたことは、村田春海の說を反駁したこの連續說に關する義

門の「指出の議」の出たことでも知れるのである。現代文では例の「文法上許容ニ關スル事項」の八で次の如く許容されてゐる。

佐行四段活用ノ動詞ヲ助動詞ノ「シ・シカ」ニ連ネテ「暮シシ時」「過シシカバ」ナドイフベキ場合ヲ「暮セシ時」「過セシカバ」ナドトスルモ妨ナシ。

例　唯一回ノ通告ヲ爲セシニ止マレリ。

攻撃開始ヨリ陥落マデ僅ニ五箇月ヲ費セシノミ。

又「き」の終止形は「き」であるから、上に「ぞ」「なん」「や」「か」「こそ」の如き係助詞が來ないときには、當然この「き」で文を終止すべきであるのに、「十年を暮しし」「思ふ所を申しし」「我正に見し」などの様に、連體形「し」で結んだものが平安朝時代から多いのである。これは下に來べき「ことよ」とか「ものぞ」とかいふ様な語を省いて、詠嘆の余意を寓する氣持の終止法であると思ふ。現代文でもこれが許容せられて、「文法上許容ニ關スル事項」の三に次の如く定めてある。

過去ノ助動詞ノ「キ」ノ連體言ノ「シ」ヲ終止言ニ用ヒルモ妨ナシ。

例　火災ハ二時間ノ長キニ亙リテ鎭火セザリシ。

金融ノ緩漫ナリシ割合ニハ金利ノ引弛ヲ見ザリシ。

次に「き」と「けり」との區別であるが、富士谷成章（なりあきら）の「脚結抄（あゆひせう）」巻四には次の如く見えてゐる。

「來」は過たる事をたゞかにさだめていふ詞なり。但またく人にむかひていふことばにて、たま〳〵ひとりごとにいふとも、み

づからとひ白こたふるほどの心にのみよむべし。
「けり」は萬葉に来とかきたれど、まことに来有の心なり。すなはち「き」の立非なれど、「き」とのみよめるにくらぶれば例の「なり」もじそひて心ゆるべり。「き」は人にちかくあひむかへるやうにいへり。「けり」はおなじくいひさだめたる詞ながら、理にかゝはれるかたのおもくて、みづからいへる詞となれり。

卽ちこの意味は、「き」は過去のことを確實にのべるのであるが、「けり」は多少柔かに餘情を含んでゐるといふことであらう。和歌や抒情文に「けり」の方が多く用ひられるのはこの點に基いてゐるのであらう。從つて「けり」は所謂過去の意より一轉して詠嘆の助動詞となるのである。草野清民氏の「日本文法」には次の如く見えて居る。

きハ單ニ過去ノ動作又ハ有樣ヲ示スニ用キルコトアリ。けりノ過去ヲ示スモノト大抵同樣ナリ。但シきは人ト直接談話スル時、卽チ對談スル時、又ハ對談セリト見傚スベキ時ニ多ク用キル古例ナリ。（但シ必ズシモ然ルニ非ズ） けりハ多ク單ニ過去ノコトヲ記錄スル時ニ用キルコトナルヲきモ同樣ニ用キルコトアリ。

故ニ今日トナリテハ强ヒテソノ區別ヲ設クルニ及バザルベシ。きノ下ニ名詞ノ來ル時ハしトナル。此ノ場合ハ多クけりノ下ニ名詞ノ來ル時けるトナルト同樣ニ非談話的ノ場合ニモ多ク用キタリ。…… 正シキ例ドモヲ揭グレバきハ對談けりハ記錄的ト區別アルガ如クナレドモ相混ジ居ルモノ多シ。

次に細江逸記氏は「日本文學大系」第廿五卷（五十五頁）の、

「昔男ありけり」を直ちに「昔男ありき」にするわけにはいかぬ。然らばこの二つはどうちがふか。大體「き」は單純な過去を表はすのに、「けり」は、ある時間の連續をいふ心持がある。萬葉集に「來有(ケリ)」と書いてあるのは、つまりこの意味であらう。だから、

「昔男ありけり」といふのは、單に過去の時に、一人の男があつたといふだけではなくて、その人の生存が、時間的連續があつたことを表はして居るのである。

の說明を引いて、從來の說明より一歩を進めたものと言つて差支へがなからうと言ひ、更に竹取物語の例をとつて、

（一）今は昔竹取の翁といふものありけり。野山にまじりて、竹を取りつゝ、萬の事につかひけり。名をば讃岐造麿となむいひける。その中に、本光る竹一すぢありける。

（二）或時は風につけて知らぬ國に吹き寄せられて、鬼のやうなるもの出で來て殺さんとしき。ある時には、來し方行末も知らず、海にまぎれんとしき。或時は糧盡きて、草の根を食物としき。ある時にはいはん方なくむくつけなるもの來て、食ひかゝらむとしき。

をあげ、更に自說として次の樣に述べてゐる同氏の「動詞時制の研究」（一二七頁―一三〇頁）の說は、注意すべきものである。

私の考に依れば我が國語には古き昔に於いて此兩者の區別が儼然として存在して居たので、「き」は「目睹回想」で自分が親しく經驗した事柄を語るもの、「けり」は「傳承回想」で他よりの傳聞を告げるに用ひられたものである。……故藤岡博士は、

竹取物語は草紙地には「けり」（ける、けれ）を用ひ、對話には「き」を用ふ。（「國文學全史、平安朝編」百八十六頁）

と述べて居らるゝ……私見によれば草紙地（記錄的）に「けり」のあるのは、それが作者の言葉であつて「傳承」であるか、然もなくば自己の作意より出づる事柄を「傳承」として敍述するからで、何れも「非經驗」に屬し、又對話（對談）に「き」とあるのは、記述する事柄がその言者の「經驗」であるか、然もなくば「經驗」として陳述するからであつて……上例（二）の場合は……言語學的

には言ふまでもなく「目睹回想」の語形となつて居るのである。……この故に私は「男ありき」ならばこれを「男があつた」の如く現代譯をなし、「男ありけり」ならば、「男があつたとさ」「男があつたげな」の如く解すべきものと信ずる。

右の細江氏の說はたしかに傾聽に値する新說と思ふ。併し從來は左の山田孝雄博士の「日本文法論」（四一〇頁―四一一頁）の說のあたりにおちついてゐたのである。

「けり」は、「き」と等しく回想をあらはすに用ひらるゝが故に、往々「き」の代理をなすことあり。然れどもその間に差異は明に存す。即「けり」は啻に回想するのみならず、必現實を基本として、これによりて回想を起すなり。この故にまゝ詠嘆の「けり」などと稱せらるゝものあり。かゝる意義を語原的にいはゞ「けり」の「あり」は基本たる現實に立てしむるものにして、「き」は回想をあらはす、所謂果を見て因を思ふものなり。即ち過去を回想して斷定を今に下す意あるなり。これを俚言に譯すれば「き」は「た」、「けり」は「たわい」「たことぢや」などにあたるなり。

このやうに、種々の說があるが、要するに「き」と「けり」とは、その音調に緩急のある樣に、意義にも亦緩急があつて、「き」は急であるが「けり」は緩である。「き」と「けり」との用法上の相違は、かういふ平凡な點をその起點にしてゐるのかも知れない。

〔研究問題〕

（一）「き」の連體形「し」に就いて。（「金澤博士還暦記念東洋語學の研究」所載、今泉忠義氏論文「助動詞「き」の連體形」參照）

54　未來の助動詞

從來は未來の時を現す助動詞と言はれたのであるが、實は、未來を現してゐるのではなくて、未だ現實になつて現出して來ない事實・現象・狀態に就いて、それの將に現れむとする

ことを推定し、假設し、希望する豫期的設想を表すと言はれてゐる。從つて自已のかうしようといふ決心の如きもこの助動詞であらはすのである。これが未來の助動詞と言はれたのは、未來は現實でなく、想像・推測・推量に外ならぬために誤られたのであつて、實は非現實性の思想を表すのがこの助動詞の本義なのである。

これに屬する助動詞は「む」及び「まし」の二語であつて、その活用・連續並びに用法は次の如くである。

	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	連續
む	○	○	む	む	め	活用言の未然形
まし	（ませ）	○	まし	まし	ましか	活用言の未然形

明日は雨も晴れむ。　午後には風吹き出でむ。

右は未だ事實になつて現れてゐない狀態がやがて現實になるであらうことを推定した例である。

うゑしうゑば秋なき時や咲かざらむ花こそ散らめ根さへ枯れめや。（伊勢物語）

右は未だ現れない事實に對する假定を表した例である。

雪のまにまにあとはたづねむ。　こまなべていざ見に見かむ。

右は自分の決意又は希望を表した例である。

思はむ子を法師になしたらむこそはいと心苦しけれ。

右の例は上に假定を示す條件が何も無いにも拘らず「む」が假定を表してゐる例である。「假りに愛する子があつた

として、それを若し假にしたならば」といふ意味である。

人を頼まむことの果敢なさよ。

右の例は説者の胸中である狀態の存在を豫想したものである。

また「まし」の例は次の通りである。

かれてより君來まさんと知らませばかどにやどにも玉しかましを。（萬葉集）

かくばかり戀しきものと知らませばよそに見るべくありけるものを。（拾遺集）

世の中にたえて櫻のなかりせば春の心はのどけからまし。（古今集）

頼朝といふ人もなく、泰時といふ人も無からましかば、この日本國の人民、いかゞなりなまし。（神皇正統紀）

曉のなからましかば白つゆのおきてわびしきわかれせましや。（後撰集）

從來は右の「まし」は推量の助動詞の中へ入れて、事實とは反對のことを假定し想像し推量すると説いたのである。併し、右の諸例でも分る樣に、非現實を豫想する點では「む」と同樣である。たゞ「む」に比してやゝ遲疑する點のあるのが違ふ位のものであらう。ことに次の例に於てはそのことが明瞭に分るであらう。

さらばいかにせまし。　今日來ずばあすは雪とぞふりなまし。

あな戀し行きてや見まし。　いづれを梅とわきて折らまし。

ふりぬることを誰にいはまし。

なほ「まし」の未然形「ませ」に就いては「奈良朝文法史」（一九八頁―一九九頁）に次の如く見えてゐる。「この形（「ませ

ば」)は或は「まくせば」の約なりといはれ、或は「まし」の轉化なりと稱せらる。されど、こは恐らく「む」を所謂延言的に佐行四段形の複語尾に接したるその已然形にあらざるか。余がかくいふは、一方に「む」の已然形より「ど」につゞけて「めど」といふべけれど、「めば」といふべくもあらず。且は又後世「ましかば」といふ形生じたりといへども、當時に存せず。その「ましかば」は「ませば」と同義なるに徴しても知らるべきなり。但「ませば」と「ましかば」とは假定と事實との差ありと考ふる人もあるべけれど、この豫想の條件としてはいづれも假定のものより外に生ずべき理なく、又吾人の見る所によれば歴史的惰力を除きては何等の意義上の差を感ぜざるなり」。これと思ひ合せらるるのは、前に述べた所謂過去の助動詞の「き」の未然形「せ」のあつたことである。即ち、

き	せ	○	き	し	しか
まし	ませ	○	まし	まし	ましか

この二活用形の類似點である。この二語の比較研究に依つて、未然形に何等かの解決がもたらせはしまいか。暫らく後究を待つ。

なほ奈良朝時代のものに見ゆる「まく」といふ語がある。これは果して何であらうか。

間もなけむわが戀ひまくは。（萬葉集）　　君を見まくは千歳にもがも。（萬葉集）

時つ風吹かまく知らに。（萬葉集）　　皇子の御門の荒れまく惜しも。（萬葉集）

この「まく」は「大日本國語辭典」などにも「未來の助動詞む(ん)の延」とある如く、「曰はく」「願はく」「いふならく」等と共に德川時代より延言などと稱へられたものである。併し今日では延言說は學界の承認を失つて、「く」といふ別の

語を附加したと說かれてゐる。卽ち「く」といふ體言的の意味を有する語を附加したもので「こと」「その點」などの意味をあてれば通ずるのである。元來はこの「く」は場所をあらはすことばであつて、「こ」とも相通じ、「いづこ」「いづく」「ここ」「そこ」等同源の語であるのが、單なる場所ばかりでなく「ある點」「ある事」といふ風に思想上の point をも表すに至つたものであらう。

以上の外に「む」に關係のあるいひ方としては「むとす」といふのがある。これは助動詞「む」に助詞「と」サ變動詞「す」が結びついたもので、動作現象が特にこれから起らうとする狀態をいひ表したものである。

木の葉さやぎて風吹かむとす。　大風來つて船まさに覆らむとす。

この「むとす」が「むず」と用ひられてゐる場合がある。

思ひも知らで罷りなんずることのくちおしう侍りけり。（枕草子）　いま秋風吹かむなりにぞこむずる（同上）

更にこの「むず」が音便で「うず」となつて用ひられることもある。

うち笑ひおはさうず。（源氏物語）　人はなかりければ、そらみゝ聞きおはさうじて（和泉式部日記）

更にこの「う」が省かれて單獨に「ず」となつて、「む」と同じ意味を表す場合もあつた。

この歌ぬしはまたまからずといひて立ちぬ。（土佐日記）　まからずといひて立ちぬる人を待ちて。（土佐日記）

この「ず」を打消の助動詞の「ず」と混同しない樣にしなければならぬ。今日長野縣や靜岡縣の一部で、「行かう」といふ場合に「行かず」といひ、「行かうか」といふ場合に「行かずか」等といふ方言があるのは、この「ず」の名殘ではあるまいかと思はれる。

〔研究問題〕

(一)未來と推量との關係。　(二)未來と意志との關係。

55　完了の助動詞

「つ」「ぬ」「たり」「り」の四語は完了の助動詞或は動作態の助動詞と言はれて來たものである。この動作態の助動詞といはれる意味は小林好日氏の次の說で明かである。「過去・現在・未來の區別は事件の話者に對する關係である。事件が話をなす時と同時なるか、之より以前なるか、之より後に起るべきかの區別である。事件對話者の相對的關係である。之に對して動作態は動作そのものの狀態すなはち動作の形式である。目の前を人が通つてゐる場合、その繼續してゐる動作は繼續態、その人が步行をとどめて立どまる時、その動作は完了態、立どまつてゐる狀態は存在態である。すなはち過去・現在・未來は主觀の認識の形式であり、動作態は動作の客觀的差別性である。然し兩者は交涉のあるもので、客觀的に見た動作の完了、之を主觀に移せばすなはち過去である所から、完了を現す語法上の形式が過去をあらはす形式となる如きことは、國語史上にも一般言語史上にも絕えず認められる現象である」。(「國語國文法要義」四一〇頁—四一一頁)

然るに山田孝雄博士の「日本文法論」(三九〇頁—三九八頁)によれば、右の四個の助動詞中「つ」「ぬ」の二個は陳述の確めに關する複語尾の中に分類せられ、次の如くその本性に就いて論じてある。即ち「つ」と「ぬ」とは共に事實狀態の陳述の確めに與つて力のあるもので、二者はこの點で一致するけれども、又その間に差がある。「つ」はその事實狀態を直寫的に說明するもので、その事實狀態が文主によつて現されることの確めを主者自らの側から直寫的にあらはすのである。之に反して「ぬ」は傍觀的にその狀態動作を說明してその動作狀態の確めをあらはすのである。又近來この

「ぬ」「つ」を以て過去をあらはすものとして、「き」と同一種類に列するものがある。しかしこれは元來完了と稱せられてゐる樣に、その事實の過去にあつた事をあらはすのではなくて、事實狀態を確定的に陳述するものであるから、完了といふ名稱が略〻これに該當してゐるのである。回想をあらはす「き」はその營爲せられた事が何時あつたかといふことは問はないで、現在の意識では旣に過去時に屬せる時に營爲せられたことを回想してその回想せることをあらはすのである。「つ」「ぬ」はその營爲せられたことがなほ強く知覺內に活動してゐるのであるが、しかもその事實は旣に完結してゐることを示すのである。「き」は唯現實には存在せぬ事實であるけれども、嘗て現實に存在した動作狀態であることをあらはすのである。故に過去の回想である「き」で實際の完了を示すことは出來るだらうが、「ぬ」「つ」を以てその範圍の廣漠である「き」を代表することは難いのである。

　君が名も吾が名もたてじ浪速なるみつともいふなあひきともいはじ。

この樣に「ぬ」「つ」は現實意識に殘留してゐる活動をあらはし、「き」は全く回想をあらはすものである。然し「つ」「ぬ」の本性は事物の動作狀態の完了を述べるのではなくて、之を確めて述べるのである。確めて述べるから自然之を客觀的に見るときは完了となるのである。從つて「ぬ」「つ」は決して完了の事實を述べるだけでなくて吾人の思想內に現れたものを述べるのである。

　雨ふりぬべし。　　ほと〳〵して舟を覆しつべし。

右の「ぬ」「つ」は決して事實の完了を現してはゐないのである。又、

　雨ふりなば。　　逢ひみてば慰むやとぞ思ひしに。

右は事實を假設的に表したものであつて、決して完了の事實ではない。又、

賴めこし言の葉今はかへしてむ。　心は花になさばなりなむ。

右は豫想豫期を現してゐるのであつて、完了した事實を現してゐるのではない。

以上の如く論じて山田博士は之を確述の複語尾と稱して完了をあらはすものと言つては居られない。なほ博士のあげてをられる左の俚言解もこの意味を具體的に示してゐるであらう。

かへしてむ＝かへしてしまはう。　なりなむ＝なつてしまうであらう。

ふりなば＝假にふつたとしてみれば。　逢ひ見てば＝若しも逢ひみたとしてみれば。

ふりぬべし＝きつとふるであらう。　寢しつべし＝寢してしまうであらう。

さて、「つ」「ぬ」「たり」「り」の活用と連續とは次表の通りである。

	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形	連續
つ	て	て	つ	つる	つれ	てよ	活用言の連用形
ぬ	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ね	活用言の連用形
たり	たら	たり	たり	たる	たれ	（たれ）	活用言の連用形
り	ら	り	り	る	れ	（れ）	四段活用の已然形サ變の未然形

なほ從來は、右の完了の時動詞を完了・進行・存在の態と、現在・過去・未來の三時に配して次表の如き組合を作つたものである。

併し、國語に於てかくの如き嚴密なる區別を時間關係に設けることは、徒らなる西洋文法の模倣であつて、何の用もないことと思ふ。尤も「り」「たり」が古くは存在と進行に用ひられたことを研究して、次の如く言つてをられる小林好日氏の說に於ての動作態の區別の如きはむしろ必要なる區別である事は言ふまでもない。「日本紀・古事記の用例を歸納して見ると『たり』は全く無く、『り』は用例總數三十五中、繼續態五、存在態二十九、完了態はわずかに一個、そのうち一個は紀に『かめるおほみき』とあるものであつて、同じ歌が古事記では『かみしおほみき』となつてゐる」。か丶る三態の

態＼時		現在時	過去時		未來時
完了態	つ		てき	てけり	てむ
	ぬ		にき	にけり	なむ
	たり		たりき	たりけり	たらむ
	り		りき	りけり	らむ
進行態	つ		てき	てけり	てむ
	ぬ		にき	にけり	なむ
	たり		たりき	たりけり	たらむ
	り		りき	りけり	らむ
存在態	つ		てき	てけり	てむ
	ぬ		にき	にけり	なむ
	たり		たりき	たりけり	たらむ
	り		りき	りけり	らむ

區別以上に、これに過去・現在・未來を配して國語の時法を區別する如きは要のないことであらうと思ふ。

「つ」と「ぬ」との區別に於ては古來種々の說があるのであるが、その中に「ぬ」は自動詞を受け「つ」は他動詞を受ける

といふのがある。併しこれには例外もあつてその通りには決してなつてをらないのである。唯「つ」はその音が鋭くて強い所があるが、「ぬ」は緩くて柔らかい所があるので、前述の山田博士の說にもある通り、「つ」は事實狀態の直寫に用ひられ、「ぬ」はその傍觀的說明に使はれるといふことになるのであらうと思ふ。又、「ぬ」は狀態を現し「つ」は動作を現すといふ樣な區別說はもとより何の根據もない。

「り」は山田博士の文法では、存在詞「あり」が四段活用・サ行三段活用の動詞と合併して出來た動作存在詞として說いてある。（「けり」「せり」「てり」「へり」「めり」「れり」）併し本講では一般の說に從つて獨立の助動詞とした。この「り」は前にも表示した樣に、四段活用の已然形とサ行變格活用の未然形とのみに連續するのであるから、その以外の動詞につゞけて、

木を植ゑり。　　雨晴れり。

等いへば當然誤りである。從つて形容動詞「異なり」（ラ變と同じ活用をする）に「り」を連ねて「異なれり」といふのは誤りである。併しこの慣用は多く行はれてゐるので「文法上許容ニ關スル事項」の四で次の如く定められてゐる。

「コトナリ」（異）ヲ「コトナレリ」「コトナリタリ」ト用ヰルモ妨ナシ。

右の許容理由に就いては「現行普通文法改定案調査報告之一」（明治三十九年一月、國語調査委員會）に詳說がある。參考すべきである。

〔研究問題〕

（一）完了の助動詞の用法の探究。

（二）西洋文法の完了と國語文法の完了との比較研究。

(三)「て」は完了の助動詞とすべきか助詞とすべきか。(「日本文法論」三九八頁―四〇六頁參照)

(四)「たり」及び「り」の本義及び用法。　(五)「文法上許容ニ關スル事項」の四の許容理由如何。

56　推量の助動詞

動作狀態のかくあるべしと推量する事をあらはす助動詞である。これに屬する助動詞には「らむ」「めり」「らし」「まし」「む」「けむ」「べし」「べかり」「まじ」がある。この中「む」と「まし」は既に說いたし、「まじ」は打消の助動詞の條で說くことにして、こゝでは左の六語に就いて說明を加へることにする。

	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	連續
らむ	○	○	らむ	らむ	らめ	動詞の終止形(但ラ變は連體形)
めり	○	めり	めり	める	めれ	同右
らし	○	○	らし	らし	らし	同右
けむ	○	○	けむ	けむ	けめ	動詞の連用形
べし	べく	べく	べし	べき	べけれ	動詞の終止形(但ラ變は連體形)
べかり	べかり	べかり	べかり	べかる	べかれ	同右

〔一〕**「らむ」**　「らむ」は主觀的に疑惑的推量を現す詞であつて、推量としては最も不確實な推量である。その主觀的推量なる點は次の諸例で分るであらう。

思ひつゝぬればや人の見えつらむ夢と知りせばさめざらましを。(古今集)

今もかも咲きにほふらむ橘の小島がさきの山吹の花。（古今集）

「らむ」は眼前の事實に基いて、見えないで隠れてゐる事情を推量するに用ひられることがある。

霧たちて雁ぞ鳴くなる片岡のあしたの原はもみぢしぬらむ。（古今集）

久方の月の桂も秋はなほ紅葉すればや照りまさるらむ。（古今集）

これが一歩進むと原因を推究するために用ひられることがある。

きのふ今日極しげらなき大空のなどかく獨りながめらるらむ。

宿りせし花橘もかれなくになどほととぎす聲絶えぬらむ。（古今集）

更に今一歩進むと、上の「など」といふ副詞を用ひないで、「らむ」だけで原因を推究することがあるのである。

春の色いたり到らぬ里はあらじ咲ける咲かざる花の見ゆらむ。（古今集）

わが宿に咲ける藤波たちかへり過ぎがてにのみ人の見るらむ。（古今集）

秋風は身を分けてしも吹かなくに人の心の空になるらむ。（古今集）

久方の光のどけき春の日にしづ心なく花の散るらむ。（古今集）

〔二〕「めり」　不確實の程度極めて輕く、自分の心にうつつた現實の動作狀態を、かうであらうと斷定的に推量するのである。

うたてげなる翁二人おうなと行きあひて同じ處にゐぬめり。（大鏡）

これは斷定を婉曲に言つたもので、「樣である」「樣子である」などを當てて見ればあたる語調である。

信に秦時が力とぞ申し傳ふめる。（神皇正統記）　人毎にいふめれどそれもさるものにて。（徒然草）

みなこの用例である。尤も次の例は「と見える」といふ樣な譯が當るかも知れない。

立田川紅葉亂れて流るめり渡らば錦中や絶えなむ。（古今集）

併し根本義は一つである。なほ「めり」に就いては「高等日本文法」（二七二頁―二七三頁）及「日本文法論」（四五〇頁―四五一頁）を參照ありたい。

〔三〕「らし」　これは所謂事實の現在的推量を傍觀的に述べるもので、推量の程度は確實である。「らむ」を主觀的の推量とすれば之は客觀的の推量である。「らむ」を直覺的とすればこれは傍觀的である。

み吉野の山の白雪つもるらし古里さむくなりまさるなり。（古今集）

み山には霰ふるらし外山なるまさきの葛色づきにけり。（神樂）

龍田川紅葉葉流るおく山の雪解の水ぞ今まさるらし。（古今集）

松のねに風のしらべをまかせては立田ひめこそ秋にひくらし。（後撰集）

奈良朝時代には「らしき」といふ活用形（連體形）があつて「こそ」に對しての結びになつてゐる。

うべしこそ見る人毎に語りつぎしぬびけらしき。（萬葉集）　いにしへも然なれこそうつせみも妻を爭ふらしき。（萬葉集）

現代文では更に次の如く活用する「らし」が用ひられてゐる。

	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	接續
らし	○	らしく	らし	らしき	○	動詞の終止形

雨降るらしく見ゆ。　　　雨降るらし。

雨の降るらしき空合なり。

これは體言について志久活用の形容詞をつくる接尾語の「らし」の類推から、推量の助動詞の「らし」をも同様に活用させて使ひ出したものと思はれる。

なほ推量の「らし」が語尾に「る」を持つてゐる語に連續したときには、「る」が省略されて「けるらし」が「けらし」となり、「なるらし」が「ならし」となる。

〔四〕**「けむ」**　これは前に述べた所謂過去の回想の助動詞「き」と豫想の助動詞「む」との結合によりて出來たものであらうと言はれてゐる。さうすると「き」の未然形には「け」もあつたらうといふことになり、「き」にはカ行とサ行との二つの系統が混入してゐるのではないかといふ問題も起つて來る。（「奈良朝文法史」二一二頁―二一四頁）

「き」の系統　け　き　　「し」の系統　せ　し

この二つの系統は時代の前後か、或は意義の直寫と傍觀との差からであつて、久しく用ひられてゐるうちに混合したものではあるまいかといふ様な疑も起つて來る譯である。併しこれは今後の研究にまつべき問題であると思ふ。或は又「けり」の未然形の「けら」に「む」が結びついて「けらむ」となり、更にこれが約せられて「けむ」になつたものではあるまいかといふ様な説もある。その成立は孰れにもせよ、過去の推量を表す助動詞である。

あさゆふの宮仕につけても、人の心を動かし、恨を負ふつもりにやありけむ。（源氏物語）

あをまつと君がぬれけむあしびきの山のしづくにならましものを。（萬葉集）

唐心たつを惜みし心こそ二村山の關となりけめ。

なほ次の例の、

命のまたけむ人。（古事記）　　さぶしけめやも君まさずして。（萬葉集）

「けむ」は「全からむ」「さぶしからむ」（「全くあらむ」「さぶしくあらむ」より生じた形容動詞に「む」の連つたもの）の約されたものであるから前の「けむ」と混同しない様にする必要がある。

忘れむと君いひまさばつらからむ忘れずといはゞなほ悲しけむ。（白蓮）

右の「けむ」も「悲しからむ」の約である。

〔五〕**「べし」**　「べし」の本義は推量であるが、推量以外に種々の意味を表す。

1 推量の本義。

戰爭はこゝ數年を出でずして起るべし。　　我宿の花見がてらに來る人は散りなむ後ぞ戀しかるべき。（古今集）

2 可能の意。

腰間の秋水、鐵をも斷つべし。　　海廣くとも渡らば渡るべし。

3 義務の意。

國民としてなすべき多くの務あり。　　朋友間には信あるべきなり。

4 當然・適當の意。

金は山に捨つべく玉は淵に投ぐべし。　　約束を守るは人たるべき道にすぎず。

5 決意の意。

吾必ず本年より早起を勵行すべし。　　いかにもして敵を討取り申すべし。

6 命令の意。

四月一日出校すべし。　　團員一同結束を固くすべし。

7 婉曲なる斷定の意。

天下の美談といふべし。　　乃木大將こそ國士の龜鑑といふべけれ。

この「べし」は形容詞と同じ活用を有してゐるばかりでなく、その用法に於ても形容詞と似てゐる所が非常に多い。研究して見ると面白い。

〔六〕「べかり」　これは「べし」と「あり」との結合して生じたものであつて、形式語に於ける形容動詞ともいふべきものである。その意味は「べし」と同樣、推量の外に可能・義務・適當・當然・斷定等に用ひられる。活用形の用例は未然形と連用形の外にあまり無い樣である。

あひみずば戀ひしきこともなからましおとにぞ人をきくべかりける。（古今集）　　匹夫もその志を奪ふべからず。

〔研究問題〕

（一）「べし」と形容詞との比較。　　（二）推量の諸意。

57 **希望の助動詞**　動作・現象・存在を願ひ望む意を表す助動詞であつて、これに屬する語は「たし」「まほし」の二語である。その活用と連續とは次表の通りである。

	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	連続
たし	たく	たく	たし	たき	たけれ	動詞の連用形
まほし	まほしく	まほしく	まほし	まほしき	まほしけれ	動詞の未然形

〔一〕「たし」　この語は動作をする主がその動作をせんことを欲する意を表す語である。「たし」の用法は次の通りである。

行くたくば行け。　ありたきことは誠しき文の道。(徒然草)

乞食頭陀の行をもしてひとへに佛道修行したく候。(平家物語)

學者によつてはこれは「いたし」の略であるから形容詞であると說く人もあるが、形容詞は觀念語であるから形容詞のみにて文の述語となることが出來るが、「たし」だけでは獨立して文の述語とはなることが出來ないのであるから、これは形式語である。助動詞である。併し形容詞とよく似てゐるのはその活用ばかりでなく、「あり」と熟合して「たかり」(一種の形式語の形容動詞であること「べかり」に似てゐる)となる事などもそれである。

山寺は法師くさくて居たからず。(明惠上人)

又、人によつては之を接尾語と說く人もある。(「廣日本文典」二四二頁參照)これは恐らく、他の語に附いてその事の甚だしき意を表したり、その語意を强めたりする一種の接尾語「たし」といふのがあるが、これからの類推ではあるまいか。

うれたくも鳴くなる鳥か。（古事記）　三笠山ぬべゆく道はこきたくも荒れにけるかもひさにあらなくに。（萬葉集）

これは形容詞を作る接尾語であつて、「うれたし」「こきたし」「おもたし」「平たし」「めでたし」「つめたし」等は、この接尾語「たし」の附いて出來た形容詞である。

なほこの「たし」を他人のなす動作につけて用ひることがある。

御出相成度候。

これに就いては三矢重松氏の「高等日本文法」（二二〇頁—二二一頁）に次の如く見えてゐる。

「御出相成」は他人の動作なるに自己の動作を希望する「たし」にて承け「あらまほしく候」の意とせるなり。こはもと「御出を蒙りたし」（正）（「蒙る」は我の動作）の意なる「御出下されたし」の「下され」は本來受動にて我の動作なれば其の方に「たし」と附きたるが、何時の間にか其の「下され」は尊他の敬相に轉じたるも其のまゝにつくることゝはなれるにて、さて「被下」と「相成」と其の意相近きより終に「御出相成度候」と様にも一般に言ふことゝなれるなり。

「上京ありたし」（尊他）の如きも尊他の意にて右と同例なり。「家にありたき草木は」（徒然草）の例にては草木に「あることを」希望するにはあらずして我が草木をして「あらしむる」ことを希望する意なり。さればこゝには「あらせたき」「おきたき」「植ゑたき」などいふ様に心得べし。

〔二〕「まほし」　この語は前に述べた豫想の助動詞「む」の變化に、形容詞「ほし」がついて一語になつたものであらうといふ。又、人によつて「まくほし」の略であらうと說くものもある。一見その様にも思はれるが、この「まく」は前にも述べた様に、「む」の變化に「く」いふ語が連續して出來たもので「まほし」の原形ではあるまいと思はれる。古くは

「見まくのほしき君」の如く「まく」と「ほし」とを分けても用ひてゐる。

「まほし」は動作の主が、動作せんことを欲する場合にも、他の動作を希望する所謂誂（あつらへ）の場合にも、孰れにも用ひられる。

又「まほし」は「あり」と熟語して「まほしかり」といふ形式語の形容動詞にもなる。

以上「たし」と「まほし」との二語の外に希望の助動詞の中に「なむ」を加へる人がある。（三矢重松「高等日本文法」二一七頁—二二〇頁參照）併しこれは係助詞の一つの用法と見るべきものと思ふから、助動詞の中に入れない。

〔研究問題〕

（一）動詞の命令形と希望の助動詞との間に於ける願望の相違如何。　（二）形式語の形容動詞的のものの本質。

58　比況の助動詞

比況の助動詞ともいはれるもので、動作狀態などを比較して、その類似を示す助動詞である。之に屬する語は「如し」一語である。山田博士はこの、「如し」を「あり」及び「す」とともに形式用言と名付け、形容の意は明かで用言の活用と用とを有つてゐるけれども、實質が全く缺乏してゐるので、これを使用するときには、形容に供する概念を補充しなければならない。且つこの補充の概念は、體言又は體言の資格を附與せられたものに限る。この點で、これを助動詞と見ることは出來ないとしてをられる。そしてこれを形容詞の條下に說いてをられる。（「日本文法講義」七五頁—七六頁・八八頁—八九頁）又、三矢博士も「高等日本文法」（一二三頁—一二五頁）に於て、これを形容詞中の特殊の語として、獨立詞と立てて居られる。なるほど、この助動詞はその用法や接續の狀態から考へて、他の助動詞とは余程趣を異にしてゐる。「ごとし」の「ごと」は「事」であつて體言であるから、動

詞の連用形に連るのであると言はれてゐる點などから考へても、又その連用形が、上の語とともに副詞的修飾語に立ち得ること、例へば、

落花雪の如く散る。　彼の辯舌は水の流るゝ如く爽かなりき。

の如きを見ても、「如し」が他の一般の助動詞に比して、觀念語的の要素を有つてゐることが知れるのである。（43助動詞の本義參照）併し本講ではしばらく從來の說に從つて、これを助動詞として說くことにする。

「如し」の活用と連續とは次表の通りである。

	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	連續
如し	如く	如く	如し	如き	○	動詞「の」「が」の下に。動詞・形容詞の連體形。

親の恩は山の如く海の如し。　大賢は愚なるが如し。

歲月は流るゝ如し。　世の中を何に譬へむ朝びらき漕ぎにし船の跡なきごとし。（萬葉集）

右の用例に見る如く、格助詞「の」及び「が」に介せられて、上の體言に又用言に連るところより見れば、少くも助詞（形式語）以上の品詞でなければならぬといふことが考へられるのであるが、同時に又次のやうに助動詞「き」の連體形についたものも見られるのである。

吾背子が袖かへす夜の夢ならしまことも君に逢へりし如し。（萬葉集）

なほ「如し」の語幹「ごと」は古くは多く用ひられてゐる。

其の雨のひまなきがごと、其の雪の時なきがごと、隈も落ちず。（萬葉集）

古にありけむ人も吾がごとか妹に戀ひつゝいねがてずけむ。（萬葉集）
秋の野の錦のごとも見ゆるかな色なき露は染めじと思ふに。（後撰集）

今も九州の方言に、

花のごとある。　雪のごつ白か。

などいふのはこの名殘である。

「如し」の已然形「如けれ」は用例がない。又「如し」の連用形「如く」は、指定の助動詞「なり」と連つて次の如く用ひられる。（「高等日本文法」一二四頁參照）

如く	なら（バ・ム・ズ・シム）	に（テ・シテ） / なり（キ・ケリ）	なり（トモ・ト）	なる	なれ（バ・ド・ドモ）	なれ（ヨ）

從つて「如けれ」といふ已然形が無い代りを、「如くなれば」「如くなれど」「如くなれども」として用ひるのである。

〔研究問題〕

（一）「如し」を形式形容詞とするの論（「日本文法論」三一三頁—三一六頁參照）

59　**指定の助動詞**　事物を指し定める意をあらはす助動詞である。事物の解說及び斷定に用ひられる助動詞とも言はれる。これに屬する語は「なり」「たり」の二語である。この二語に就いては旣に助動詞の本義の條下で述べた樣に、言の意味の助動詞とするのは如何かと思はれる點が多いのであつて、山田博士の樣に、形式用言として扱ふのが妥當であらうと思ふが、本書では暫らく從來の說に從つて助動詞として說く事にした。

「なり」「たり」の活用と連續は次の樣である。

	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形	連續
なり	なら	なり	なり	なる	なれ	なれ	體言 動詞・形容詞・助動詞の連體形
たり	たら	たり	たり	たる	たれ	たれ	體言

〔一〕「なり」　「なり」は「にあり」の約である。即ち助詞と動詞との合成語である。「廣日本文典」（一二二頁）では「此ノ『なり』ノ語原ハ『に、あり』ノ約ナルベク、意義ハ『にて、あり』ナリ。」と言つてある。「なり」の連續は前表にあげた通り、體言及び活用言の連體形（用言が體言に準ぜられるのは連體形が普通である）に連るのが普通であるが、終止形に連る用法が一つある。「奈良朝文法史」（一四九頁—一五〇頁）に依れば、

いたくさやぎてありなり。（古事記）　さやげりなり。（書紀）

沖邊のかたにかぢの音すなり。（萬葉集）　ほととぎすなきて越ゆなり。（萬葉集）

平安朝以後かういふ例は絶えて、終止形に續く「なり」は指定の意味を表すのではなくて咏嘆の意を表すのに變化してゐるといはれる樣になつた。

この「なり」の連體形「なる」に就いては注意すべき問題が二つある。その一は次の例の如き連體形の用法である。

信濃なる淺間の嶽。　駿河なる宇津の山邊。

武藏なる隅田川。　春日なる三笠山。

右の「なる」は孰れも指定の意味ではなくて、「にある」といふ存在の意味を表してゐるのであつて、語原的の原意に

於て使はれてゐるのである。これを助動詞と見ないで動詞と見てゐる人もあるが、獨立で述語になれない所を見れば動詞ではあるまい。その二は「といふ」意味に用ひられた次の如き用法である。

顔回なるものあり。　辨慶なる者。　明倫館なる學校。

中古文に於てこの様に「なる」を「といふ」の意味に用ひた例は無いのであるが、徳川時代の中期以後行はれはじめ、現代普通文では一つの格として認められ、「文法上許容ニ關スル事項」の十六には次の如く定められるに至つた。

「トイフ」トイフ語ノ代リニ「ナル」ヲ用キル習慣アル場合ハ之ニ從フモ妨ナシ。

例　イハユル哺乳獸ナルモノ。顔回ナルモノアリ。

「廣日本文典」(一二三頁)には次の如く見えてゐる。

此ノ「なり」ノ語原ハ、「に、あり、」ノ約ナルベク、意義ハ、「にて、あり、」ナリ。サレバ、「武藏なる隅田川、」「大父なる人」ナド用キルハ、論ナケレド、「顔回なる者あり。」「鈴木なる者來りて、」「明倫館なる學校を建てゝ、」ナド用キルハ、非ナリ、斯クテハ、「顔回にある者、」「鈴木にてある者、」「明倫館にてある學校」、ナドナリテ、語ヲ成サズ、是等ハ「顔回といふ者、」「鈴木といふ者、」「明倫館といふ學校、」トヤウニアルベシ、古訓點ニハ、「顔回者、」ナドトアルナリ。(「顔回ナル者、」ナドトアルハ、一齋點ナドノ盲訓ナリ。)

なほ詳しくは「現行普通文法改定案調査報告之一」に就いて見るべきである。「廣日本文典」の説に對する「日本文法論」の説は同書(三五〇頁―三五一頁)に見えてゐる。參照すべきである。

指定の助動詞「なり」の連用形は「なり」であつて次の様に用ひられる。

彼の來る來りしは[illegible]なりき。

從つてその中止形は「に」であつて、更に下に助詞「て」又は「して」を加へて用ひる。

正成は忠臣 に
　　　　　 にて　正行は孝子なり。
　　　　　 にして

といふ例をあげて「高等日本文法」（一八四頁—一八五頁）には次の如く説明してある。

これ「孝子なり」の「なり」に、「あり」といふ動詞あるを以つて、「に」の下に「あり」を略したるなり。「にして」の「し」は動詞なれど、いつしか其の意味忘れらるゝに至れり。「にて」はテの上に動詞アリを略せる者、共にテニヲハの如く用ひらる。

福澤は正成を凡俗の人にしてしまへり。

形の上よりいへば同一なれど、前例の「にして」の「し」は「あり」の義にて自動、この例の「し」は他動なり。

此の如くにして我はつひに死せむか。　燈火明にして書をよむ。

この「し」は他動にも自動にも解せらる。かくの如く「し」の自他は區別するに困難なれど、多く「なり」の中止とみてよろし。

右の例と同じ樣な例は次にも見ることが出來る。

それは梅にもあらず、櫻にもあらず。　時は春にこそあれ。

右の「に」と「あり」とはその中間に助詞を介在して分離されてゐるが、實は、

それは梅ならず、櫻ならず。　時こそ春なれ。

と言ふことも出來るものであるから、「あり」が純粹の存在を表す動詞ではなくて一種の陳述のみを示す形式用言と

なつてゐると說くと同時に、「に」を指定助動詞「なり」の中止形の一つの用法（むしろ副詞形に近い用法）と見るのが妥當である。

實朝は賴朝の子に鎌倉右大臣といふ貴人なり。

の「に」は純粹の中止形であるから、「に」を格助詞の「に」、「子に」を副格と考へてはならない。（勿論「なり」の中に含まつてゐる「に」は元來副格に立つ格助詞の「に」に相違ないけれども）指定の「なり」を形容動詞の語尾と混同してならないことは既に述べた通りである。

〔二〕「たり」 「たり」は「と」と「あり」との合成語「とあり」の約である。指定の意味は「なり」と變らないのであるが、「なり」に比して稍〻指定の意味を強く表す樣に思はれる。（「つ」と「ぬ」、「と」と「に」の區別參照）三矢博士は「たり」は口語の「として居る」—「となつてゐる」—「といふ」などに當ると言つてをられる。漢文直譯に多く用ひられたと思はれるのも、調子が強いからであらう。

「たり」は名詞の下にのみ就いて活用言には續かない。

すみとげむ廬たるべくも見えなくになどほどもなき身たこがすらむ。（古今六帖）

あくれば左日のあかつきに兄人たる人ほかより來て。（蜻蛉日記）

次のいひ方を口語と對照して見ると「たり」の用ひ方が了解出來よう。

將來予は學者たらむ。（行末自分は學者にならうと思ふ。）

彼は國士たり。（彼は國士に相當した人物である。）

人たるものは人の道を守るべし。（一體人間つていふ者は人間の道を守らなければならない。）

軍人たる彼の面目。（軍人としての彼の面目。）

「高等日本文法」（一八八頁）では、

たら｛バ・ズ・ム・シム

と｛テ・シテ

たり｛キ・ケリ・ツ

たり｛ヤ・トモ・カシ

たる｛カ・ヲ・ニ・モ・ガ

たれ｛バ・ド・ドモ

たれ｛ヤ・ヨ

とあつて中止形に「と」をあげ「とて」「として」の用法がある様に書いてあるが、指定の原意に於て「たり」に「と」といふ中止形があるのであらうか。後攷を待つ。

なほ指定の「たり」と、完了の助動詞の「たり」及び形容動詞のタリ活用の語尾「たり」と混同してはならない。

〔研究問題〕

（一）「なり」が「ある」「なる」「ざる」に續く時の音便現象。

（二）「トイフ」といふ語の代りに用ひられる「なる」の本質。

（三）「たり」の中止形「と」の用法。

（四）「なり」「たり」に相當する口語の助動詞の研究。（「だ」「である」「です」「であります」等この比較的歴史的研究）

60　否定（打消）の助動詞　動作狀態などを否定することを表す助動詞をいふ。これには「ず」「ざり」「じ」「まじ」の四語がある。その活用と連續とは次の通りである。

	ず	ざり	じ	まじ
未然形	ず	ざら	○	まじく
連用形	ず	ざり	○	まじく
終止形	ず	ざり	じ	まじ
連體形	ぬ	ざる	じ	まじき
已然形	ね	ざれ	じ	まじけれ
命令形	○	ざれ	○	○
連續	活用言の未然形	同右	同右	活用言の終止形。但ラ變は連體形。

〔一〕「ず」　「ず」の活用形は右の如くであるが、未然形を設けないで、連用形から左の如く連ると說く說がある。

ず ｛ アラ　ば
　　 アリ　とも

併し未然形の「ず」を設けて直接これに「ば」「とも」が連ると見る方がよいと思ふ。

連用形「ず」は次の如き場合に用ひられる。（連用形ではあるが副詞法のはたらきをしてゐると思ふ。）

雨は止まず降れり。　筑波の山を戀ひずあらめかも。（萬葉集）

次の例の「ず」は中止形である。

照りもせずくもりもはてぬ春の夜。

又次の例の「で」は連用形の「ず」に助詞の「て」が連つて出來た「ずて」のつまつて來たものである。

人に知られで來る由もがな。　手折らで更に歸らざらまし。

右の「で」が活用言の未然形に連るのは、「ず」が未然形に連續する語だからである。又「ず」の連用形に助動詞「けり」「けむ」を連ねた「ずけり」「ずけむ」の用法は古い用法である。

なほしかずけり。　　　もとめあはずけむ。

知らずぞ人は待てど來ずけり。

次の例に見ゆる「ず」は連用形であるか終止形であるか、その孰れとも考へられて決し難い。連用形は名詞になり得る形であるから連用形かとも思はれ、或は言ひ切つて一つの體言の資格を與へたものと考へれば終止形とも思はれる。或は後説がよいのではあるまいか。

問はず語。　知らず顔。　消えずの火。

「親知らず」「月足らず」などは常然終止形と思はれる。「見ず知らずの他人」「土ふまず」「鼠入らず」「猫いらず」など面白い例がある。「くにすぎらひ」の「ず」は連用形の副詞法ではあるまいか。

なほ「ず」の一つの形に「に」といふのがあつて奈良朝時代に連用形として用ひられてゐる。

うかがはく知らにとみまきいりびこはや。（古事記）

旅にしあれば思ひ遣るたづきを知らに。（萬葉集）

いへばえにいはねば胸にさわがれて心ひとつに歎くころかな。（伊勢物語）　　行く方も知らに舍人はまどふ。

この「に」に就いて「奈良朝文法史」（一八九頁）では次の如く論じてある。

「に」はこの複語尾の連用形なることは明なり。しかるときには、こゝに一の疑問存す。そは他にあらず。「ず」も亦連用形の形なるに、こゝに「に」あり。この複語尾には連用形二樣あるが如きさまなり。今これにつきての意見を立てむに、こはまさしく

「に、ぬ、ね」と奈行音に活きしものなるべし。或は太古には奈行四段形にありしか。されどもこれ未だ斷言すべくもあらず。若果して奈良四段にて打消をあらはしたりしものとせば、「す」は如何にといふ問題生ぜむ。おもふにこの「ず」は或る期にあたりて偶然の會合より打消に用ゐられ、かくて終止形、未然形、連用形を代理するに至りしにあらざるか。

「ず」の連用形に係助詞「は」の連つた「ずは」は從來「ずば」とよまれ、「何々せんよりは」と解釋せられてゐたのであるが、（かうなると「ず」は連用形でなくて未然形といふことになる）橋本進吉氏の研究によつて、「ず」又は「ずして」の意味であつて「何々せんよりは」ではないことが明かになつた。

斯くばかり戀ひしあらずは高山の磐根し枕きて死なましものを。（萬葉集）

たちしなふ君が姿を忘れずは世の限にや戀ひわたりなむ。（萬葉集）

右の二例の「ずは」を比較して見ると分る。なほ詳しくは橋本進吉氏論文「奈良朝語法研究の中から」（雜誌「國語と國文學」大正十四年一月號所載）を參照ありたい。

〔二〕「ざり」　「ず」と「あり」との結合して出來た形式的形容動詞ともいふべきものである。

世の中に絶えて櫻の咲かざらば春の心はのどけからまし。（古今集）　　問へど答へざりけり。

春の色いたりいたらぬ里はあらじ咲ける咲かざる花の見ゆらむ。（古今集）

「ざり」の終止形の用例は見當らない。

なほ「ざ」と「あり」のつゞまつて出來た「ざり」と混同しない樣にする必要がある。

山深き宿にしあれば年毎に花の心は淺くざりける。（貫之集）

「ける」といふ連體形は上に「ぞ」を要求する筈である。

〔三〕**「じ」**　「ず」が斷言的に否定するに對して「じ」は多少遲疑して打消す語である。從つて主觀的傾向を帶びてゐるのであり、また豫想的推量的意味があると言はれるのである。

長くとまでは惜しまれじ身を　幾世しもあらじ我身をなぞもかく蜑の刈る藻に思ひ亂るゝ（古今集）

右の「じ」は連體形である。「負けじ魂」なども連體形である。

人はなど訪はで過ぐらむ風にこそ知られじと思ふ宿の櫻を。（新續古今集）

また來むと誰にもえこそ言ひおかじ心にかなふ命ならねば。（詞花集）

右の「じ」は已然形である。

この「じ」が次の如く決意を表すことがある。

余は他言せじ。

〔四〕**「まじ」**　「まじ」も「じ」と同じく打消と共に推量及び決意を含んで表す助動詞である。

めづらかなることと心もおどろくまじ。　すまじき業。

右の「すまじき業」「言ふまじき事」等は「してはならぬ事」「言ふべからざる事」の樣に、當然の否定をあらはす。

連用形の「まじく」は「あり」と熟合して形式的形容動詞ともいふべき「まじかり」を作る。次はその連用形の例である。

なきあとまで人の胸あくまじかりける人の御覺。（源氏物語）

以上四つの打消の助動詞の外に禁止の助動詞として「な」をあげ、「ぬ」（「ず」の連體形）の變化であらうと説く人も

あるが、これは助動詞ではなくて助詞として說くべきものと思ふ。又「なその格」の「な」も助動詞と見る說があるけれども、これも助動詞として說くことは妥當であるまいと思ふ。

〔研究問題〕

（一）「ぬ」の延言と言はれた「なく」の本質。　（二）「ず」と「じ」との相違。

（三）「ずに」の攻究。（前述橋本氏の論及び「奈良朝文法史」（一八四頁―一八五頁）參照）

61 咏嘆の助動詞

感動の意を表すに用ひる助動詞である。これに屬する助動詞は、「けり」と「なり」である。

「けり」は所謂過去の助動詞と稱せられたものでこれが咏嘆に使はるるのである。

雪のうちに春は來にけり。（古今集）　花なき里も花ぞ散りける。（古今集）

今ひとしほの色まさりけり。（古今集）

かういふ例は非常に多い。

「なり」は前述の指定の助動詞の一つの用法であつて、必ず動詞の終止形に連續するので、指定の場合と區別が出來る。

秋の野に人待つ蟲の聲すなり。　みな人は花の衣になりぬなり。

今はとてこゆなる浪にぬるるそでかな。

併しこれを咏嘆の助動詞と見るか否かに就いては文法學者の間に異說もあるのである。「高等日本文法」（一八五頁）にも、「この『なり』は昔より感嘆の『なり』といへども、なほ指定のが變化したるものにて『鞆のおとす』（『丈夫の鞆の

おとすなり」の例について)を一團のものと見て『なり』を添へたるなり。」と論じてあり、「日本文法論」(三四六頁)にも、「かく原形をとれるものに『なり』を添へて文勢を強むるはなほ動詞に『す』を添へて力を強むると同じく意義の上に運動を呈せざるが如くなれど或る場合を強むるものなれば、古來之を詠嘆の『なり』と稱して一種特別のものとせり。然れども此の『なり』を詠嘆の『なり』とせば、「花にてかくの如き位置をとれるは當然なりとす」の『とす』なども又詠嘆の『なり』と稱して一種特別のものとなるべし。いづれも言葉を強めてその斷定を強勢ならしむるものなればなり。」と論じてある。その他松尾捨治郎氏の「國文法論纂」(三三七頁—三四八頁)にも詠嘆でないといふ說があり、近くは「國學院雜誌」(昭和八年七月號)にも「所謂指定の『なり』と詠嘆の『なり』」(淺野信)の題下で論じてある。一考を要すべき問題である。

〔研究問題〕

(一)詠嘆の『なり』の本性。

以上を以て助動詞を終へるのであるが、助動詞にはなほ種々の問題が殘ってゐる。助動詞以外の品詞と助動詞との承接及び助動詞相互間の承接問題等がそれである。併しこゝでは一切省略に從っておく。

〔研究問題〕

(一)助動詞の承接問題。

(二)助動詞の連用形の用法に副詞法を置くことの文法的妥當性如何。

(三)助動詞を單語と認めない說の批判。

62　助詞の本義

助詞は「助辭」或は「靜助辭」とも、或は「てにをは」（略して「てには」）とも言はれるが、普通は助詞で通つてゐる。「てにをは」といふ名稱は、元來は今日いふ助詞だけを指すのではなくて、助動詞・助詞及び動詞・形容詞の語尾等の獨立しない語の總稱であつた。そしてその名稱は乎古止點から起つたと言はれてゐる。

助詞の研究は國語研究の歴史からいへば可なり古くから行はれてゐたらしく、順德院の「八雲御抄」に既に「てにをはといふ事」といふ一節があつて、歌道上その肝要なことが說かれてゐる。德川時代に於てはことに多くの學者によつて助詞の研究が行はれてゐるが、未だ國語の本質に卽しての完全なる言語學的研究を施したものは無かつたのであるが、明治になつてからは新研究が現れ、大槻文彥氏の「廣日本文典」、山田孝雄氏の「日本文法論」等從來の助詞研究に對して新生面を開いたのである。

助詞はその本質に於て形式語であつて關係語である。卽ち單語・連語・或は文の下に附いてそれ等を助けると共に、それ等が他に對して如何なる關係にあるかを示すのである。次の例に於て、

櫻　花　春　初　咲く。

だけでも、ある程度までその意味は分るが、「櫻」「花」「春」「初」「咲く」といふ五つの觀念語間の關係がどうなつてゐるかは十分明かでない。併し、

櫻の|花は|春の|初に|咲く。

のやうに、觀念語の間に「の」「は」「に」等の助詞を挿入すると、その關係が非常に明瞭になるのである。これがその關係語であるといはれる所以である。併しこれ等の助詞は、右の例でも分る樣に、觀念語に伴つて用ひられる時に始めてその職能を全くすることが出來るのであつて、この點が助動詞と共に形式語と言はれる所以である。

日本語は言語學上の形態的分類によれば所謂漆着語に屬するのであるが、國語のこの漆着語たる特質は主としてこの助詞によつて表されてゐるのである。この意味に於て助詞は國語の品詞中重要なる品詞といふべきである。

今助詞の特質の主なるものを列擧すれば次の通りである。

(一)形式語であつて觀念語でないこと。

(二)關係語であること。(助動詞は形式語であつたが補助語である。)

(三)活用を有してゐないこと。(助動詞は形式語であつてしかも活用があつた。)

(四)形が多くは短小で一音二音のものが多く、三音以上は稀であること。

(五)必ず他の語句の下に附いて使はれること。從つて獨立して文の頭に立ち得ないこと。

(六)すべて固有語であつて外來語(漢語)は絕對に無いこと。

山田孝雄博士はその著「日本文法論」(五四八頁)に於て、助詞の性質として次の三項を指摘して居られる。

第一　他語との關係を示す必要よりして、語形上に變化を有するかの點より見れば助詞にはかゝることなし。

第二　そのあらはせる觀念の上より觀察すれば助詞は單獨にては何等の觀念をもあらはし得ず、他の觀念語に附屬して始めて

其の義を認むるを得るのみ。

第三　その職能によりて觀察すれば、助詞は觀念語たる體言・用言・副詞に附屬して其の意義を明にし、又それらの間の關係を示すに用ひらる。

右は助詞の特質の要をつくしてゐる。

63　助詞の分類

徳川時代は暫く措き、明治以後に於て注目すべき助詞の分類は大槻文彦氏の分類と山田孝雄氏の分類とである。

大槻文彦氏は「廣日本文典」(一六三頁—一六四頁)で次の様な分類を試みられた。

アラユル弖爾乎波ヲ其用法ニ因リテ三類ニ大別ス。

第一類　名詞ニノミ屬クモノ。(名詞ノ弖爾波)

(1)が　の　　(2)の　が　つ　　(3)に

(4)を　　(5)と　と　　(6)へ

(7)より　より　から　　(8)まで

第二類　種々ノ語ニ屬クモノ。

(9)は　ば　　(10)も　　(11)ぞ　なむ　なも　し

(12)こそ　　(13)だに　すら　　(14)さへ

(15)のみ　ばかり　　(16)や　か

第三類　動詞ニノミ屬クモノ。(動詞ノ互爾波)

(17)ば　(18)と　とも　ど　ども　(19)に　な　が

(20)て　にて　とて　して　にして　として　(21)で　(22)つゝ

なほ同氏の「廣日本文典別記」(七一頁—七三頁)では、更に意義に就いての分類があげてある。(但し「然れども、場合に因りて各語に種々の異義を生ずれば、これを以て定義とはしがたし。」とある。)

第一類　文主ヲ指示スルモノ。　が　の

二名詞ヲ繫グモノ。　の　が

事物ヲ配合スルモノ。　に　な　と

事物ノ方向ヲ示スモノ。　へ　より　から　で

第二類　分合スルモノ。　は　も

指定スルモノ。　ぞ　なむ　こそ

引證スルモノ。　だに　すら　さへ

限ルモノ。　のみ　ばかり

疑フモノ。　や　か

第三類　設想スルモノ。　ば

押ヘテ意ヲ續スルモノ。　と　とも　ど　ども

意ノ裏返ルモノ。　に　な　が

終リテ移ルモノ。　　て　で　つゝ

右の「廣日本文典」の流に從つて助詞の分類をしてゐる人は可なり多い。卽ち、

第一類　體言につく助詞。（助體詞）

第二類　體言用言その他種々の語につく助詞。（通助詞）

第三類　用言につく助詞。（助用詞）

の如きもこれであり、「高等日本文法」に見ゆる（一）名詞に附く者、（二）動詞に附く者、（三）諸詞に附く者、もこれである。次の「口語對照語法」（吉岡郷甫氏）の分類も、數は增してゐるがこの系統の分類法である。

第一類の助詞　體言又は體言に準ずるものに附いて他の語句に對する關係を定めるもの。

第二類の助詞　種々の語に附いて種々の意趣を表すもの。

第三類の助詞　用言を根幹とする語句に附いて他の語句と接續するもの。

第四類の助詞　文の末の用言又は文の中の種々の語に附いて疑問を表し、文の末の用言に附いて命令又は願望を表すもの。

第五類の助詞　文の末又は中に置いて語調を整へ、語勢を與へ餘情を添へるに用ひられるもの。

次に山田孝雄氏の分類は「日本文法論」及び「日本文法講義」に於て見ることが出來るが、これを表示してみると次の如くなる。卽ち主として職能卽ち他に伴ひて用ゐらるゝ狀態とその關係との二つによりて分類すると次表の通りになるのである。この分類法は從來行はれてゐた分類法に比較すると、「文法的合理性に於て著しく進步したものといふことが出來ようと思ふ。

- 助詞
  - 特定の關係を示すもの
    - 一つの句内にあり、特定の關係を示すもの
      - 句そのものの成立又は意義に關するもの
        - 句の終止にのみ用ゐらるゝもの……終助詞(五)
        - 主として述語に影響するもの……係助詞(四)
      - 句の成分の成立又は意義に關するもの
        - 一定の成分の成立に關するもの……格助詞(一)
        - 句の成分な意義の上より修飾するもの……副助詞(二)
    - 句と句とを結合するもの……接續助詞(三)
  - 特定の關係を離れたもの……間投助詞(六)

而して右の六種類の助詞に各々之に屬する語をあてると次の如くになる。(「日本文法講義」による)

(一)格助詞　の　が　を　に　と　へ　より　から　で

(二)副助詞　だに　すら　さへ　のみ　ばかり　まで　など　やら　だけ　ぐらゐ

(三)接續助詞　ば　と　とも　ど　ども　が　に　を　て

(四)係助詞　は　も　ぞ　なむ　こそ　や　か　な　さへ　でも　ほか　しか

(五)終助詞　が　がな　か　かな　かし　さえ　ぜ　い　な　とも

(六)間投助詞　よ　や　し　を　な　ね　ぞ

この山田氏の系統に從つた分類法式も可なり多く行はれてゐる。たとへば小林好日氏の「國語國文法要義」に於ける四種類の分類法の如きこれである。

(一)定格助詞　(二)係屬助詞　(三)接續助詞　(四)感動助詞

又、安田喜代門氏の「國語法概說」に於ける次表の如き分類もこれである。

- 助詞
  - 孤立助詞……………………………………感動助詞
  - 關係助詞
    - 形式助詞
      - 量的形式助詞……………………副助詞
      - 質的形式助詞
        - ……………………格助詞
        - ……………………法助詞
    - 實質助詞…………………………………實質助詞

松下大三郎氏の「標準日本口語法」に於ける五種の分類(一)格助辭、(二)感動助辭、(三)提示助辭、(四)名助辭、(五)副助辭なども一部分を除くとこの系統に屬する分類法であらう。

其他文法書によつて種々の分類法が試みられてゐるが、その基礎は大槻氏の分類法に依つてゐるか、山田氏の分類法に依つてゐるかの孰れかである。本講では山田氏の分類が最も文法的に合理的であると信ずるので、大體それに從つておくことにする。

64 格助詞

格助詞といふのは體言又はその他の語に附いて、その上の語が他の語に對して如何なる資格關係を有つてゐるかを明かにする助詞である。こゝに格といふのは、ある語が文の成分の成立に關係する時に持つ一定の資格の義である。而して格助詞に屬して一定の資格を示す助詞は、他の資格を表すことが出來ないのである。卽ち一つの格助詞は一つの格だけしか表すことが出來ないので、資格に關して示す區別が嚴然としてゐるのである。從つて格助詞相互は決して重ね用ひられるといふことがないのである。その實例をあげて說明すれば、「人○笑ふ。」の文に於て、○に當るところに若し「を」といふ助詞を入れる時には、「笑ふ」といふ語に對し

て「人」は所謂客語の關係に立つのである。又同じ〇に「が」といふ助詞を入れる時には「人」は「笑ふ」といふ語に對して主語の關係に立つのである。（尤もこの場合「人笑ふ」でも「人」が「笑ふ」の主語であることは明かであるが、これは便宜省略されてゐるのである。）即ち「人〇笑ふ。」では「人」が「笑ふ」に對して如何なる資格關係に立つてゐるか判然しなかつたのであるが、「を」又は「が」といふ助詞を「人」の下に附けることに依つて、「水」の格が客格であるか主格であるかが決定されたのである。その格決定の職能が「を」「が」にあるのである。かういふのが格助詞である。次の例に就いても同様の説明が出來るのである。

彼〇歩む。｛彼が歩む。彼と歩む。　　水〇増す。｛水が増す。水な増す。

山〇見る。｛山と見る。山より見る。　　花〇黄。｛花の黄。花と黄。

格助詞は副助詞及び係助詞に助けられる。又格助詞の缺けてゐる場合には副助詞及び係助詞がその代理をすることさへある。その助けられる例は次の通りである。

雨にさへ降られたり。　酒なのみ飲む。

格助詞に屬する語は文語に於ては次の通りである。

が　の　に　を　と　へ　より　から

右の各語は各々特有の職能とこれに依つて示す關係の區別を有つてゐるのである。その一々に就いて職能と示す關

係を例を以て說明すべきであるが、頁數の關係上一切省略に從ふことにする。

（研究問題）

（一）各格助詞の特質と用法。　（二）格助詞が格を示さぬ場合なきか。

（三）格助詞內に於ける「文法上許容ニ關スル事項」（九・十二・十三）の研究。

65　副　助　詞

副助詞はその名稱の示す如く、副詞に似た職能と意義とを有つてゐる助詞である。即ち用言の意義に何等かの關係を有つてゐる語の下に附いて、上の語と一體になつて下にあるその用言の意義屬性を修飾限定することを主たる職能としてゐる助詞である。副助詞といふ名稱は山田博士の命名によつたものであるが、その「副」といふ語は副詞の副と同意義に用ひられたものであらう。（副詞は觀念語であり、助詞は形式語であつて混同は許されないが、職能と意義とが似てゐるのである。）

前項で述べた格助詞とこの副助詞とを比較して見るのに、格助詞はそれの附く語が、他の語に對して文の成分として如何なる資格をもつてゐるかを示すものであつて、その格の指示性はそれぐの格助詞が固有してゐるのであつて、一つの格を示すものは決して他の資格を示すものに依つて代用されることは出來ないのである。即ち、

彼と見る。
彼を見る。
彼が見る。

に於て「と」と「を」と「が」とは、決して「彼」を同資格のまゝでは交換することは出來ないのである。交換すれば、「彼」

の「見る」に對する資格關係に變動を生ずるのである。之に反して副助詞は決してそれのつく上の語の資格を決定する力は有つてゐないのであつて、それのつく語が下の用言の意義屬性を修飾限定することを示すのである。

雨のみ降る。　風さへ加はる。　曉ばかり憂きものはなし。

右の例に於て「のみ」「さへ」「ばかり」は、上の語「雨」「風」「曉」が下の「降る」「加はる」「憂きものはなし」に對して如何なる格に立つてゐるかといふことを示すのが本義でなくて、下の語の意味にある種の修飾制限を加へることを示すのである。「雨」「風」「曉」が主語であるといふことは、右の副助詞が右の修飾を加へつゝ、傍ら代理的に表したものである。從つて必要なる場合には、格助詞と副助詞とは重ね用ひられるのである。

本をのみ讀む。　名のみの大臣。

夢にまで見たりといふ。　すさまじきのみにもあらず。

これを以て格助詞と副助詞との相違が分るであらう。（なほ格助詞と副助詞との關係は「日本文法論」（五八二頁—五九六頁）を參照されたい。

副助詞はその本來固有の意義を以て一切の格助詞を助けることが出來るのである。その場合には格助詞の下に副助詞の來る場合と、格助詞の上に副助詞の來る場合との二つの場合がある。

（一）副助詞が格助詞の下に來る場合。格助詞の上にある體言が下の用言に對して如何なる資格に立つてゐるかといふことは格助詞に依つて定められるのであるから、その下に附く副助詞は、その體言が如何なる資格上の意義に於て下の用言と關係するかといふことを示すのである。即ち、「本をのみ讀む。」の例に於て言へば、「本」が下の用言「讀

む」に對して所謂客語の資格をもつてゐるといふことは「を」といふ格助詞がこれを定めてゐるのである。從つて「のみ」は「本を」が客語としての如何なる意義を以て「讀む」に對してゐるかを示すのである。即ち本を讀むだけであつて外の動作をしないことを示すのである。換言すれば「本を讀むのみ。」と同意義を示すのである。

この如く格助詞の下に來てあるつとめを果すことは副助詞ばかりでなく、後に述べる係助詞にもあるのであるが、係助詞は用言の表す陳述の方法（用言の述語となる方法）を修飾するのであつて、副助詞のやうに用言の意義屬性を修飾するのでないから混同することはあるまい。

（二）副助詞が格助詞の上に來る場合。この場合は格助詞よりも副助詞の方が體言に近いのであるから、その體言が用言の意義屬性に對して如何なる修飾限定をなすかといふことだけを示して、資格上の意義にまでは及ばないのである。即ち「本のみを讀む。」といふ時には、讀むものが本に限られる事を示すのである。外の新聞や雜誌を讀むのではなくて本だけを讀むといふ意味を示してゐるのである。從つて「本のみ讀む。」と同義なのである。これを一と比較して見れば、

本をのみ讀む。＝本を讀むのみ。
本のみを讀む。＝本のみ讀む。

の如き對比をなすのである。

なほ格助詞の上に副助詞が來る場合に於て、副助詞本來の意義の現れ方は各副助詞毎に依つてちがふのであるが、いづれも下にある格助詞の支配を受けることは次の諸例で明かであらう。

こればかりの事。　婦人のみと思へり。　大臣までになさせ給ひて。

なほ副助詞は前に述べた様に、本來固有の意義を以て一切の格助詞を助けるのであるが、更に本來固有の意義を以て格助詞の代理をすることがあるのである。次の諸例はこれである。

雨の上に風さへ吹き出でぬ。　深山には松の雪だに消えなくに。

彼は名譽のみ求め居れり。　自己吹聽ばかり聞かす。

又副助詞は副詞的の意義を有つてゐるので副詞の下に附くは勿論、體言及び用言に附いて上の語と一體になつて副詞的修飾語となることがある。

僅かばかり御目にかけ申候。　一月ばかり滯在せり。

おやしきまでかへりみちけり。（源氏物語）

なほ副助詞は體言若しくは用言が文の述語となつてゐるものに附いて述語の一部分をなすこともある。

會場に居殘りしは彼一人のみ。　滿目たゞ雪ばかりなり。

夢の如き心地のみす。　たゞ茫然として驚くのみ。

文語の副助詞は次の數語である。その一々の特質と用法とは一切省略する。

だに　すら　さへ　のみ　ばかり　まで　など

〔研究問題〕

（一）各副助詞の特質と用法。　（二）副助詞と格助詞との相關々係。

66 接續助詞

接續助詞は「廣日本文典」では第三類の助詞に入れてあつたもので、動詞・形容詞・形容動詞・助動詞に接續して、これを次の動詞・形容詞などを有する文又は文の一部分に接續せしめる用をなす助詞である。山田孝雄氏は「日本文法講義」(二三八頁)で「接續助詞とは同等の資格を以て對立せる句を結合して一體たらしむる用をなすを本體とするものにして、英獨語の文典などにいふ對立的、又は同列接續詞の文に屬するものに該當するものにして所謂接續詞の本體實にここに存せり。かくてこの類の助詞はこれによりて句と句とを相結合して一體となせるが、各句がその互に同等の資格を以て相合してその混一せる思想を表白したる文の連結をなすものなり。從來この類の助詞を以て用言を助くとせるは皮相の見にして、こは決して一の單語としての用言を助くるにあらずして用言が連語として用ゐられたる時に限りて附屬するものなれば、思想と思想との結合をなすを本性とせるものなり。」即ち、

空晴れたれども風烈し。

右の文中の「ども」といふ接續助詞は「空晴れたり」といふ文と「風烈し」といふ文とを結びつけてゐるのである。且つその結合は意味に於て逆說的になつてゐるのである。かくて接續助詞では、

(一)如何なるものと如何なるものとを接續してゐるか。

(二)如何なる意味のもとに結びつけてゐるか。

(三)如何なる品詞の如何なる形態に結びついてゐるか。

といふ三點が大切であつて、如上の説明はその(一)の立場に立つたものである。次に(二)の立場から文語の接續助詞を分類してみると次の如くになる。

- 條件
  - 假定
    - 順説……ば
    - 逆説……と　とも　も
  - 確定
    - 順説……ば
    - 逆説……ど　ども　も　が　に　を
- 列叙
  - 異時……て　で
  - 同時……ながら　つゝ

次に接續助詞は動詞・形容詞・形容動詞に連るに當つて、その何活用形に連るかといふことに就いては、一定の法則がある。これが(三)であつて、この點を主にして文語の接續助詞を分類すると次の如くになるのである。

(一)未然形につくもの。ば　で　と(形容詞及形容詞型のものに限る)　とも(同上)

(二)連用形につくもの。も　て　つゝ　ながら

(三)終止形につくもの。と(動詞及びラ變型助動詞)　とも(同上)

(四)連體形につくもの。が　に　を

(五)已然形につくもの。ば　ど　ども

以上が大體接續助詞の特質であるが、各接續助詞の特質と用法との説明は一切省略する。

〔研究問題〕

（一）各接續助詞の特質と用法。　（二）接續助詞中に於ける「文法上許容ニ關スル事項」の研究。
（三）「て」「つゝ」「ながら」を接續助詞とするか否かに就いて。

67　係　助　詞

係助詞の「係」は從來「係結（かゝりむすび）」と稱せられた「係（かゝり）」である。係助詞は係になる助詞である。係結に關する法則に組織を與へたのは本居宣長の「紐鏡」（明和八年）「詞の玉緒」（安永八年）であつて、宣長は係を次の三種に分けてこれを「三轉」といひ、之に應ずる結を四十三種として之を「四十三段」と稱した。

（一）「は」「も」「徒（たゞ）」の係。
（二）「ぞ」「の」「や」「何」の係。
（三）「こそ」の係。

大槻博士はその著「廣日本文典」（二七一頁―二八二頁）に於て「結法（むすび）」を左の三種に分類された。

（一）尋常の結法。
（二）「ぞ」「なむ」「や」「か」の結法。
（三）「こそ」の結法。

山田孝雄博士は「著者の研究は助詞中にてもこの係助詞とその他との比較に端を發したるものにして聊從來の誤謬を照破しえたりと信ず。思ふに本居宣長翁の詞の玉緒の眞意は百年後の今日著者によりて始めて明にせられたりといふを憚らず。」（「日本文法論」二四九頁）と言つてをられる通り、氏の研究は從來やゝもすれば格助詞・副助詞とその區別を明かにし得なかつた係助詞の特質を明かにされたのである。

係助詞の特質は次の通りである。

(一)係助詞は下にある用言に關係のある語に附屬してその陳述に勢力を及ぼす助詞である。係助詞は主として副助詞の様に用ひられるのであるが、副助詞は主として下の用言の意義を化裁するのに對して、係助詞はその陳述の力を支配するのである。

副助詞……修飾……→用言の意義（雨さへ降る。月のみ照る。）

係助詞……支配……→用言の陳述力（雨ぞ降る。月こそ照れ。）

譬へていへば、前者は用言のもとの味を變更して甘くしたり辛くしたりする樣なものであるが、後者は用言のもとの味の甘さ、辛さを變更するのでなくて、同じ味甘さ辛さの程度を強めるのである。こゝに副助詞と係助詞との差違がある。

(二)係助詞は下の用言の陳述の力を支配するに當つて、その用言の形態に一定の約束を守らせるのである。これが所謂係結の法則である。則ち係助詞「ぞ」「なむ」「や」「か」が上に來る時には、これに應ずる活用言の活用形は連體形を用ひなければならず、「こそ」が來る時には已然形を用ひなければならぬは勿論、「は」「も」が係となる時には、下の活用言は終止形を以て結ばなければならないのである。これ「は」「も」共に陳述の勢力に大なる關係を及ぼすからである。文法上形態變化を起させることは重要視すべきものである。

(三)文語の係助詞の大部分は、連語の下に附いて、それ〲の意義を表して結となる事が出來る。係にもなり得るし、連語の下に附いて結にもなり得るのである。この特性は山田博士の創見にかゝるものだと言ふ。

價は高からず。　げに面白かりけるは。

山よりも高し。　あまり小舟いつなでかなしも。

花ぞ昔の香に匂ひける。　遂にみまかりけりとぞ。

雪なむ降らぬ。　今一度の御幸待たなむ。

春やとき花やおそき。　さることあるべしや。

世の中は何か常なる。　彼は誰なるか。

色こそ見えね。　こよひの月夜あきらけくこそ。

(四)係助詞が係として用ひられる時には、格助詞や副助詞の下にだけ附いて、決してそれ等の上に置かれることはない。係助詞は副助詞のやうに格助詞のいづれにもつき得るのであるが、決して副助詞の樣に格助詞の上につくことは無いのである。

親にこそ告げたれ、他人には一切語らず。(「親こそに」「他人はに」とは絶對にいはない。)

本をこそ買へ。(「本こそを」とはいはぬ。)

住の江の岸による波よるさへや。(「よるやさへ」とはいはない。)

遠くだにぞ行かざりける。(「ぞだに」とは言はない。)

(五)係助詞と係助詞とは時に重ねて用ひられることがある。

我こそは新島守よ。　行きもこそすれ。

(六)係助詞は格助詞の代理をすることがある。

雨は降らず。　　道も無し。

花ぞ昔の香に匂ひける。　道こそ無けれ。

(七)なほ山田博士は係助詞は接續助詞「ば」の下に附屬して上の句と下の句との關係を緊密に結合することがある。この時は下句の述語に勢力を及ぼすものであることを指摘して居られる。

心あてに折らばや折らむ。(古今集)　さらばぞ親も子はまうけむ。(狭衣物語)

なみなみの人ならばこそあららかにもひきかなぐらめ。(源氏物語)

「日本文法講義」に曰く「これ實に係助詞が陳述の力に關するものたるを證するものにして、かの接續助詞の『ば』の如きも本源はこの『は』にして、それが變形せしものならむの疑あり。又『も』は『と』『ど』の下に附屬して『とも』『ども』の形をなせり、かく或は接續助詞と變じ或は接續助詞を助くるものとして用ゐらるゝこと、これその助くる主體が陳述の力に存するを以てなり。」(三五三頁)

(八)英語などに譯すると、副助詞は大抵副詞に譯されるが、係助詞は之に當る適當な單語がない。

以上が大體係助詞の特質である。これに屬する文語の助詞は次の通りである。特質と用法の說明は省略する。

は　も　ぞ　なむ　や　か　こそ　な(なその格)

〔研究問題〕

(一)各係助の特質と用法。

(二)係助詞中に於ける「文法上許容ニ關スル事項」の研究。
(三)係助詞と格助詞との關係(「日本文法論」六一六頁―六二三頁參照)
(四)係助詞と副助詞との關係(「日本文法論」六二七頁―六五一頁參照)
(五)係助詞相互の關係(「日本文法論」六六九頁―六七七頁參照)

68　終　助　詞

終助詞といふ名稱も山田博士の命名にかゝるものであつて、從來の分類では種々の語につく助詞、或は感動助詞の一部に入れられてゐたものである。

終助詞はその名の示してゐる通り、文の述語の終りに用ひられる助詞である。文の述語に關係してゐる點では、前項の係助詞と同じところもあるのであるが、終助詞は文の述語の終りにだけ用ひられて、決して述語に對する係とはならないのである。又終助詞はこれが述語の終りにつくことによつて陳述が完結されるもので、之を取り去る時には陳述の完結の破れることが多い。これ終助詞は文の述語の終りに附いて希望とか禁制とかそれ本來の意味を附加するからである。單に語調を整へたり、語勢を強めたりするにすぎない間投助詞との區別はこゝにあるのである。即ち間投助詞は文の述語の終りにあることはあつても、之を取去つても述語の意味に變化を來さないのが常である。且つ間投助詞は用ひられる位置が非常に自由であつて、文の述語の終末以外のところにも用ひられるのである。こゝにも終助詞と間投助詞との相違點がある。

文語の終助詞に屬する語は次の通りである。特質と用法の説明は省略する。

が　がな　か　かな　かも　かし　ね　(奈良朝の語)

〔研究問題〕

（一）各種助詞の特性と用法。

60　間　投　助　詞

間投助詞は感動助詞又は咏嘆助詞とも言ふもので、語調を整へ、語勢を加へ、或は餘情を添へ又は感動の意を示すに用ひられる助詞である。從つてこれを文中から取り去つても全體の文意にはさ程の影響は無いのである。いま口語の例ではあるが、

頼んだことは忘れるな。（終助詞）　頼んだことを忘れたな。（間投助詞）

の二つの「な」を比較してみると、前者の「な」を取り去つたり、又同じ意味の下に外の助詞に代へることは出來ないのであるが、（もし強ひて之を行へば意味が變つてしまふのである）後者は之を取り去つても前ほどの意味の相違は來さないし、又「ね」といふ助詞に代へる事も出來るのである。こゝに終助詞と間投助詞の相違がある。又前項でも述べた様に、間投助詞は文中に於ける位置が終助詞その他に比して比較的自由なのである。（勿論助詞としての規約はあるが）

間投助詞と間投詞とは混同されてはならない。間投助詞は形式語であり、間投詞は觀念語である。間投助詞は文の頭に立ち得ることは絶對に無いが、間投詞は文の頭にも立ち得るのである。これ前者には獨立性が無く、後者にはこれがあるからである。

文語の間投助詞は次の通りである。特質と用法の説明は省略する。

よ　や　し　を　な

右の外奈良朝時代の間投助詞には、

ろ　い　ゑ　や　し　ら

の如き特殊な間投助詞もあつた様である。

〔研究問題〕

(一)各間投助詞の特性と用法。　(二)各助詞と活用言及び體言との連續總括。

第十章　副　詞

70 副詞の本義　副詞は意義の上よりいへば一種の屬性觀念をあらはす觀念語である。職能の上よりいへば他の語と依存關係に立つ品詞である。形態の上よりいへば語形に變化のない品詞である。

このことを少しく敷衍してみよう。

副詞は事物の動作・性質・狀態等を修飾限定する品詞である。品詞でいへば動詞・形容詞・形容動詞を修飾限定する語である。

ゆる〳〵歩む。（動作——動詞）

甚だ美し。（性質——形容詞）

いたく靜かなり。（狀態——形容動詞）

しかるに副詞自らも一種の狀態や程度を表す詞であるから、副詞は他の副詞をも修飾限定する。

なほしばし試みよ。

右の例はいづれも副詞が一單語としての用言・副詞を修飾してゐる場合であるが、副詞は用言が根帶となつて出來てゐる連語、又は文をも修飾限定するのである。

雨いまだ止まず。　彼は恐らく歸らざるべし。

右の「いまだ」「恐らく」は決して「止む」「歸る」といふ動詞のみを修飾してゐるのではなくて、「止まず」「歸らざるべし」といふ連語を修飾してゐるのである。

昔男ありけり。　畢竟注意の足らざる故なり。

右の「昔」「畢竟」といふ副詞は下の文全體を修飾してゐるのである。

一昔男ありけり。（A）
一男昔ありけり。（B）

畢竟注意の足らざる故なり。（A）
注意の畢竟足らざる故なり。（B）
注意の足らざる畢竟故なり。（B）

右のAとBとを比較して見れば副詞が文を修飾してゐることが分るであらう。

然るに次の如き副詞の用法は如何であらう。

明日は恐らく晴天なるべし。　この小包はけだし本ならむ。

右の「恐らく」「けだし」といふ副詞の下には用言もなければ他の副詞もなく且つ文もない。たゞ體言と助動詞の連

語があるだけである。しかもこの用言の無い連語を副詞が完全に修飾してゐるのである。これは動作や狀態や程度の修飾ではなくて所謂陳述の修飾なのである。これ「晴天なるべし」「本ならむ」は用言を有つてはゐないけれども、それ〲立派に「明日は」「小包は」の述語となつてゐるからである。このことは副詞の修飾としては注意すべき事實である。

又副詞の中には體言の修飾をするものがある。

僅か一日の長にすぎず。　山はやゝ東の方に聳ゆ。

右の「僅か」「やゝ」は「一日」「東」といふ體言を修飾してゐるのである。且つ格助詞「の」を伴つて體言の形容詞的修飾語となる例もあるのである。

かりそめのかくれが。　つひのすみか。
かねての願ひ。　まづの人々。
稀の細道。　やがての別れ。
うたての仰。　たゞの身。

かういふのを文法的に如何に解釋するかは頗る興味ある問題である。

なほ副詞に就いて重要なるはその位置である。副詞はその修飾限定すべき語の前に必ず置かれなければならない。この被修飾語に前行するといふことは、副詞的修飾語に限らず、形容詞的修飾語に於ても同樣であつて、國語の一大法則である。

帽子を輕く造る。　花美しく咲く。

右の「輕く」「美しく」は品詞としては形容詞であるが、修飾語としては副詞的修飾語である。從つて「帽子」「花」などを修飾したりしないのである。このことは品詞としての副詞に就いても言はれ得ることである。たゞ被修飾語の直上に置かれないことはきゝあるが、その上にあることに於ては變りないのである。

容貌甚だ母に似たり。　我が軍大いに敵兵を敗る。

この時に、副詞の下に被修飾語と見えるものが二つ以上あつて、どれを副詞が修飾するか分らない場合がある。

我が軍大いに強豪なる敵兵を敗る。

「大いに」は「強豪なる」にかゝるか、「敗る」にかゝるか分らない。措辭法に注意すべきである。

なほ副詞の本義に關しては研究すべき多くの問題があるが、紙面の都合で全部研究問題に讓ることにする。

〔研究問題〕

（一）體言と副詞との區別。（副詞と名詞、副詞と數詞の關係）　（二）副詞と形容詞との區別。

（三）單語としての副詞と副修としての副詞との關係。

（四）副詞の語尾の「に」「と」と形容動詞の語尾「に」「と」との區別。

（五）副詞が體言を修飾することの文法的解釋。

71　副詞の種類

副詞の中に接續詞及び感動詞を入れることに就いては異論もあるが、副詞（本書にいふ副詞）を次の如く分類することに對しては山田孝雄博士の說に從ひたい。

副詞 ┌ 属性の副詞 ┌ 情態の副詞
　　 │　　　　　 └ 程度の副詞
　　 └ 陳述の副詞

右の分類は、場所・時間・原因・方法などの如き副詞の意義のみによる分類にいかにまさつてゐるか、又その分類原理に就いては、「日本文法論」（四八三頁―五二二頁）に詳論がある。よつて見るべきである。

情態の副詞の例。

あたかも　また　つひに　おもむろに　つと　はるぐ　ほとく

程度の副詞

いと　甚だ　やゝ　最も　たゞ　殊に　頗る

陳述の副詞

断言の副詞

必ず　まさに　もつとも　いさ　つやく　つゆ　さすが　苟も　所詮　畢竟　恰も　さながら　さも

[illegible]の副詞

たゞ　いかゞ　いかで　あに　蓋し　恐らく　よも　若し　たとひ　よし

〔研究問題〕

（一）副詞分類の原理（接續詞・感動詞を副詞とする論の批判もこめて）　（二）情態の副詞の特性と用法。

（三）程度の副詞の特性と用法。　（四）陳述の副詞の特性と用法と分類。

（五）
そつと　立ち止る。（A）
そつと　牛の如し。（B）
まことに　牛の如し。（C）
以上の比較研究。

（六）形式副詞の論。

第十一章　接續詞

接續詞は觀念語であつて形態の變化がない。この點は體言に似てゐるが、體言とは文章法上の職能を異にする。即ち體言は文の主要成分となることが出來るが、接續詞は所謂接續語と稱して文の主要成分とは獨立したものとなるのである。

72　接續詞の本義

接續詞は單語・連語・節若しくは文を接續する語である。

雨及び風に惱まさる。（單語と單語）　書物の原稿並びに演說の腹案を作る。（連語と連語）
春來れども、しかも花咲かず。（節と文）　發言は自由なり。されどそは政治問題に亙るべからず。（文と文）

然るに、これには異說があつて、これ等の接續詞は、純粹の接續の用をしてゐるのではなくて、實は副詞であると論ぜられてゐる。即ち接續詞は文を接續するといふが事實は文を接續するのではないといふのである。何故かといふに、

山を越え又水を渉る。　春來れり、されど花未だ咲かず。

に於ける「又」「されど」は上下二文の意義の關係は示すけれども、形體上二文を結合して一體とすべき勢力は有つて

ゐない。假りに右の文からこれ等接續詞と稱せられる「又」「されど」を除き去つて、

山を越え、水を渉る。　春來れり、花未だ咲かず。

としても上下の文は決して獨立して了ふのではない。前者は「越え」といふ動詞の中止形に於て、後者に於ては位置の接續と文意の連絡に依つて相接續してゐるのである。この「又」「されど」は上下の文を接續させるといふよりは、上下の文に對して或意義を加へるのである。即ち「又」は「再び」とか「更に」とかを、「されど」は「併しながら」とか「とはいふものの」とかいふ意味を加へるので、これ等の語は副詞といふべきものである。むしろ、

山を越えて水を渉る。　春來れるに花未だ咲かず。

の例に於ける「て」「に」の如き接續助詞こそ本當に文の接續をなす單語といつてよいので、從來接續詞といはれた大部分のものは、西洋文典でいふ Conjunction に當るものではなくて、Conjunctive adverb 或は half-conjunction に當るのであると說いて接續詞を否定するのである。右に述べたことは次の例でも分る。

松・竹・梅を瓶に挿す。

この「松」「竹」「梅」を連續させてゐるのは、各單語の位置である。三單語が並んで用ひられてゐるから連接してゐるのである。又、

松と竹と梅とを瓶に挿す。

に於て「松」「竹」「梅」を連續させてゐるのは「と」といふ助詞の力であつて所謂接續詞は用ひられてゐないのである。かくの如く語と語とを接續させるのは、語の位置か若しくは助詞の力であつて、接續詞などに依るのではないからと

いつて接續詞を否定するのである。そして所謂接續詞は必ず副詞的の意味を發揮してゐるから、

　山又山が高し。　川又川が深し。

とはいへないが、

　山又山を越えゆく。　川又川を渉りゆく。

とは言へるのである、從つて「又」は副詞と見るべきといふのである。

以上が接續詞否定論の大要であるが、この否定説を全部肯定してよいであらうか。

　兄弟を招く。

右の文に於て「兄」と「弟」とは語の相接することに依つて接續してゐる。併し、これは、

　兄が弟を招く。（A）　兄と弟とを招く。（B）

AであるかBであるか文意が明かでない。故に若しBの意味を明瞭にするためには、

　兄と弟とを招く。　兄及び弟を招く。

の如く言ふのである。この場合若し「と」が接續の用をしてゐるのであるならば、「及び」も亦接續の用をなしてゐると言はなければならない。又、

　山又山を越えゆく。（A）　雨又降り來れり。（B）

AとBとに於ける「又」には用法の相違がある筈である。即ちAの「又」は「及び」「と」と置き換へて、

　山及び川を越えゆく。　山と川を越えゆく。

と言ふことが出來るのであるが、Bの「又」は決して「及び」や「と」と置き換へる事が出來ないのである。これAの「又」は接續詞として用ひられて居るからであり、Bの「又」は副詞として用ひられて居るからである。又、

雨降つて涼風起る。

の文に於て「て」は接續の用はなしてゐるが、「雨降る」といふ事實と、「涼風起る」といふ事實とは、時間的に前後の順序で連つてゐるものであるか、前者が原因で後者が結果であるのか判然しない。故に之を孰れかに判然たらしめるためには、

雨降り而して涼風起る。　雨降りために涼風起る。

の様に言はなければならない。又、

春來れり、されど花未だ咲かず。　春來れり、花未だ咲かず。

の二者では嚴密に言つて意味がちがふ筈である。後者は前者に比して意味がはるかに曖昧である。

之を要するに、語や文の接續は、國語では接續詞否定論者のいふ様に、述語になつてゐる活用言の中止形や、語の連接的位置や、接續助詞に依つて表すことが出來るが、それだけでは不十分なところがあり、又意味の判然としてゐない場合もあるので、この缺陷を補ふために所謂接續詞が發達して來たのだと思はれる。且つ、之を全部副詞とするにしても、その全部が接續的の用言に立ち得る譯でも無いから、副詞の接續法といふ共通的用法を認める譯にもゆかない。故に副詞が轉じて接續詞となつてゐると見て、その純粹に副詞として用ひられてゐる場合と區別しなければならない事情にあるのである。

故に接續詞はやはり之を一つの獨立の品詞として認めなければならないと思ふ。

〔研究問題〕

(一)接續詞否定論の研究。　(二)「即」「爲」「處」「故」「條」などを接續詞とするの可否。

73 接續詞の種類

接續詞は普通これを(一)並列的接續詞と、(二)條件的接續詞とに分ち、なほそれを次の如くに分つてゐる。

(一)並列的接續詞	1 同格的	及び　並びに　又
	2 累加的	次に　ついで　而して　なほ　且つ　加之
	3 選擇的	はた　若しくは　或は　就中
(二)條件的接續詞	1 順說的	されば　故に　從って　因って
	2 逆說的	されど　されども　然るに　併し　さるに　さりながら　併しながら　但し

右の分類法はその表す意義を主として分類したものである。なほこれを職能上分類する時は次の如き例に用ひられるものをあげることが出來るであらう。

(一)文の同一成分内の語と語とを接續するもの。

京都及び奈良は日本の舊都なり。(主語)　京都及び奈良を見學す。(客語)

京都及び奈良の歴史を研究す。(修飾)　日本の舊都は京都及び奈良なり。(述語)

(二)節と節、節と文とを接續するもの。

山紫にして且つ水明かなり　交通の便あれども、しかも僻陬のそしりを免れず。

(三)文と文とを接續するもの。

論旨は透徹せり。然れども賛否詳かならず。　入場は無料なり。但し婦人は遠慮せられたし。

右の(二)(三)に於ける接續詞は之を文の成分上獨立語と見られるが、(一)に於けるものは接續詞をもこめて一成分と見るべきであらう。併し、これとて接續語と見ても差支はあるまいが、この場合接續詞の代りに接續助詞が用ひられてゐる時は當然同一成分に含めるのであるから之に準じて考へるのが合理的であらう。

第十二章　間投詞

間投詞は感動詞とも感嘆詞ともいふ。感動した時に發する語の品詞論的名稱である。間投詞といふのは西洋文法の Interjection の譯語であつて、文章の中に投げるといふ意味である。感嘆を表す語の多くは他の語の中に挿入することが出來る所からの名稱である。

74　間投詞の本義

間投詞はその性質思想の分析綜合によつてなりたつたものでなく、それ全體である感情の一團を表現してゐるのであつて、思想の調節が語面に現れてをらない。これ間投詞を文章語 (Sentence word)、又は文章と同價値のもの (Sentence equivalent) といふ所以である。「あゝ」といふ一語は「私は大變嬉しい。」といふ意味も「私は非常に悲しい。」といふ意味も「私はひどくびつくりした。」といふ意味も表し得るのである。この樣に間投詞には文章的の性質があるから、品詞論で說かないで文章論で說くべきものの樣にも思はれるが、形式上一つの單語として扱つて、品詞論で說くのである。卽ち形態・意義・職能の上から一つの單位として扱ふのである。

感動詞は觀念語であつて語形の變化が無い。この點は體言と同じである。併し體言は文の主要成分となることが出來るが、感動詞は決して文の主要成分となることが出來ない。加之、文の成分としては所謂獨立語と言はれるもので文の主要成分には何等の關係もない獨立した要素と見るのである。卽ち感動詞は他の品詞と共同して文の成分となることが出來ないのである。從つてこれを取り去つても文の論理的構成には何等の影響も及ぼさないのである。

山田孝雄博士はこの感動詞を接續詞と共に副詞の一種と見てをられる。接續副詞・感動副詞といふ名稱はこゝから來て居る。氏に從へば所謂感動詞は「此殿は、むべも、むべも、富みけり。さき草の、あはれ、さき草のはれ。」の中の「あはれ」「はれ」の如きものであつて、所謂感動詞には全文の隨意の所に投入し得るといふ性質は無いし、又獨立語といつて文の主要成分に關係の無い樣に言はれて居るけれども、實はこれは必ず或る思想全體の傾向の豫示をなすものであつて、若し單獨に用ひるとせば、一つの完全思想を發表してこの一語に寓したにすぎないものであつて、このやうな用法は副詞等にもあるといふのである。卽ち國語の感動詞は文章の成分外のものでなくて成分内のものであつて、用法上に一定の法則のあるものであると論じ、副詞の一種と見てをられるのである。

これには一應の理のあること勿論であるが、間投詞と純粹の副詞との間にはその趣を異にするものがあるのである。

あはれ、今年の秋もいぬめり。
はやも、今年の秋もいぬめり。
けだし、今年は豐年なるべし。

右の「あはれ」が下の全文に對する關係と、「はやも」「けだし」の下に對する關係とは自ら相異なるものがあるであ

らう。前者は對等であるが後者は從屬である。故に後者では、

今年の秋もはやもいぬめり。　今年はけだし豊年なるべし。

と多少の無理をすれば言ひ得るのであるが、前者に於ては、

今年の秋もあはれいぬめり。

とは言ひ得ないのである。本講では間投詞を獨立の一品詞と立てる說に從ふのである。

なほ文法家によつては間投助詞をも間投詞の中に入れて說いてゐる人もあるが、間投助詞は形式語であるから、文の成分の附隨的なるものとなつて決して獨立の要素にはならないのである。之に反して間投詞は上述の樣に觀念語であつて獨立語となり得るのであるから、決して同一範疇のものとしては論ぜられないのである。

〔研究問題〕

（一）言語としての間投詞の本質。　（二）間投詞を副詞と見る說の深究。

75　間投詞の種類

間投詞は二種類に分けられる。その一は感動を表すものであつて、感動の性質に從つて驚愕・恐怖・喜・怒・哀・樂等種々の語が入り得るであらう。その二は意志を表すものであつて、呼掛・誘起・應答などを屬せしめ得るであらう。

あゝ　あゝ、悲しい哉。　　あな　あな、怨めしや。

あら　あら、あつやとて兜巾をぬぎて。　　あはや　あはや、法皇の流されおはしますぞや。

はれ　はれ、苦しや。　　あつぱれ　あつぱれ、功名手柄も立てむものを。

や　や、お局此のかさ見てたび候へ。　やよ　やよ時雨物思ふ袖のなかりせば……。

いで　いで、消息きこえん。　いざ　鏡山、いざ立寄りて見てゆかむ。

すは　すは大事の攻め寄せたるぞ。　すはや　すはや、一大事ござんなれ。

以上「文語法概說」の稿を終るのであるが、說き來つて七十五項、豫定頁數を甚しく超過したるにも拘らず、品詞論としてはなほ單語の構成や語の運用の項を逸してゐるばかりでなく、文法の綜合的研究たる文章論には一指だも觸れることが出來なかつたのである。且つ、豫定頁數以後に於ける助詞・副詞・接續詞・間投詞の四品詞は簡略殆どその項目的說明にすぎずして終つてしまつたのである。これ一つには精確なる題目と記述の平易といふ內規に拘りすぎたためによるのであるが、題目に對する豫定頁數の根本的算定問題にも關することであると共に、大半は又繁簡その宜しさを得なかつた筆者の罪にも歸すべきものであらう。この點、新研究に於て殆ど加ふることなく、多くは舊稿の補訂にすぎなかつたであらう事に加へて、切に讀者の諒恕を請ふ次第である。（昭和八・一一・六）

昭和八年十二月二十五日印刷
昭和八年十二月三十日發行

國語科學講座
（第六回配本）

東京市神田區錦町一丁目十番地
編輯兼發行者 株式會社 明治書院
代表者 三樹退三

東京市神田區三崎町三丁目八十九番地
印刷者 細谷祐三

發行所 東京市神田錦町一丁目 株式會社 明治書院